

# 中道遺跡

—農業基盤整備事業に伴う発掘調査—

1 9 9 8

長岡市教育委員会

# 序

この報告書は、長岡市栖吉町での団体営圃場整備事業に伴って、平成6年から3カ年にわたって行いました中道遺跡の発掘調査の記録です。

中道遺跡は、地元栖吉町の水沢信二さんや青木佐太雄さんが、農作業のかたわら縄文土器や中世の陶磁器などを採集されていたのがきっかけで発見された遺跡です。

今回の発掘調査では、縄文時代中期の竪穴住居跡からトチの実の大量出土、縄文時代中期・晩期の火災に遭った竪穴住居跡、中世の墓穴説もある地下式横穴が12基並んでいたことをはじめ、学会の注目を集める遺構・遺物の発見が相次ぎました。

調査の成果は、調査中から一部が『長岡市史通史編』に取り上げられるなど、栖吉地区を含む長岡市の歴史に新しい1ページを加えています。

中道遺跡の発掘調査中には、地域住民をはじめ多数の市民や、市内の児童・生徒が見学で遺跡を訪れました。このことは発掘調査を通して、多くの人々が埋蔵文化財に対する理解と認識を深められたことと思います。また、本報告書が学術研究においても広く活用されることを希望します。

最後になりましたが、今回の調査には新潟大学名誉教授甘粕健先生、國學院大学教授小林達雄先生、東京都立大学教授小野昭先生、事業主体の長岡市農業協同組合、栖吉町圃場整備協議会、栖吉町町内会をはじめ、多くの方々や機関から御指導・御協力を賜りました。心からお礼を申し上げます。

平成10年3月

長岡市教育委員会

教育長 大 西 厚 生

## 例 言

- 1 本書は、新潟県長岡市栖吉町にある中道遺跡の発掘調査の記録である。
- 2 中道遺跡の発掘調査は、団体営土地改良総合圃場整備事業（栖吉南部地区）計画に伴って平成6年度から8年度まで現地での発掘、平成9年度に整理作業と報告書の作成を行った。  
なお、発掘調査を行った年次ごとの調査概報は、その年度に発行している。
- 3 発掘調査は、事業主体者の長岡市農業協同組合から委託を受けて、長岡市教育委員会が実施した。
- 4 発掘調査の経費は、長岡市農業協同組合と長岡市が費用負担契約に基づいて、事業経費のうち農家が負担する20%相当額を長岡市が国庫補助金及び県費支出金の交付を受けて負担し、残りの80%を長岡市農業協同組合が負担した。
- 5 発掘調査の体制は、次のとおりである。  
調査主体 長岡市教育委員会（教育長 大西厚生）  
調査担当者 駒形敏朗（長岡市教育委員会職員）  
調査員 小林伸治（長岡市教育委員会職員、平成6・7年度）  
鳥居美栄（長岡市教育委員会職員、平成8・9年度）  
整理調査員 小熊博史（長岡市立科学博物館職員）  
広井 造（長岡市立科学博物館職員）  
調査補助員 神林昭一（新潟県文化財保護指導員、平成6・7年度）  
作業員 長岡市栖吉町有志・長岡市民ほか  
調査事務 長岡市教育委員会生涯学習課（課長 廣川清喜・鈴木 蔵）
- 6 発掘調査で出土した遺物及び測量図面並びに写真等は、長岡市教育委員会が保管している。  
なお、第51号住居跡出土のトチの実と、第34号住居跡の複式炉は調査地から取り上げて、長岡市郷土史料館に保存・展示している。
- 7 出土品に出土位置などの記入は、NM（遺跡略称名）－取上げ番号－大グリッド－小グリッド（若しくは遺構番号）－出土層序の順で記入した。
- 8 本報告書の作成は、駒形・鳥居・小熊・広井が図版の作成から本文の執筆まで、整理作業員の補助を受けて行い、駒形が全体をまとめた。なお、石器の一部は相田智子（新潟大学生）が実測・トレースをした。なお、本文の執筆分担は、鳥居：第1章2(1)・第2章3(4)、小熊：第2章3(1)・第4章2、広井：第1章2(2)・第3章3・第4章3で、その他は駒形が執筆した。
- 9 挿図のうち、地形図等で方位の記入がないものは、真北を図の上にそろえた。また、遺構平面図の方位は真北を指す。遺構断面図脇の数字は、標高を表している。単位はメートルである。
- 10 遺構は、種別ごとに次の略称を用い、一連の番号を付した。なお、小さいピットは大グリッドごとでの一連番号である。  
竪穴住居跡：H、掘立柱建物跡：SB、フラスコ状ピット：FP、土壇：GP、地下式横穴：SX、井戸跡：SE、柱穴・小ピット：P
- 11 発掘調査から本報告書の作成まで、多数の方々や機関から御指導、御協力をいただきました。氏名等は明記しませんが、ここに心から感謝申し上げます。

# 目 次

第1章 中道遺跡の発掘調査	1
1 発掘調査に至るまで	1
2 環境	2
(1) 地理的環境	2
(2) 歴史的環境	4
3 土層序	5
4 発掘調査	5
(1) 発掘調査の方法	5
(2) 発掘調査の経過	6
第2章 縄文時代の中道遺跡	7
1 総説	7
2 遺構	9
(1) 竪穴住居跡 (2) 掘立柱建物跡 (3) フラスコ状ピット (4) トチの実ピット (5) その他の土壙	
(6) 弓矢出土のピット	
3 遺物	41
(1) 縄文土器 (2) 土製品 (3) 石製品 (4) 石器	
第3章 中世の中道遺跡	80
1 総説	80
2 遺構	80
(1) 地下式横穴 (2) 墓穴 (3) 土壙 (4) 井戸	
3 遺物	85
(1) 中世以前の遺物 (2) 中世の遺物 (3) 近世以降の遺物	
第4章 まとめ	88
1 縄文集落の変遷	88
2 縄文土器の特色と変遷	90
3 中世の集落と遺物	93
附編	99
自然科学分析調査報告書 (株式会社 古環境研究所)	

## 挿 図 目 次

第1図	中道遺跡の位置と周辺の地形	第36図	縄文中期フラスコ状ピット(8)
第2図	栖吉周辺の遺跡分布	第37図	縄文中期フラスコ状ピット(9)
第3図	土層柱状図	第38図	縄文中期フラスコ状ピット(10)
第4図	弓筈出土ピット及び弓筈並びに出 土土器	第39図	縄文中期フラスコ状ピット(11)
第5図	中世遺物の分布状況及び接合関係	第40図	縄文中期フラスコ状ピット(12)
第6図	中世の集落概念図	第41図	縄文中期フラスコ状ピット(13)
第7図	縄文時代遺構全体図・グリッド図	第42図	縄文中・後期トチの実ピット
第8図	縄文中期竪穴住居跡(1)	第43図	縄文遺物出土位置図(1)
第9図	縄文中期竪穴住居跡(2)	第44図	縄文遺物出土位置図(2)
第10図	縄文中期竪穴住居跡(3)	第45図	縄文遺物出土位置図(3)
第11図	縄文中期竪穴住居跡(4)	第46図	縄文遺物出土位置図(4)
第12図	縄文中期竪穴住居跡(5)	第47図	縄文遺物出土位置図(5)
第13図	縄文中期竪穴住居跡(6)	第48図	縄文遺物出土位置図(6)
第14図	縄文中期竪穴住居跡(7)	第49図	縄文遺物出土位置図(7)
第15図	縄文後期竪穴住居跡・掘立柱建物跡(1)	第50図	縄文遺物出土位置図(8)
第16図	縄文後期掘立柱建物跡(2)	第51図	縄文土器(1)
第17図	縄文後期掘立柱穴跡(1)	第52図	縄文土器(2)
第18図	縄文後期掘立柱穴跡(2)	第53図	縄文土器(3)
第19図	縄文晩期竪穴住居跡(1)	第54図	縄文土器(4)
第20図	縄文晩期竪穴住居跡(2)	第55図	縄文土器(5)
第21図	縄文晩期竪穴住居跡(3)	第56図	縄文土器(6)
第22図	縄文晩期竪穴住居跡(4)	第57図	縄文土器(7)
第23図	縄文晩期竪穴住居跡(5)	第58図	縄文土器(8)
第24図	縄文中・後期炉跡(1)	第59図	縄文土器(9)
第25図	縄文中・後期炉跡(2)	第60図	縄文土器(10)
第26図	縄文中・後期炉跡(3)	第61図	縄文土器(11)
第27図	縄文中・後期炉跡(4)	第62図	縄文土器(12)
第28図	縄文中・後期炉跡(5)	第63図	縄文土器(13)
第29図	縄文中期フラスコ状ピット(1)	第64図	縄文土器(14)
第30図	縄文中期フラスコ状ピット(2)	第65図	縄文土器(15)
第31図	縄文中期フラスコ状ピット(3)	第66図	縄文土器(16)
第32図	縄文中期フラスコ状ピット(4)	第67図	縄文土器(17)
第33図	縄文中期フラスコ状ピット(5)	第68図	縄文土器(18)
第34図	縄文中期フラスコ状ピット(6)	第69図	縄文土器(19)
第35図	縄文中期フラスコ状ピット(7)	第70図	縄文土器(20)
		第71図	縄文土器(21)

- 第72図 縄文土器(2)
- 第73図 縄文土器(3)
- 第74図 縄文土器(24)
- 第75図 縄文土器(25)
- 第76図 縄文土器(26)
- 第77図 土偶(1)
- 第78図 土偶(2)
- 第79図 土偶(3)
- 第80図 三角形土版・スタンプ状土製品・土錘・鐔形  
土製品・有孔球状土製品・円板状土製品
- 第81図 土製耳飾
- 第82図 石鏃(1)
- 第83図 石鏃(2)
- 第84図 石槍・石錐
- 第85図 打製石斧(1)
- 第86図 打製石斧(2)
- 第87図 打製石斧(3)・石篋
- 第88図 磨製石斧(1)
- 第89図 磨製石斧(2)
- 第90図 磨製石斧(3)
- 第91図 磨製石斧(4)
- 第92図 小形磨製石斧
- 第93図 三日月形石器・石匙
- 第94図 スクレーパー・板状石器
- 第95図 石錘
- 第96図 敲石(1)
- 第97図 敲石(2)・凹石(1)
- 第98図 凹石(2)
- 第99図 凹石(3)・磨石
- 第100図 小形石皿・石皿(1)
- 第101図 石皿(2)
- 第102図 石皿(3)
- 第103図 砥石
- 第104図 硬玉製大珠・玉類
- 第105図 三角壻石製品・三脚石器・石剣・石  
刀・石冠・独鈷石(1)
- 第106図 独鈷石(2)
- 第107図 石棒(1)
- 第108図 石棒(2)
- 第109図 縄文集落変遷図
- 第110図 中世の遺構全体図・地下式横穴(1)
- 第111図 中世の地下式横穴(2)
- 第112図 中世の地下式横穴(3)
- 第113図 中世の地下式横穴(4)
- 第114図 中世の地下式横穴(5)
- 第115図 中世の地下式横穴(6)
- 第116図 中世の土壌(1)
- 第117図 中世の土壌(2)
- 第118図 中世の土壌(3)
- 第119図 中世の土壌(4)
- 第120図 中世の土壌(5)
- 第121図 中世の土壌(6)
- 第122図 中世の土壌(7)
- 第123図 中世の土壌(8)
- 第124図 中世の土壌(9)
- 第125図 中世の井戸跡
- 第126図 中世以前の遺物・中世の遺物(1)
- 第127図 中世の遺物(2)
- 第128図 中世の遺物(3)
- 第129図 中世の遺物(4)
- 第130図 中世の遺物(5)
- 第131図 中世の遺物(6)
- 第132図 中世の遺物(7)
- 第133図 中世の遺物(8)・近世以降の遺物(1)
- 第134図 中世の遺物(9)・近世以降の遺物(2)
- 第135図 中世の遺物(10)
- 付 図 中道遺跡遺構全体図

## 写 真 目 次

- |      |                  |      |             |
|------|------------------|------|-------------|
| 写真1  | 中道遺跡周辺の空中写真      | 写真25 | 石器(3)       |
| 写真2  | 中道遺跡全体空中写真       | 写真26 | 石器(4)       |
| 写真3  | 発掘風景             | 写真27 | 石器(5)       |
| 写真4  | 縄文中期竪穴住居跡(1)     | 写真28 | 土製品・石器(6)   |
| 写真5  | 縄文中期竪穴住居跡(2)     | 写真29 | 石器(7)       |
| 写真6  | 縄文中期竪穴住居跡(3)     | 写真30 | 石器(8)       |
| 写真7  | 縄文中期フラスコ状ピット     | 写真31 | 石器(9)       |
| 写真8  | 縄文後期の住居跡・トチの実ピット | 写真32 | 石器(10)      |
| 写真9  | 縄文晩期竪穴住居跡        | 写真33 | 石器(11)      |
| 写真10 | 遺物出土状況(1)        | 写真34 | 石器(12)      |
| 写真11 | 遺物出土状況(2)        | 写真35 | 石器(13)・玉類   |
| 写真12 | 縄文土器(1)          | 写真36 | 石製品(1)      |
| 写真13 | 縄文土器(2)          | 写真37 | 石製品(2)      |
| 写真14 | 縄文土器(3)          | 写真38 | 石製品(3)      |
| 写真15 | 縄文土器(4)          | 写真39 | 中世遺構群空中写真   |
| 写真16 | 縄文土器(5)          | 写真40 | 中世の地下式横穴    |
| 写真17 | 縄文土器(6)          | 写真41 | 中世の土壇       |
| 写真18 | 縄文土器(7)          | 写真42 | 中世の骨と六道銭    |
| 写真19 | 縄文土器(8)          | 写真43 | 中世遺構と遺物出土状況 |
| 写真20 | 土製品(1)           | 写真44 | 中世の遺物(1)    |
| 写真21 | 土製品(2)           | 写真45 | 中世の遺物(2)    |
| 写真22 | 土製品(3)           | 写真46 | 中世の遺物(3)    |
| 写真23 | 石器(1)            | 写真47 | 中世の遺物(4)    |
| 写真24 | 石器(2)            | 写真48 | 中世の遺物(5)    |

## 第1章 中道遺跡の発掘調査

### 1 発掘調査に至るまで

中道遺跡の発掘調査は、日本人の主食である米を栽培する水田を、稲作作業がより効率的で、良質な水田に改良する圃場整備事業に伴って行った調査である。栖吉町地内での圃場整備事業は、初めに長岡市農林部が主管する中山間地域農村活性化総合整備事業（以下「中山間事業」と言う）が行われ、次いで長岡市農業協同組合（以下「JA長岡」と言う）が事業主体の団体営土地改良総合圃場整備事業栖吉南部地区（以下「団体営圃場整備」と言う）が実施されている。

これら圃場整備事業と遺跡との本格的なかかわりは、中山間事業からである。長岡市教育委員会（以下「市教委」と言う）は、中山間事業が計画された段階から、事業主管課と遺跡の保護について協議を重ね、平成3年度に国道352号線以北の事業計画地を対象に確認調査を行った。調査では、大明神と栖吉の2遺跡は事業計画地に広がっていないこと、中世の陶磁器の破片が離れた3カ所の発掘グリッドから出土することを確認した。この資料を基に新潟県教育庁文化行政課（以下「県教委」と言う）と協議を行い、中世遺物出土地点は、出土グリッドの周辺を広げて再調査を行う必要があるとの指導を受けた。

平成4年度には、中世遺物出土地点の再確認調査と合わせて、長岡市史編さん事業の過程の平成3年に発見された松葉遺跡の確認調査、新規に計画された団体営圃場整備の計画地にある中道遺跡の範囲確認などを目的に、確認調査を実施した。その結果、中世遺物出土地点は遺跡でないこと、松葉は事業計画地に縄文時代早期・中期と古代それに中世の集落跡の一部が広がっていること、中道については縄文時代中期から晩期と中世の集落跡が重なって広い範囲に存在すること、などを確認した。

市教委は平成4年度調査で得た資料を基に、県教委の指導を受けながら、中山間事業・団体営圃場整備それぞれの事業主体者と、遺跡の保存方法についての協議を行った。全体の範囲は不明であるが、遺跡の一部（面積約3,500m<sup>2</sup>）が事業計画地に含まれる松葉は、遺跡の記録を保存することを目的にした発掘調査を、平成5年度に実施することで協議が整った（小熊・広井1994）。

松葉遺跡の協議は1～2回の協議で合意に至ったが、団体営圃場整備にかかる中道遺跡は、遺跡の保存方法や、発掘調査の調査年次などの問題が山積しているため、協議が整うまでには多くの時間を要した。これには、中道は遺跡全体が事業地内に含まれるため、記録保存の発掘調査には多くの時間と経費を要することが、協議に時間が掛かった要因のひとつであった。市教委は、中道遺跡の現状保存若しくは盛土保存を要望し、事業主体のJA長岡と地元の栖吉圃場整備協議会（以下「協議会」と言う）の要望は、記録保存と圃場整備の早期竣工であった。保存方法の協議を重ねるうち、①現状保存は事業地の計画変更を伴うため困難であり、②盛土保存は中道が周囲より一段高いため、圃場の整備には中道を削平する以外に方法がないことなどが分かった。このため発掘調査を行って記録を保存することで基本的に合意した。このことは、県教委にも伝えて理解を得た。

次に発掘調査の開始年度と調査年次についての協議を行った。まず市教委から現地の発掘調査に3年、報告書作成に1カ年の時間が必要であることを示した。JA長岡と協議会は、圃場整備の一日も早い竣工を望むことから発掘期間の短縮を希望した。しかし、協議を重ねるうちにJA長岡と協議会は、遺跡の存続期間などの中道遺跡がもつ内容や、積雪地帯のために1年のうちで現地での発掘期間は6カ月間程度しか見込めないことなどから、市教委が示した調査期間を理解し、ようやく協議が整った。そして、平成6年6月6日から中道遺跡の発掘調査を開始した。



## 2 環境

### (1) 地理的環境（第1図）

長岡市は新潟県のほぼ中央に位置し、市域中央の平野部に信濃川が南から北に向かって流れている。現在、市街地や水田が広がっている平野部は、信濃川が形成した新潟平野の南西端にあたり、北方に広がる新潟平野の彼方に弥彦・角田山麓を望むことができる。

平野部を挟んだ東西には丘陵が南北に連なっている。西側にある「西山丘陵」と呼ばれる丘陵は、標高約300m前後の緩やかな起伏をもち、東頸城丘陵の北端部にあたる。信濃川左岸の丘陵沿いには河岸段丘が何段にも発達しているのが特徴で、上流の中魚沼郡津南町・十日町市・小千谷市・越路町から下流の三島町・与板町にまで及ぶ、わが国最大規模のものである。この河岸段丘上では旧石器時代から縄文時代にかけての遺跡が多数発見されている。長岡市域の信濃川左岸の段丘上には、縄文時代の岩野原遺跡（中・後期）、馬高・三十稲場遺跡（中・後期）、藤橋遺跡（晩期）などの大規模な集落跡をはじめ、数多くの遺跡が分布する。

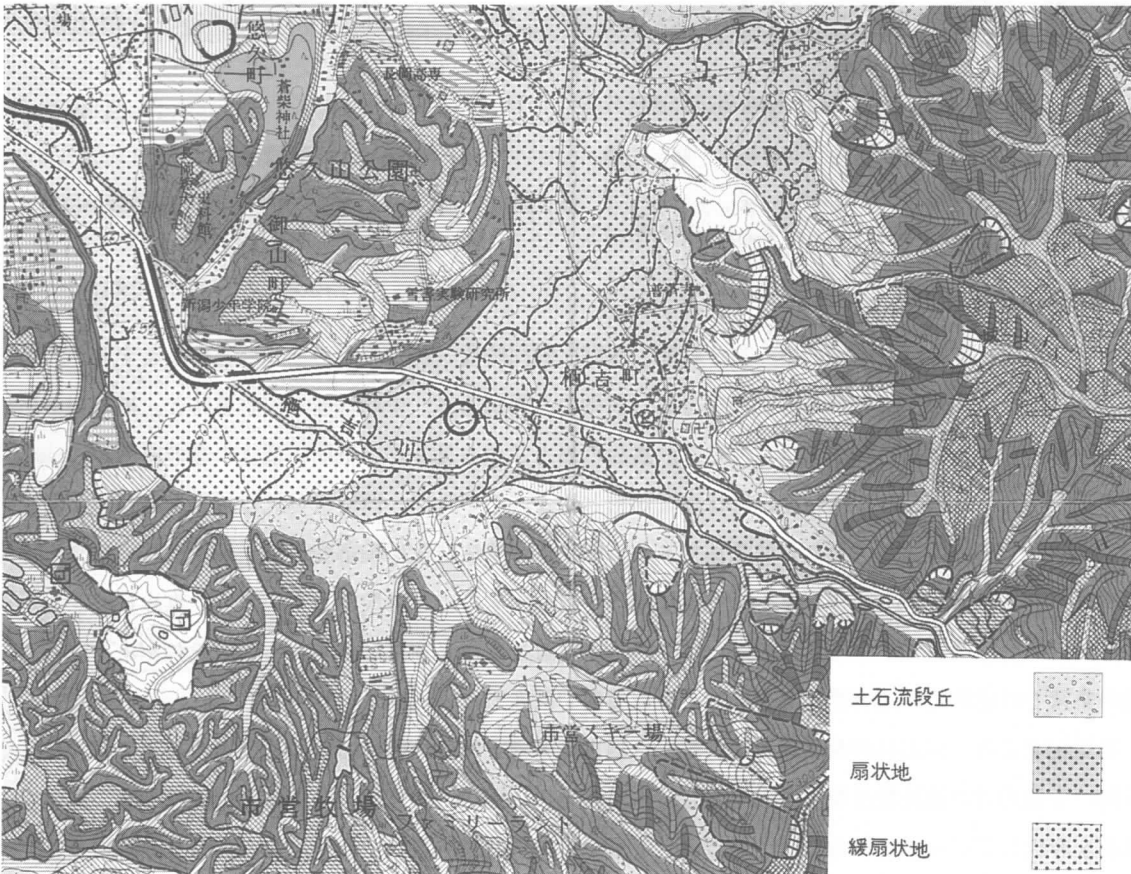
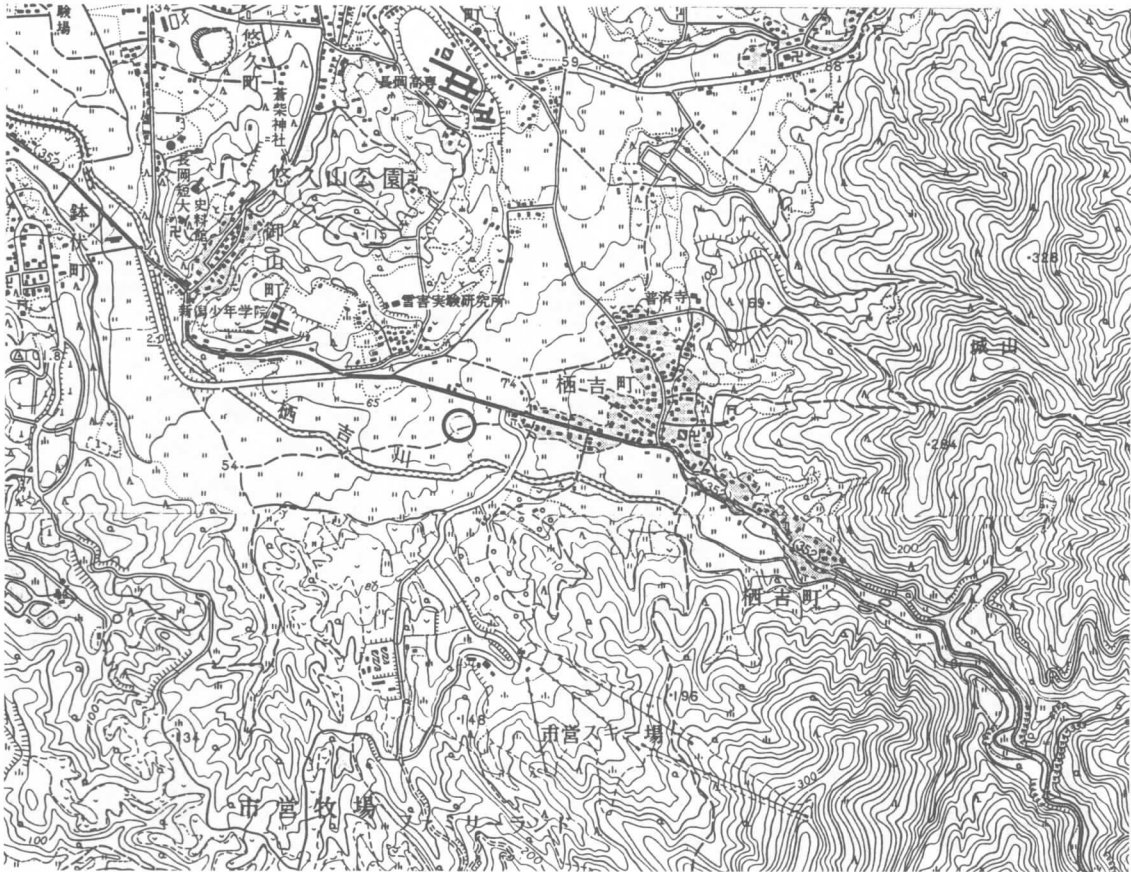
一方、信濃川右岸の東側には、標高700mを超える急峻な地形の通称「東山丘陵」があり、魚沼丘陵の北部にあっている。信濃川左岸では西山丘陵沿いに河岸段丘が発達しているのに対して、平野の東部周縁であるこの地域では段丘面の形成は顕著ではなく、山麓から信濃川に流れ込む大小の河川が平野部への出口付近の丘陵沿いに扇状地を形成している地域が多いのが特徴である。東山丘陵沿いの遺跡は主に扇状地上やその周辺に立地する傾向を示している。

これまでに長岡市内で確認されている遺跡は382か所を数える。旧石器時代の遺跡は極めて少ないが、縄文時代に入ると約160か所に及ぶ多数の遺跡が分布するようになる。縄文時代の遺跡は東山丘陵及び西山丘陵沿いの段丘や台地の平坦面に集中し、特に中・後期の遺跡が多い。続く弥生時代から古墳時代にかけての遺跡数は少ないが、古代・中世には東山丘陵及び西山丘陵沿いの低位段丘面、沖積平野の自然堤防や微高地上に立地する集落跡が多数発見されている。また、中世の城館跡は山麓の頂部や沖積平野の安定した自然堤防や微高地上に認められる。

信濃川の支流である栖吉川は、東山丘陵から出て西方へ流れ、丘陵沿いには谷口扇状地や土石流段丘を形成している。栖吉町はその扇状地及び段丘上に位置する。中道遺跡は栖吉集落の西側に広がる水田に所在し、栖吉川右岸の扇状地上にあたる。遺跡の北側には沢が入り、また南側が栖吉川へ緩く傾斜しているため、舌状台地のように周囲より一段高くなっている。遺跡の範囲はその舌状地形の縁辺に広がっており、標高は約65～70mをはかる。

中道遺跡からの景観としては、栖吉集落の東方に標高328mの城山、南東には標高521mの風谷山や標高764.9mの鋸山を見ることができる。さらに南方には標高548mの南蛮山や標高573mの大峰山に続く丘陵が延びている。また、北西方向に悠久山、西側には鉢伏山の丘陵があるため、新潟平野への眺望は開けていないが、天気の良い時には鉢伏山の彼方に、小木ノ城跡など西山丘陵の山頂を眺めることができる。

栖吉川の形成した扇状地や段丘上には、中道遺跡の他にもいくつかの遺跡が立地している。栖吉川右岸の扇状地上では栖吉集落の西端部に縄文時代中～晩期の大明神遺跡があり、集落南側の水田中には大量の古銭の入った木製容器を出土した下道遺跡が発見されている。また集落東方の城山の頂には、大規模な中世の山城である栖吉城跡が所在している。中道遺跡北西の悠久山の南裾には低位段丘が形成され、中世の墳墓群や集落跡が発見された三貫梨遺跡が位置する。一方、栖吉川左岸では扇状地面より一段高まった土石流段丘上に縄文時代及び中世の松葉遺跡がある。



第1図 中道遺跡の位置と周辺の地形 (上：国土地理院発行1/25,000地形図「栴尾」「半蔵金」、  
下：同発行1/25,000土地条件図、○印は中道遺跡を示す)

(2) 歴史的環境 (第2図)



第2図 栖吉周辺の遺跡分布 (1/50,000 地形図「長岡」)

●=縄文、△=弥生、■=古墳、○=古代、▲=中世、◎=中道遺跡

1. 松葉、2. 三貫梨、3. 大明神、4. 大行寺、5. 栖吉城跡、6. 栖吉支城跡、7. 下道、8. 新田山砦跡、9. 町田城跡、10. 柿館跡、11. 山下、12. 柿城跡、13. 堅正寺、14. 大沢、15. セツ塚古墳群

(2) 歴史的環境 (第2図)

中道遺跡は、縄文時代中期後半～後・晩期、室町・戦国時代(15世紀)の2時期を中心とする。周辺では、縄文時代早期後半の松葉遺跡を最古とし、前期の三貫梨遺跡、中期前葉の松葉遺跡と、栖吉川沿いに連綿と中小規模の縄文集落が営まれている。遺物の出土量から見ると、中期前葉は中道の南西約2.5kmにある山下遺跡が傑出し、中期後半以降は中道が密となる。この時期、西片貝町近辺でも採集遺物量は安定するが、中でも中道は質・量ともに豊富である。その後、弥生時代に集落域は堅正寺遺跡など悠久山西辺に移り、縄文色の強い土器様相をもつ小規模集落が散在する。古墳時代から古代では、東片貝町から千代栄町付近にかけて遺物の採集量が安定している。中道近辺では、窯跡とみられる大沢遺跡があるが、その他の集落では総体的に遺物量は寡少で、小規模集落が散在していた様子が想定できる。

15世紀末ごろ、古志郡司長尾氏は蔵王堂から栖吉に本拠を移し、中道の東方に栖吉城を構える。14世紀以降、中道周辺の遺跡数は増加傾向を示し、古志長尾氏の栖吉入部と連動して現在の集落景観に近い城下集落を形成していったとみられる。栖吉は、近世では長岡藩領栖吉村、明治34年(1901)の町村合併で古志郡栖吉村となり、昭和25年(1950)に長岡市に編入され、大字栖吉町として今日に至っている。

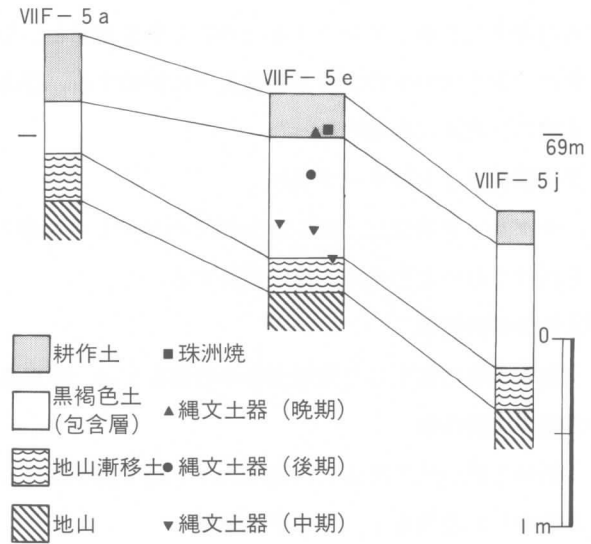
### 3 土層序 (第3図)

中道遺跡は、栖吉川右岸に広がる扇状地に位置するため、表土の耕作土が薄いところで15cm、厚いところで1m近く堆積していた。耕作土の下が遺物包含層の黒褐色土、その下に地山漸移層、地山と続き、この4枚の土層が、中道遺跡の基本的な土層序である。

地山は、河岸段丘で見られるいわゆる「赤土」の黄褐色土が広がるどころと、水が浸ってグライ化した青灰色粘土が広がる所に大きく分けられる。これは、中道は扇状地に立地しているが、遺跡は東から西に向かった舌状台地の様相を呈しているため、地山土が赤土の黄褐色土は集落の

中央部に広がり、青灰色粘土の地山は集落の面より一段低い沖積地にかけて広がっている。

遺物包含層は、薄くても30cm、厚いところで70cmほどの厚さで堆積している。遺物包含層の黒褐色土は締まりがあり、粘質を帯びた表土の耕作土とは、パワーシャベルで発掘すると簡単に剥離する。遺物はVII F-5 eの土層 (第3図) では、上層から中世の珠洲焼、縄文晩期の土器、後期の土器、そして下層から中期の土器が出土しているが、これは極めてまれなケースである。通常は縄文中期の土器や石器と中世の珠洲焼が同一レベルから出土することが多く、各文化層を分層することはできなかった。



第3図 土層柱状図

### 4 発掘調査

#### (1) 発掘調査の方法

中道遺跡発掘調査は、岩野原遺跡の発掘調査 (駒形他1981) で採用した手順・方法などで発掘調査を進めることにした。以下、岩野原と異なる点を中心に、中道遺跡発掘調査の手順について記す。①発掘作業員の班編成

発掘班：包含層の発掘から遺構確認作業、さらに遺構発掘を行う。

遺物収納班：出土遺物の収納。遺物の分別等も行う。

実測班：地山面で確認した遺構の平面測量と、遺構の断面図及び平面図の実測等。

ベルトコン班：発電機・ベルトコンベアーの保守点検。また、発掘班の作業員が回転するベルトコンベアーに身体が挟まれることを防ぐため、ホイッスルで危険な行為を注意することも業務の一つとした。結果的には事故もなく、ベルトコンベアーのトラブルを防止するなど、発掘効率を高めた。

#### ②発掘グリッドの設置 (第4図)

調査面積が15,000平方メートルにおよぶ広大であるため、発掘グリッドは、2×2mを小グリッド、20×20mを大グリッドとして、推定遺跡範囲の限界と思われる南西側に原点をおいて、磁北に合わせて設置する。大グリッドの名称は、原点から東にはローマ数字のI・II・III…、北へはアルファベットのA・B・C…とし、小グリッドは大グリッドの0点から東が1・2・3…10、北へはa・b・c…jと付けた。グリッドの呼称は、大グリッド-小グリッドの順で、例えばIII A-6 hとした。

なお、基本杭の設置は、正確を帰すために測量業者に依頼する。これは、3カ年にわたる調査であり、

各調査年次を通じて統一するためにも業者委託とした。基本杭は、10mごとに打設し、さらに標高を測る基本のベンチマークの設置も測量業者に依頼する。標高点は、基本杭にも落としておいた。作業員が実測する際には非常に有効であった。

### ③発掘グリッドのテープ張り

大グリッド単位に、長さ30cmほどの竹グシを両端として、小グリッドの2mごとにカラスプレーで印を付けておいたナイロン縄で設置する。

### ④包含層の発掘

包含層中で出土した完形土器や石器などは、写真撮影や測量を行う。

### ⑤遺構確認作業

遺構と思われる黒色土の落ち込みを地山面で検出し、その箇所を石灰の溶液でマーキングする。

### ⑥確認した遺構を1/100で平面測量

岩野原の場合は、グリッドカードに記入したが、中道は平板測量で対応した。この測量図面は、遺物の取り上げにも活用し、遺構番号を付ける際にも用いた。

なお、遺構番号のうち、フラスコ状ピット番号は、発掘時には大グリッド単位で付けて、フラスコ状ピットと確認された段階でフラスコ状ピットの通し番号を付けた。

### ⑦遺構の発掘

トチの実や炭化材などの遺物、それに住居跡の貼床などには、細い竹串を使って発掘する。竹串を使用しての発掘残土は細かいため、ドライヤーで風を送って残土を吹き飛ばす。

### ⑧写真撮影

遺構全体の写真は、バルーンで空中撮影を行う。遺構の縁ラインは石灰溶液でマーキングする。

### ⑨測量

遺構の断面図や住居跡などの遺構の平面は実測班が、基本杭を基にして地山面に打ったクギに水糸を張った簡易遣り方で実測もしくは平板で測量する。全体図については、測量業者に委託して平板測量で行う。縮尺は1/40で、大グリッド単位に測量し、それを基本として1/200の全体図を作成する。委託しての測量は、空中測量に比べて費用が安価で済むことに加えて、ピットなどの遺構の底部に水が溜まっても底部が見えれば測量できるし、かつ調査員の指示が現場で与えられるなどの利点がある。

各調査年次の調査地は、事業主体者と協議して設定したもので、各年次ごとに上記の手順で発掘を進めた。また、発掘現場では遺物の水洗いと重要と思われる遺物の注記も行う。

## (2) 発掘調査の経過

中道遺跡の現場における発掘調査は、平成6年から8年の3カ年にわたって実施した。調査年次ごとの調査箇所及び面積は、発掘調査の能力や圃場事業の計画などを考慮して、事業者のJA長岡と市教委が協議して決定した。調査の進め方は上で述べた手順に従って、各調査年次ごとにほぼ同じ手順で行った。各調査年次の調査実施日は、次のとおりである。各調査年次の末尾の数字は、現場での発掘ができた日と、調査延べ日数、及びその割合（稼働率）で、これは雨天で発掘ができなかった日数をも表している。

- ・第1次調査（平成6年6月6日～10月24日） 78.0日/135日 57.8%
- ・第2次調査（平成7年4月25日～12月8日） 93.5日/205日 45.6%
- ・第3次調査（平成8年5月7日～10月31日） 93.0日/164日 56.7%

## 第2章 縄文時代の中道遺跡

### 1 総説

縄文時代の遺構は、中期・後期・晩期の竪穴住居跡、中期終末から後期初めの掘立柱建物跡、中期のフラスコ状ピット、炭化したトチの実を出土した中期と後期のトチの実ピット、それに性格不明な土壌などがある。遺構の位置関係は、中期が主に南西側から中央部に、後期が中央部に、晩期が南部の第22号住居跡を除いては東側に偏っていた。遺物は、大量の縄文土器をはじめ、石鏃・石斧などの石器、土偶・石棒などの呪術具、硬玉製大珠などの玉類など、多種多様の道具が出土している。中でも第51号住居跡のトチの実遺構は、収穫したトチの実の乾燥保存方法や住居の形態を考える資料であり、第20号や第22号住居跡の炭化した建築部材も住居形態の研究に重要な資料を提供していると言えよう。また、弓の弦を張る際に用いる弓筈の出土も、これまで骨角器の出土例がない長岡市にとっては貴重な資料となった。

なお、遺構の土層断面の観察表は以下のとおりで、これには中世遺構の凡例も含んでいる。また、縄文時代の出土遺物の一覧表は次ページのとおりである。

#### 遺 構 土 層 断 面 凡 例

1層 黒褐色土	25層 茶褐色土+黄褐色土(塊)+炭化物
2層 茶褐色土	26層 茶褐色土+黄褐色土(粒)+炭化物
3層 褐色土	27層 茶褐色土+青灰色粘土
4層 黄褐色土(粒)	28層 茶褐色土+炭化トチの実
5層 黄褐色土(塊)	29層 黄褐色土+黒褐色土
6層 焼土	30層 黄褐色土+青灰色粘土
7層 木炭層	31層 黄褐色土+灰黒色土
8層 黒褐色土+黄褐色土(地山土)	32層 黄褐色土+炭化物
9層 黒褐色土+炭化物	33層 黄褐色土+灰黒色土+炭化物
10層 黒褐色土+炭化物+黄褐色土(粒)	34層 褐色土+焼土
11層 黒褐色土+炭化物+黄褐色土(塊)	35層 灰褐色土+炭化物
12層 黒褐色土+炭化物+黄褐色土(塊)+褐色土	36層 黒灰色土
13層 黒褐色土+褐色土	37層 黒灰色土+青灰色粘土
14層 黒褐色土+茶褐色土+黄褐色土(塊)	38層 黒灰色土+炭化物
15層 黒褐色土+青灰色粘土	39層 黒灰色土+黄褐色土(粒)
16層 黒褐色土+青灰色粘土+炭化物	40層 黒灰色土+黄褐色土(塊)
17層 黒褐色土+青灰色粘土(塊)	41層 黒灰色土+青灰色粘土+炭化物
18層 黒褐色土+黄褐色土(粒)+焼土	42層 茶灰色粘土
19層 黒褐色土+炭化物+焼土	43層 茶灰色粘土+黄褐色土(粒)
20層 黒褐色土+白色粘土	44層 青灰色粘土
21層 黒褐色土+炭化トチの実	45層 灰炭層
22層 黒褐色土+炭化トチの実+黄褐色土(塊)	46層 炭化物
23層 茶褐色土+黄褐色土(粒)	47層 炭化物+焼土
24層 茶褐色土+炭化物	

中道遺跡出土縄文時代遺物一覧表

	種 別	出土数	未製品数	総 数	割合(%)	備 考
	縄文土器	1,035		1,035		コンテナ箱換算・概数
漁 労 具	土錘	3		3	0.08	
	石錘	245		245	6.44	
	小計	248		248	6.52	
狩 獵 具	石鏃	366	110	476	12.51	朱塗りの石鏃1点
	弓筈	1		1	—	骨角器
	石槍	5	3	8	0.21	
	小計	372	113	485	12.72	
加 工 具	磨製石斧	311	94	405	10.65	
	小形磨製石斧	46	5	51	1.34	
	打製石斧	321	47	368	9.67	
	その他の石斧	1		1	0.03	
	石錐	52	2	54	1.42	
	砥石	48		48	1.26	
	楔形石器	1		1	0.03	
	石篋	2	3	5	0.13	ヘラ状石器
	小計	784	151	935	24.58	
調 理 具	石匙	21	8	29	0.76	
	板状石器	21	4	25	0.66	
	スクレーパー	4		4	0.11	
	敲石	30		30	0.79	
	凹石	1,462		1,462	38.43	
	磨石	337		337	8.86	
	石皿	213		213	5.60	
	小形石皿	37		37	0.97	
小計	2,125	12	2,137	56.18		
呪 術 ・ 装 身 具	土偶	54		54		
	三角形土版	8		8		
	有孔球状土製品	4		4		
	鐺形土製品	1		1		朱塗り
	円板状土製品	72		72		
	スタンプ状土製品	1		1		
	土製耳飾	20		20		
	硬玉製大珠	3		3		
	ヒスイ剥片	21		21		
	玉	16		16		
身 具	三角埴石製品	2		2		
	石冠	3		3		
	石剣	4		4		
	石刀	4		4		
	石棒	90	4	94		
	独鈷石	5		5		
三脚石器	3		3			

※1 出土数は欠損品を含む製品の数量で、総数はそれに未製品を合わせた数量である。

※2 割合は、漁労具から調理具までの道具（3,804点＝弓筈を除く）の比率である。

## 2 遺構（第8～42図）

中道遺跡の縄文時代の遺構は、竪穴住居跡（H）、掘立柱建物跡（SB）、フラスコ状ピット（FP）、トチの実ピット、貯蔵穴と思われる後期のピット（LP）、それに黒色土中の埋甕（MP）などがある。黒色土中の埋甕（埋設土器）は、口縁を上にした正立の状態ではほぼ完全な形の土器が出土したものを指す。口縁が下向きの倒立した状態の完形土器もあるが、これは遺構の中には含めなかった。

なお、遺構の記載は、位置・平面形態・遺構の規模・出土遺物・時期などの、主な属性について簡条書きにした。なお、竪穴住居跡は炉跡だけの場合などは、不明な項目を省いた。出土遺物については一括して遺物の項で記載することにし、ここでは出土遺物の種類と出土点数、及び図版掲載の番号を括弧内に記入した。時期は、後述する「3 遺物(1)縄文土器」で検討した中道遺跡独自の編年観に基づく時期区分を示し、合わせて括弧内に新潟県内で広く使用されている土器形式名を示した。例えば、中期では大木式土器、後期では三十稲場式や三仏生式、晩期では大洞式土器の諸型式名を用い、表記は中道II期（大木8b式段階）、中道IV期（三十稲場式段階）などとした。

### (1) 竪穴住居跡（第8～23図）

縄文時代中期・後期・晩期の竪穴住居跡及び黒色土中ないしは地山面に位置する炉跡（主に石組炉）が67軒、中道遺跡の集落内に位置していた。記載は、中期・後期・晩期の竪穴住居跡、炉の埋甕（埋設土器）や形態などから時期が判明する炉跡、それに時期不明な炉跡で、図版に掲載されている順に行った。

#### ○第5号住居跡（第8図）

位置：IIID-2～7h～j、IIIE-2～7a

平面形態：長方形竪穴住居

規模：長軸9.60m×短軸3.20m、周壁の高さ10cm

内部施設：石組炉・周溝・壁・柱穴

炉：長方形石組炉（残存長軸1.20m×短軸0.80m）。焼土の面が石組炉の東側に広がっている。

柱穴：主な柱穴は、8本で、周溝に沿って等間隔で並んでいる。内部の周溝の角と、内部周溝の真ん中に1本ずつ計6本の柱穴が整然と並び、西側の2本目の周溝の角にも柱穴が2本ある。

周溝：西側で3重、北側で2重の周溝が巡っている。

遺物：縄文土器（3～13）・打製石斧1（94）・磨製石斧3・石錘1・凹石2・石皿1・砥石2（352）

時期：中道IIIa期（大木9式段階）

その他：西側に周溝が3重になっていること、石組炉の東側に広がる焼土の面などから、本住居跡は、少なくとも2回の増築をしていると思われる。

#### ○第16号住居跡（第8図）

位置：IIB-7～9i・j、IIC-8a

平面形態：円形竪穴住居

規模：直径5.60m、周壁の高さ30cm

内部施設：石組炉、周溝、周壁、柱穴、ベッド状遺構

炉：方形石組炉（長軸1m×短軸0.60m）。炉のほぼ中央部に埋甕がある。炉跡の西外側に偏平な河原石がおかれていた。また、炉縁の石に飾られた大木8b式の土器の把手が立て掛けてあった。

柱穴：床面とベッド状遺構との境に10数本の柱穴があり、その中で北東側を広く開けた等間隔で並ん



でいる 8 本の柱穴が支柱穴と思われる。

遺物：縄文土器（21～28）・打製石斧 1・石錘 1・凹石 5・磨石 1

時期：中道 IIb 期（大木 8b 式新段階）

その他：本住居跡は、住居の廃絶後に住居の窪地をゴミ捨て場として再利用されたらしく、大量の縄文土器や打製石斧それに凹石などが住居跡の覆土から出土している。

第17号住居跡と東西に並立していた。住居跡出土の縄文土器からみた第16号・第17号住居跡の時期は、第17号住居跡の方が若干古い。おそらく、第17号住居が廃絶した後に、第16号住居へ移転した可能性も考えられる。

○第17号住居跡（第9図）

位置：III B-1～3 i・j、III C-2・3 a

平面形態：円形竪穴住居

規模：長軸 6.40m×短軸 5.60m、周壁の高さ 30cm

内部施設：石組炉、周溝、周壁、柱穴、ベッド状遺構

炉：長方形石組炉（長軸 1.70m×短軸 0.60m）。炉のやや西寄りに埋甕が位置していた。埋甕は、大木 8b 式古段階の装飾的な土器を使用している。

柱穴：ベッド状遺構からやや内よりに柱穴が位置している。そのうちの 6 本が支柱穴と思われる。

遺物：縄文土器（29～59）・炉埋甕（35）・土偶 1（13）・石鏃 1（15）・打製石斧 3・凹石 6・砥石 1（358）

時期：中道 IIa 期（大木 8b 式古段階）

その他：住居跡の覆土からは大量の土器と、石鏃・打製石斧などの石器が出土した。また、土偶は覆土からの出土で、頭と右腕を欠損している。この土偶の頭部は、第17号住居跡から南へ約 15m のところの包含層から出土した。

第17号住居跡の北東側にフラスコ状ピット（FP 6）の開口部があるが、直接的に第17号住居跡に伴うものではないと思われる。また、数基のフラスコ状ピットが第17号住居跡の北側に位置しているが、それとの関係も不明である。

○第20号住居跡（第9図）

位置：III E-8～10c～g、IV E-1～2c～f

平面形態：長方形竪穴住居

規模：長軸 8 m×短軸 3 m、周壁の高さ約 20cm

内部施設：石組炉・周溝・周壁・柱穴

炉：長方形石組炉（長軸 1.60m×短軸 0.80m）。石組炉の長軸線に沿って、焼土の面が長方形に広がっていた。炉の中から獣骨片が出土した。

柱穴：周溝にかかるように 6 本の支柱穴が、2 本一対となって並んでいた。

周溝：北東側は周壁に沿って、南西側はやや内よりに周溝が巡っている。

遺物：縄文土器（60～82）・埋甕（68）・打製石斧 1・石錘 4・凹石 5・磨石 1・石棒 1・炭化建築部材・トチの実

時期：中道 IIIa 期（大木 9 式段階）

その他：第 1 次調査で南東側半分を発掘し、第 2 次調査で全体を発掘した住居跡である。

住居跡の床面に炭と灰が混じった土層「炭灰層」が、ほぼ全面に広がっていた。住居跡の北側角と、北東と南西の壁際に炭化材が見られた。北側角の炭化材は、中が剥り貫かれて立つようにおかれ、下に穴が確認されるところから、桶のような容器が焼けたものと思われる。北東側の炭化材は、2列に並んでいた。壁際の炭化材は細く、小口を上にした状態で位置していた。炭化材の下には板状の炭化材とほぼ同じ規模の細い溝が確認され、板壁の可能性が高い。内部側の炭化材は、床に横たわる状態で発見され、柱の上に架かる桁の可能性もある。また、南西側は壁際に1列に並び、これも細い小口を上にしており板壁と思われる。

住居跡の北隅の桶状の炭化材の周辺から土器の底部や石皿、それに炭化したトチの実が出土。おそらく水屋の可能性もある。建築材などの炭化材が出土していること、それに床面全体に炭灰層が覆っていることなどから、第20号住居跡は、火災に遭った住居と思われる。なお、第20号住居跡から東側に位置する第46号・第51号なども火災の痕跡を残す住居跡で、これらが同じ時期に存在し、同時に火災にあった住居と考えられる。

○第21号住居跡（第10図）

位 置：ⅢD-1～5a～c

平面形態：方形竪穴住居

規 模：残存長軸約8m×短軸3.60m、周壁高さ約10cm

内部施設：炉跡・周溝・周壁・柱穴

炉 跡：長方形石組炉（残存長軸1.40m×残存短軸0.80m）。石組炉の東側に埋甕が1個あるが、本住居跡と関係するのかわかり不明である。なお、調査用排水溝で炉跡の東側が切られている。

柱 穴：主柱穴は、東辺の両角と、南北辺のほぼ中央にある直径1mを超える2本一対の4本と、西側に存在したであろう6本と思われる。

周 溝：幅約30cmの溝が長方形に回っている。東辺の周溝は2重になり、かつ東側に向かって溝が各コーナーから延びている。

遺 物：縄文土器

時 期：中道Ⅲa期（大木9式段階）

そ の 他：地山直上の炉跡で住居跡を確認し、長方形の周溝で囲まれた範囲を住居跡としたものである。よって、周壁は確認できない。本住居跡の床面で第9号フラスコ状ピットが位置しているが、第21号住居跡との関係は定かでない。人が生活する住居内に、天井が崩れ落ちる恐れが高い貯蔵用のフラスコ状ピットを設けることは、危険であるとの見方からである。

○第24号住居跡（第10図）

位 置：ⅢD-1～5f～i

平面形態：楕円形竪穴住居か

規 模：不明

内部施設：石組炉・周溝・柱穴（?）

炉 跡：方形石組炉（残存0.90m×0.70m）。3重になった埋甕が炉内にある。

柱 穴：炉跡の周辺で、周溝と思われる溝に挟まれた中に多数のピットが存在するが、本住居跡の柱穴と特定することはできなかった。

周 溝：炉を挟んで南北に存在している一筋の溝を周溝と考えた。

遺物：縄文土器（84～93）・3重の埋甕（85）

時期：中道II期（大木8b式段階）

その他：地山直上にある方形の石組炉と、炉跡を挟んで南北の溝跡などから楕円形竪穴住居跡と推定したものである。

○第26号住居跡（第10図）

位置：III E-6～9g～j

平面形態：円形竪穴住居

規模：直径6.50m、周壁の高さ約10cm

内部施設：炉跡・周溝・柱穴・ベッド状遺構

炉：長方形石組炉（長軸1.60m×短軸0.80m）。炉のほぼ中央に埋甕。埋甕には、大木8b式段階の装飾的な台付鉢を使用。

柱穴：周壁に沿って存在する7本のピットが、支柱穴と考えられる。住居跡の南側を通る水田の用排水路の中に1本の柱穴が存在した可能性があり、それを合わせると支柱穴は8本である。

遺物：縄文土器（96～107）・炉埋甕（107）・打製石斧1・石錘1・凹石8・磨石1

周溝：幅約20cm、深さ約10cmの溝が外側と内側に巡っている。内外2重の周溝は、外側が約10cmほど高いところにある。

ベッド状遺構：内外の周溝に挟まれて、周壁に沿う幅約40～60cmの範囲がベッド状遺構と思われる。

時期：中道II期（大木8b式段階）

その他：内側の周溝に沿って存在する支柱穴に囲まれた幅約80cmほどの範囲（図で破線で囲った範囲）の床が、地山の床面と異なる土で堅く締まっており、貼床と思われる。住居の南側は、水田耕作作用の水路で切られていた。

○第31号住居跡（第11図）

位置：VE-5～7h～j、VF-5～7a

平面形態：円形竪穴住居

規模：直径5.20m

内部施設：周溝・円形に巡る縁石

炉：不明

柱穴：ピットはあるが、柱穴であるかは不明

周溝：幅・床面からの深さとも約20cmの周溝が、南東側の一部を除いて確認。周溝に沿って縁石と思われる河原石が巡っていた。

遺物：縄文土器（127～143）・円板状土製品1（73）・打製石斧3・三日月形石器1（234）・石錘3・凹石3・石皿2・三脚石器1（23）

時期：中道IVa期（三十稻場式古段階、第31号住居跡の範囲内出土土器から判断）

その他：第49号住居跡の炉跡が北西の縁石付近に位置していた。

縁石が巡っていることから、第31号住居跡の調査当初は、敷石住居跡と考えたが、石が一面に敷かれていないことから竪穴住居跡と判断した。炉の存在は不明である。おそらく第49号住居跡の建築の際に撤去されたものと思われる。

○第49号住居跡（第11図）

位 置：VE-4～6i・j、VF-4～6a

平面形態：楕円形竪穴住居か

規 模：推定直径5m

内部施設：炉跡・柱穴

炉：長方形石組炉（長軸1.40m×短軸0.80m）。中央部に埋甕がある。

柱 穴：石組炉を中心にした半径2.50mの中にあるピットを柱穴と推定した。

遺 物：炉埋甕（245）・砥石1（355）

時 期：中道II期（大木8b式段階）

そ の 他：第31号住居跡と重複。

○第34号住居跡（第11図）

位 置：III E-6～9b～e

平面形態：楕円形竪穴住居

規 模：直径6m、周壁の高さ20cm位

内部施設：炉跡・周溝・周壁・柱穴

炉：A字形の複式炉（A字形の長さ：1.60m、底辺の長さ：0.80m）。炉には、A字形の先端部に埋甕があり、内部に土器が敷き詰められている。

柱 穴：周溝に沿って巡る大形のピットが主柱穴と考えられる。

周 溝：幅20cm、深さ30cmの溝が第35号住居跡と重なる部分を除いてほぼ一周している。

遺 物：縄文土器（145～157）・土製耳飾1（79）・磨製石斧1・石錘2・凹石3・磨石1

時 期：中道IIIa期（大木9式段階）

そ の 他：西側の一部が第35号住居跡と重複している。新旧関係は、覆土の土層断面の観察からは、読み取れなかったが、出土土器から第34号住居跡の方が新しいと判断される。

なお、本住居跡の複式炉は、取り上げ保存をし、現在は長岡市郷土史料館で展示中である。

○第35号住居跡（第11図）

位 置：III E-3～6b～e

平面形態：円形竪穴住居

規 模：直径5.50m、深さ10cm位

内部施設：炉跡・周溝・柱穴

炉：長方形石組炉（長軸1.50m×短軸0.60m）

柱 穴：炉跡を中心にした円形の中に入る7本のピットが主柱穴と思われる。

周 溝：北側で第34号住居跡と重なる部分から西側に延びる溝を確認。おそらく、この溝が周溝と思われる。幅・深さとも第34号住居跡と同じ規模で、幅20cm、深さ30cmである。

遺 物：縄文土器（158～176）・打製石斧1・石鏃1・凹石5（304）

時 期：中道IIa期（大木8b式古段階）

そ の 他：第34号住居跡重複する東側では竪穴の掘り込みは確認されるが、地山が傾斜する西側は住居跡の覆土は確認されなかった。このため、周溝が一部でしか確認されなかったものと思われる。

○第36号住居跡（第12図）

位 置：IID-7～9j、IIE-7～9a・b

平面形態：円形竪穴住居

規 模：推定半径2.50m、周壁の高さ10cm程度

内部施設：炉跡・周溝・柱穴

炉 跡：方形石組炉（残存一辺0.50m）

柱 穴：炉跡周辺のピットを柱穴とした。

周 溝：東半分には幅20～40cm、深さ15cmの周溝を確認。

遺 物：縄文土器（177～186）・打製石斧1・凹石2・磨石1

時 期：中道IIa期（大木8b式古段階）

そ の 他：西半分に、第8号地下式横穴が構築されたため、住居が破損している。

○第38号住居跡（第12図）

位 置：IVE-7～8b～d

平面形態：円形竪穴住居か

規 模：ピット間での推定規模は、直径4m位

内部施設：石組炉・柱穴

炉 跡：長方形石組炉（長軸1.20m×短軸0.70m）。炉内の埋甕は、中央部と北側先端部の2カ所に位置していた。

柱 穴：炉跡を中心とした直径50～60cmのピットが6本ある。本住居跡の柱穴と推定した。

遺 物：縄文土器（187～190）・炉埋甕（187・190）・土偶1（12）

時 期：中道IIb期（大木8b式新段階）

そ の 他：本住居跡は、黒褐色土中に位置していた。柱穴は、炉跡を中心に検出したものである。炉跡から西側に50cm離れたところで、炉跡と同じレベルの黒褐色土中から、土偶の胸部と腰部が破損した状態で出土。本住居跡に伴うものと考えられる。

○第41号住居跡（第12図）

位 置：VE-3・4i・j

平面形態：円形竪穴住居か

規 模：推定直径6m

内部施設：炉跡・周溝・柱穴

炉 跡：長方形石組炉（長軸1.95m×短軸0.70m）

柱 穴：石組炉の周辺に楕円形に巡るよう位置しているピットを柱穴と推定。

周 溝：西南方向に長さ4mほどの溝を確認。周溝と推定した。

遺 物：縄文土器（191～194）・円板状土製品1（63）・凹石3・石皿1

時 期：中道IIa期（大木8b式古段階）

そ の 他：石組炉内より文様のある土器片が出土。

○第44号住居跡（第13図）

位 置：VF-9～10h～j、VIF-1h～j

平面形態：円形竪穴住居

規 模：直径4.40m

内部施設：炉跡・周溝・柱穴

炉 跡：長方形石組炉（残存長軸1.10m×短軸0.60m）

柱 穴：周溝に囲まれた中にあるピットを柱穴と考えた。

周 溝：幅20cm、深さ15cmの溝が、炉跡を中心にやや円形に巡る。

遺 物：縄文土器・土偶1（11）・打製石斧4・小形磨製石斧1（231）・凹石3・石皿1（342）・砥石1

時 期：中道Ⅰ期（大木8a式段階か）

そ の 他：住居跡からは土偶と多数の土器が出土している。地山直上で住居跡を検出。

○第45号住居跡（第13図）

位 置：IVE-7～9・f～h

平面形態：長方形竪穴住居

規 模：長軸不明、短軸3.50m 周壁の高さ20cm

内部施設：石組炉・周溝・周壁・柱穴

炉 跡：A字形の複式炉（A字形の長さ1.35m 底辺の長さ0.90m）。A字の先端部に2重の埋甕。炉内に土器の破片が敷き詰められていた。

柱 穴：周溝に沿ってピットが並んでいる。柱穴と思われる。

周 溝：幅20cm、深さ10cmほどの周溝。

遺 物：縄文土器（196～206）・炉埋甕（205）・炉床に敷かれた敷土器（200）・小形土器（206）・石槍1（75）・打製石斧1（100）・凹石1

時 期：中道Ⅲb期（大木10式段階）

そ の 他：覆土上面に炭化物が多量に含まれていた。第46号住居跡と北側で重複。このため、柱穴などの施設についての詳細は不明である。

○第46号住居跡（第13図）

位 置：IVE-6～8g～j

平面形態：楕円形竪穴住居

規 模：長軸不明、短軸3m 周壁の高さ20cm位

内部施設：石組炉・周溝・周壁・柱穴

炉 跡：A字形の複式炉（A字形の長さ1.35m 残存底辺の長さ0.80m）

柱 穴：周溝に沿ってのピットが柱穴と思われる。

周 溝：幅30cm、深さ15cmほどの周溝。

遺 物：縄文土器・炉埋甕（207）・打製石斧1

時 期：中道Ⅲa期（大木9式段階）

そ の 他：炭化材が床面を覆っている。火災に遭った住居跡と思われる。第45号住居跡の覆土上面に含まれていた炭化物は、本住居の火災時に焼けた建築部材の痕跡と思われ、これから第45号住居跡が本住居よりも若干古いと考えられる。

○第52号住居跡（第14図）

位 置：VE-8・9i・j

平面形態：楕円形竪穴住居か

規 模：6×4m（推定した柱穴から）

内部施設：炉跡・柱穴

炉 跡：先端が尖った楕円形石組炉（長軸1.40m×短軸0.65m）

炉の縁石に大木8b式段階の装飾的な土器の破片が組み込まれていた。土器の破片は、同一個体の破片が多い。

柱 穴：炉跡の周辺に位置するピットを柱穴と推定した。

遺 物：縄文土器・炉埋甕（247）・炉縁の縄文土器（246）・石匙1（238）

時 期：中道IIb期（大木8b式新段階）

そ の 他：地山面に炉跡があり、その周辺に位置する柱穴を、本住居の内部施設とした。

○第47号住居跡（第14図）

位 置：IVE-3～6・f～i

平面形態：長方形竪穴住居か

内部施設：炉跡・柱穴・周溝

炉 跡：長方形地床炉（長軸1.90m×短軸0.50m）。第48号住居を建築する際に縁石が抜かれたものと思われる。

遺 物：縄文土器（208～223）・円板状土製品1・打製石斧1・磨製石斧1・石錘4・凹石8（297）・磨石2（321）

時 期：中道III期（大木9～10式段階）

そ の 他：第48号・第50号・第51号住居跡と重複。第47号住居跡の施設は、地床炉だけかと思われる。出土遺物は、取り上げのときに4軒の住居跡のうち、若い番号の本住居跡番号としたため、他の住居跡出土と明らかに判明したもの以外は、本住居跡出土とした。

○第48号住居跡（第14図）

位 置：IVE-3～6f～i

平面形態：長方形竪穴住居

内部施設：炉跡・柱穴・周溝

炉 跡：A字形の複式炉（A字形の長さ1.20m 底辺の長さ0.82m）。A字の先端部に3重の埋甕。

柱 穴：直径30～40cm、深さ40cmの柱穴が、梁間1間（2m）×桁行2間（柱間2.75m）で、梁間1間長方形に並ぶ6本の柱穴を本住居跡の柱穴と推定した。

周 溝：幅30cm、深さ20cmの溝が長方形に巡る。

遺 物：縄文土器（224～242）・炉埋甕（225・226）・凹石2

時 期：中道III期（大木9～10式段階）

そ の 他：第47号・第50号・第51号住居跡と重複。A字形の石組炉をもつ長方形の竪穴住居跡は、炉が一方に偏って位置することが多いことから、第48号・第50号住居の範囲を図のように推定した。

○第50号住居跡（第14図）

位 置：IVE-3～6f～i

平面形態：長方形竪穴住居

内部施設：炉跡・柱穴

炉 跡：石組炉。第47号住居跡の地床炉と、第48号住居跡のA字形複式炉の先端部との間にある細長い河

原石を炉跡の残存部分と推定したものである。

柱 穴：直径1m前後、深さ60cmほどの柱穴で、梁間1間（2m）×桁行2間（3.5m×2間）の長方形に並ぶ6本の柱穴（うち、1本は水田の水路で損壊）で構成されている。

周 溝：柱穴の位置から本住居跡の周溝は推定できなかった。

遺 物：縄文土器

柱 穴：不明

時 期：中道IIIa期（大木9式段階）

そ の 他：第47号・第48号・第51号住居跡と重複。

○第51号住居跡（第14図）

位 置：IVE-3～6f～i

平面形態：長方形竪穴住居

規 模：推定長軸7m×短軸3.65m

内部施設：周溝・柱穴

炉 ；不明

柱 穴：周溝に沿う4本の柱穴と、トチの実遺構の両脇にある柱が本住居跡の柱と考えられる。位置関係は、梁間1間（2.35m）×桁行2間（5.5m）の長方形になる。なお、トチの実遺構の両脇にある柱は、トチの実遺構と同様に火災に遭って炭化した柱で、確実に第51号住居跡の柱である。

周 溝：幅20cm、深さ20cmで、長方形に巡る。

トチの実遺構：北側周溝の近くで炭化したトチの実が堆積していた。便宜上「トチの実遺構」とする。トチの実は、周溝側ではほぼ直線的に並び、住居内部側では円弧状になっていた。内部側にはトチの実の下に炭化した茅のような細い棒が束になっていた。編み籠に入れて棚の上に乾燥保存していたものと思われる。

遺 物：トチの実

時 期：中道III期（大木9～10式段階）

そ の 他：地山面で周溝を確認。重複する第47号・第48号・第50号住居跡の覆土中に、ガチガチに固く締まった地山土の層が見られた。第51号の貼床と思われる。このことと第47号・第48号・第50号の炉跡との関係から重複する住居は、第50号→第47号→第48号→第51号住居の順で建築されたものと考えられる。

また、トチの実遺構の状況から、本住居は切妻式の住居で、壁が軒先まで立ち上がっていたものと考えられる。そして、炭化物が重複する住居跡の覆土から大量に出土していること、トチの実遺構の両脇に炭化した柱材が立った状態であったことなどを考え合わせると、本住居は火災に遭い、棚の上に編み籠に入れておいたトチの実が、火事で棚が燃え落ち、飛び散らずに炭化したものと考えられる。

○第37号住居跡（第15図）

位 置：VG-2～4b～d

平面形態：円形竪穴住居

規 模：直径4.10m 周壁の高さ20cm位

内部施設：地床炉・壁柱穴



炉 : 楕円形の地床炉 (長軸90cm×短軸65cm)

地床炉の東西にも焼土面が広がっている。

柱 穴 : 周壁に沿って小さいピットがある。おそらく壁柱穴と思われる。

遺 物 : 縄文土器 (252~262)・石鏃 1 (2)・打製石斧 1・石錘 1・ヒスイ剥片

時 期 : 中道IV期 (三十稲場式段階)

そ の 他 : 地床炉のすぐ北側で、ピットと溝が北に向かっている。住居内への入り口部分かと思われる。

○第22号住居跡 (第19図)

位 置 : VC-3~6h~j

平面形態 : 円形竪穴住居

規 模 : 直径6.80m、周壁の高さ約50cm位 (北側の高いところ) 南側は周壁は確認されなかった

内部施設 : 炉跡・周溝・周壁・柱穴

炉 : 円形石組炉 (残存部からの推定直径約60cm)

柱 穴 : 一辺約2.40mの正方形に配置されている直径約20cmの4本が支柱穴で、その外側にある支柱穴と同じ大きさの4本の柱穴を補助柱穴として構成されている。

周 溝 : 周壁に沿って幅約30cm、床面からの深さ約20cmの周溝が巡っている。住居跡の南半分は、地山土が青灰色粘土のため、周溝は確認できなかった。

遺 物 : 縄文土器 (281~317)・石鏃 7 (38)・磨製石斧 7・石匙 1・石錘 1 (269)・凹石 6・磨石 1・石皿 2・炭化建築部材

時 期 : 中道VII期 (大洞C1式段階)

そ の 他 : 床面のかなりの部分に炭灰層 (図中の床面の網点範囲) が見られ、また壁には焼けた板材と思われる炭化材が残っており、本住居跡は火災に遭ったものと考えられる。竪穴住居の外側に土を盛り上げた周堤帯が存在したことを示す痕跡が、中郷村和泉A遺跡などから知られるようになった。第22号住居跡の壁板は、周堤帯を住居内部から押さえる施設との見方もある。それ以外に、第22号住居跡は壁立ちの構造であったという見方もある。

○第61号住居跡 (第20図)

位 置 : VIII E-9~10d~i、IX E-1~4d~i

平面形態 : 円形竪穴住居

規 模 : 直径9.50m、周壁の高さ30cm

内部施設 : 炉跡・柱穴・周溝・周壁

炉 : 楕円形地床炉 (長軸1m×短軸0.50m)

柱 穴 : 住居跡内に多数のピットが存在するが、重複する住居跡との兼ね合いで柱穴は不明である。

周 溝 : 幅45cm、深さ20cmの周溝が北側で確認。

遺 物 : 縄文土器 (318~320)・土偶 3 (36)・土製耳飾 3 (91・92・94)・有孔球状土製品 2 (50・51)・石鏃 13 (39・40・42・69)・石錐 2 (85)・打製石斧 2・磨製石斧 9 (139)・小形磨製石斧 2 (217・228)・石錘 4 (267)・凹石 18・磨石 7・石剣 1・大形石棒 3 (59・60)・小形石棒 1 (65)・垂玉 1 (4)

時 期 : 中道VII期 (大洞C1~C2式段階か)

そ の 他 : 第61号・第62号・第71号住居跡の3軒が重複。

○第62号住居跡（第20図）

位 置：VIII-E-9～10d～i、IXE-1～5d～j

平面形態：円形竪穴住居

規 模：直径12m、周壁の高さ20cm

内部施設：周溝・周壁・柱穴

炉 ；不明

柱 穴：3軒の住居跡が重複しており、確実な柱穴は不明。

周 溝：幅・深さとも30cmの周溝が第61号住居跡の外側を巡っている。

遺 物：縄文土器・土偶1（28）・石鏃3（22）・石錐1・磨製石斧6・石錘2・凹石12（295）・磨石1・石皿1（340）・独鈷石1（36）・石棒1

時 期：中道VII期（大洞C1～C2式段階か）

そ の 他：第61号住居の廃棄後に、第62号住居が建築されている。第61号住居跡の覆土中に粘土を固く締めた貼床が見られる。また、貼床の付近で炭灰層が確認され、火災を受けた住居と思われる。

○第71号住居跡（第20図）

位 置：VIII-E-9～10d～i、IXE-1～5d～j

平面形態：円形竪穴住居

規 模：直径11m、周壁の高さ5cm

内部施設：柱穴・周溝

炉 ；不明

柱 穴：明確な第71号住居跡の範囲は、東側の周溝と第62号住居跡との間であり、その間にピットは存在するが、確実性は疑わしい。

周 溝：幅40cm、深さ30cmの周溝が東側で確認。

遺 物：他の住居跡と重複しない部分が少ないため、遺物は不明。

そ の 他：3軒の住居跡が重複。先後関係は、第62号住居の貼床が第61号の覆土にあることから第61号住居が先であることは判明するが、第71号との関係は不明である。

○第63号住居跡（第21図）

位 置：XE-3～5a・b

平面形態：円形竪穴住居

規 模：直径8.70m

内部施設：炉跡・柱穴・周溝

炉 ；不明

柱 穴：不明

周 溝：幅30～50cm、深さ40cm

遺 物：縄文土器（321～338）・土偶1（33）・石鏃7（41・61）・磨製石斧5（223）・凹石4・磨石4・砥石1・石冠1（33）・石棒1

4軒の住居が重複するため、4軒の住居跡出土遺物の区分が困難であり、ここで一括記載した。

時 期：中道VII期（大洞C2式段階）

そ の 他：地山面で第63号・第69号・第70号・第72号の4軒の円形竪穴住居跡が重複。それぞれの住居跡

の範囲は、周溝に囲まれた中を範囲とした。

○第69号住居跡（第21図）

位 置：IXD-10j、IXE-10a、XD-1～3i-j、XE-1～3a-b

平面形態：円形竪穴住居

規 模：直径5.35m

内部施設：炉跡・周溝

炉 　：円形石組炉（直径0.80m）

柱 穴：直径40～50cm、深さ50cmの柱穴が4本存在する。柱の間隔は、東西が2.50m、南北が1.50mの等間隔である。

周 溝：幅25cm、深さ30cm

時 期：中道VII期（大洞C2式段階か）

そ の 他：地山面での石組炉と周溝で住居跡と判断した。4軒の住居跡が重複。

○第70号住居跡（第21図）

位 置：XE-3～5a・b

平面形態：円形竪穴住居

規 模：直径4.10m

内部施設：柱穴・周溝

炉 　：不明

柱 穴：周溝に囲まれた中にピットは存在するが、本住居の柱穴かは不明。

周 溝：幅25cm、深さ15cm。

時 期：中道VII期（大洞C2式段階か）

そ の 他：第63号・第69号・第70号・第72号住居跡の4軒が重複。

○第72号住居跡（第21図）

位 置：XE-3～5a・b

平面形態：円形竪穴住居

規 模：直径6.50m

内部施設：柱穴・周溝

炉 　：楕円形地床炉（長軸1m×短軸0.70m）

柱 穴：周溝に囲まれた中にピットは存在するが、本住居の柱穴かは不明。

周 溝：幅35cm、深さ15cm。

時 期：中道VII期（大洞C1式段階か）

そ の 他：第63号・第69号・第70号・第72号住居跡の4軒が重複。

○第66号住居跡（第22図）

位 置：IXD-1～8e-j

平面形態：円形竪穴住居

規 模：直径10m位

内部施設：炉跡・周溝・柱穴

炉 　：円形地床炉（長軸1.70m×短軸1.50m）。若干くぼんでいた。

柱 穴：ピットは多数あるが、確実な柱穴は不明。  
周 溝：幅30～50cm、深さ40～70cmほどの周溝を推定範囲の半分ほどの範囲で確認。西側で周溝が2重になっているところがある。改築を行っているのかは不明である。  
遺 物：縄文土器（339～358）・円板状土製品1・石鏃11（7・63）・石錐1（87）・打製石斧1・磨製石斧2・凹石5・磨石4・石冠1（32）・小形石棒1（68）  
時 期：中道VII期（大洞C2式段階）  
そ の 他：本住居跡の地山が青灰色粘土であるため、床面の判定が困難であった。このため、炭灰層と貼床の広がりや周溝をもって住居跡の範囲とした。床面のかなりの部分が炭灰層で覆われ、炭化した柱や材が出土した。火災に遭った住居と思われる。また、河原石が多数床面に位置していた。中には炭化材の上に河原石がある状態もみられた。

○第67号住居跡（第23図）

位 置：IXE-7～10b～f、XE-1c～f

平面形態：円形竪穴住居

規 模：直径8m

内部施設：周溝・柱穴

炉 ：不明

柱 穴：確実な柱穴は不明。

周 溝：幅35cm、深さ30cm。

遺 物：縄文土器・円板状土製品1・石錘1・凹石1

時 期：中道VII期

そ の 他：周溝のみで住居跡とした。内側にも直径5mほどの周溝（幅30～50cm、深さ10～25cm）が巡っている。その規模は小形の竪穴住居跡の規模に相当するものであることから、内側の周溝も住居跡の可能性はある。

○第1号住居跡（第24図）

位 置：IVE-3b

平面形態：不明

内部施設：石組炉

炉 ：長方形石組炉（長軸1.10m×短軸0.60m）。埋甕をもつ。

遺 物：炉埋甕（1）炉縁の土器（2）・土偶1（15）・三角形土版1（40）・打製石斧2・凹石5・磨石1

時 期：中道IIa期（大木8b式古段階）

そ の 他：炉縁の石に装飾的な土器の把手破片が組み込まれていた。その反対側の床面に頭部と両腕を欠損した土偶が横たわっていた。黒褐色土中に位置していた。

○第2号住居跡（第24図）

位 置：IIIE-8c

平面形態：不明

内部施設：石組炉

炉 ：石組炉

時 期：不明

そ の 他：黒褐色土中に位置する焼けた3個の石から炉と認定した。

○第3号住居跡（第24図）

位 置：IVE-5a・b

平面形態：不明

内部施設：石組炉

炉：長方形石組炉（長軸1.30m×短軸1m）。埋甕をもつ。

遺 物：埋甕

時 期：中期中葉（炉跡の形態から）

そ の 他：黒褐色土中に炉石が位置していた。

○第4号住居跡（第24図）

位 置：IIIE-10c・d

平面形態：不明

内部施設：石組炉

炉：長方形石組炉（残存部1m）

時 期：中期中葉（炉の形態から）

そ の 他：黒褐色土中に位置していた。

○第6号住居跡（第24図）

位 置：IIID-7d

平面形態：不明

内部施設：石組炉

炉：楕円形石組炉（長軸1.20m×短軸0.80m）。炉の中央部に埋甕

遺 物：縄文土器（14）

時 期：中期中葉（炉の形態から）

そ の 他：地山直上で検出。発掘調査用の排水溝の設営工事で、炉石の一部を破損した。

○第7号住居跡（第24図）

位 置：IIID-8f

平面形態：不明

内部施設：石組炉

炉：A字形の複式炉（A字形の長さ：1.60m、底辺の長さ：1.10m）。埋甕が石組炉の頂点にあり、炉の内部には土器が敷かれていた。

遺 物：炉埋甕（15）・土器

時 期：中道III期（大木9～10式段階、炉跡の形態から）

そ の 他：地山直上で炉跡を検出。

○第8号住居跡（第25図）

位 置：IIID-10e

平面形態：不明

内部施設：石組炉

炉：長方形石組炉（長軸1.10m×短軸0.70m）。内部に土器が敷かれていた。

遺物：縄文土器

時期：中期中葉（炉の中に敷かれていた土器は、中期の粗製土器である）

その他：黒褐色土中に位置していた。

○第9号住居跡（第25図）

位置：IVD-3h・i

平面形態：不明

内部施設：炉跡

炉：A字形の複式炉（A字形の長さ：1.50m、底辺の長さ：1.30m）。炉の頂点に埋甕があり、炉の内  
部には石が敷き詰められていた。炉の内部は、底辺部分に向かって傾斜している。

遺物：炉埋甕（16）

時期：中道Ⅲ期（大木9～10式段階、炉の形態から）

その他：地山直上で検出。

○第10号住居跡（第25図）

位置：IVD-2b・c

平面形態：不明

内部施設：石組炉

炉：正方形石組炉（一辺：0.70m）。炉の外側に埋甕がある。

遺物：埋甕（17）

時期：中道Ⅳ期（三十稲場式段階）

その他：地山直上で埋甕をもつ炉跡を検出。

○第11号住居跡（第25図）

位置：IIC-8f

平面形態：不明

内部施設：石組炉

炉：長方形石組炉（残存長軸0.80m×短軸0.60m）。炉の中央部と思われるところに、大小2個の埋  
甕が入子の状態であった。

遺物：埋甕2（18）

時期：中道Ⅱa期（大木8b式古段階）

その他：地山直上で炉跡を検出。

○第12号住居跡（第25図）

位置：IIC-8・9g

平面形態：不明

内部施設：石組炉

炉：長方形石組炉（長軸1.85m×短軸0.60m）。炉の内部に、土器が敷かれていた。

遺物：炉床に敷かれていた縄文土器（19）

時期：中期中葉

その他：地山直上で炉跡を検出。

○第13号住居跡（第25図）

位 置：III C-2 e

平面形態：不明

内部施設：石組炉

炉：長方形石組炉（残存長軸0.70m×短軸0.55m）

時 期：中期中葉（炉跡の形態から）

そ の 他：地山直上で炉跡を検出。

○第14号住居跡（第26図）

位 置：II C-10 g

平面形態：不明

内部施設：石組炉

炉：長方形石組炉（残存長軸1.30m×短軸0.50m）

時 期：中期中葉（炉の形態から判断）

そ の 他：地山直上で炉跡を検出。西側に大きな礫があるが、本炉跡との関係は不明である。

○第15号住居跡（第26図）

位 置：II C-7 d

平面形態：不明

内部施設：石組炉

炉：長方形石組炉（残存長軸0.55m）

長方形石組炉の一辺に接して埋甕がある。

遺 物：炉埋甕（20）

時 期：中道II a期（大木8 b式古段階）

そ の 他：埋甕は装飾的な大木8 b式段階の土器である。炉は地山直上に位置していた。

○第18号住居跡（第26図）

位 置：IV E-6 a

平面形態：不明

内部施設：石組炉

炉：長方形石組炉（残存長軸1 m×短軸0.75m）。ほぼ中央部に埋甕がある。

遺 物：炉埋甕・打製石斧1

時 期：後期か

そ の 他：地山直上に位置している焼けた石と埋甕、それに焼土の存在から炉跡と判断した。

○第19号住居跡（第26図）

位 置：III C-2 f

平面形態：不明

内部施設：炉跡

炉：長方形石組炉（?）

時 期：中期中葉（焼土の広がり長方形石組炉の範囲に類似しているところから）

そ の 他：黒褐色土中にある2個の石と焼土で炉跡とした。中世の第1号地下式横穴で炉跡の大半が壊さ

れている。

○第23号住居跡（第26図）

位 置：IID-9j

平面形態：不明

内部施設：炉跡

炉：長方形石組炉（長軸1.45m×短軸0.55m）。炉の内部に土器が敷かれていた。

遺 物：縄文土器・炉床に敷かれていた縄文土器（83）・凹石1

時 期：中道IIa期（大木8b式古段階）

そ の 他：石組炉は地山直上に位置していた。

○第25号住居跡（第26図）

位 置：VF-9～10d～g、VIF-1d～g

平面形態：不明

内部施設：炉跡

炉：長方形石組炉（残存長軸1.90m×短軸0.60m）

遺 物：縄文土器（94）・小形土器（95）・土偶（20）・円板状土製品1・石鏃2（12・24）・打製石斧2・凹石1・石皿1

時 期：中道V期（南三十稲場式段階）

そ の 他：地山直上に炉が存在していた。長軸に沿った炉の中央部に発掘調査用の排水溝が切られていた。

○第27号住居跡（第26図）

位 置：VE-7・8g

平面形態：不明

内部施設：炉跡

炉：楕円形石組炉（残存長軸1.40m×短軸0.70m）。埋甕がほぼ中央部にある。

遺 物：縄文土器（112～124）・炉埋甕（112）・炉床に敷かれていた縄文土器（115・116～124）

時 期：中期中葉

そ の 他：第28号住居跡と上下に重複して存在。第27号が下部に位置していた。

○第28号住居跡（第26図）

位 置：VE-7・8g

平面形態：不明

内部施設：炉跡

炉：楕円形石組炉（残存長軸約1.10m）

遺 物：縄文土器（108～111）・石皿1（338）、炉の中から出土

時 期：中期

そ の 他：第27号住居跡と重複。第27号とはほぼ直角に交わるように位置していた。

○第29号住居跡（第27図）

位 置：IVF-9b

平面形態：不明

内部施設：炉跡



炉：長方形石組炉(残存長軸0.50m×短軸0.40m)。石組炉の北側残存部に埋甕がある。埋甕には、大木8b式段階の装飾的な土器が使用されている。

遺物：炉埋甕(125)

時期：中道IIa期(大木8b式古段階)

その他：黒褐色土中に炉跡が存在していた。

○第30号住居跡(第27図)

位置：VF-5a・b

平面形態：不明

内部施設：炉跡

炉：楕円形石組炉(長軸1.10m×短軸0.55m)

埋甕が中央部にある。埋甕の上に河原石があった。炉石は、一部を欠損していた。

遺物：炉埋甕(126)

時期：中道II期(大木8b式段階)

その他：地山直上で炉跡を検出。

○第32号住居跡(第27図)

位置：IVE-1f・g

平面形態：不明

内部施設：炉跡

炉：石組炉(A字形の複式炉か)。焼土と炉縁の石から石組炉を判断したものである。

遺物：炉埋甕(144)

時期：中道II期(大木8b式段階)

その他：地山直上に位置していた。

○第40号住居跡(第27図)

位置：VE-2d・e

平面形態：不明

内部施設：炉跡

炉：長方形石組炉(残存長軸1.20m×短軸0.70m)。北西先端部に埋甕が位置していた。

遺物：埋甕

時期：中期中葉(炉の形態から)

その他：黒褐色土中に位置していた。

○第42号住居跡(第27図)

位置：VE-6i・j

平面形態：不明

内部施設：炉跡

炉：長方形石組炉(長軸0.85m×短軸0.45m)。石組炉の北側と中心部に埋甕が位置していた。大木9式段階の装飾的な土器が埋甕に利用。

遺物：炉埋甕(195)

時期：中道IIIa期(大木9式段階、埋甕から)

その他：第31号住居跡の覆土に炉跡が位置していた。

○第53号住居跡（第27図）

位置：IIC-7～8h

平面形態：不明

内部施設：炉跡

炉：方形石組炉（北側の辺：1.30m）

時期：不明

その他：地山面に位置していた。

○第54号住居跡（第27図）

位置：VIF-3・4b・c

平面形態：不明

内部施設：炉跡

炉：石組炉（残存部分の長さ：1m）

時期：不明

その他：炉の縁石数個のみで炉跡とした。

○第55号住居跡（第27図）

位置：VIIF-4e

平面形態：不明

内部施設：石組炉

炉：楕円形石組炉（残存長軸1m×短軸0.70m）。中央部に埋甕。

遺物：炉埋甕（250）

時期：後期

その他：VIIF-P94に切られ、石組炉の南半分しか残っていなかった。

○第56号住居跡（第28図）

位置：VIIF-9b

平面形態：不明

内部施設：炉跡

炉：長方形石組炉（長軸1.20m×短軸0.55m）。中央に埋甕。

遺物：炉埋甕（248）

時期：中道II期（炉跡の形態から）

その他：地山面に位置していた。

○第57号住居跡（第28図）

位置：VIF-1a

平面形態：不明

内部施設：炉跡

炉：楕円形石組炉（残存長軸1m×短軸0.70m）。中央部に埋甕。

遺物：炉埋甕（249）

時期：中道II期（炉跡の形態から）

その他：地山面に位置していた。

○第58号住居跡（第28図）

位置：VIE-1i

平面形態：不明

内部施設：炉跡

炉：長方形石組炉（長軸1.30m×短軸0.60m）

時期：中期

その他：地山面に位置していた。

○第59号住居跡（第28図）

位置：VIE-10h

平面形態：不明

内部施設：炉跡

炉：焼土の範囲から長方形石組炉と推定（長軸1m×短軸0.40m）

遺物：石鏃1

時期：中期

その他：炉の端にあるピットは別

○第64号住居跡（第28図）

位置：IXE-4C

平面形態：不明

内部施設：炉跡

炉：石組炉。埋甕が焼土の中心部に位置している。

遺物：炉埋甕（251）

時期：中道Ⅶ期

その他：石組炉と思われる石と、縁石を抜いた痕跡が2カ所に見られ、これらに囲まれた中に埋甕を中心とした焼土が広がっていたことから、炉跡と判断した。

○第65号住居跡（第28図）

位置：VE-10b・c

平面形態：不明

内部施設：炉跡

炉：石組炉（残存長さ0.94m）。縁石から80cmほどのところに埋甕がある。

遺物：炉埋甕・凹石2・石鏃2

時期：中期（中期の住居跡が存在する地域に位置することから）

その他：地山面にある縁石と埋甕で炉跡と判断。

○第68号住居跡（第28図）

位置：IXF-6f

平面形態：不明

内部施設：炉跡

炉：円形石組炉（長軸0.90m×短軸0.80m）。やや南よりのところに土器の破片がある。

時 期：中道Ⅶ期

そ の 他：地山面に位置していた。

(2) 掘立柱建物跡 (第15・16図)

直径・深さとも竪穴住居跡の柱穴より大きくて、かつ石や版築土で根固めをしてあるピットで構成される建物跡である。中道の調査では3棟の掘立柱建物跡が推定することができた。この3棟以外にも存在していた可能性が極めて高いが、現場及び整理作業中でも確認はできなかった。

○第1号掘立柱建物跡 (第15図)

位 置：IVD-5・6d、IVE-5・6a

形 態：長方形

規 模：梁間1間 (3m)×桁行2間 (5.50m)

柱穴規模：直径50～90cm、深さ50～90cm。柱痕は直径40cm。

根 固 め：石で根固め

遺 物：縄文土器 (263～270)

時 期：中道Ⅳa期 (三十稲場式古段階)

そ の 他：特になし

○第2号掘立柱建物跡 (第16図)

位 置：VIE-8g・h

形 態：長方形プランに、棟持ち柱を持つ。

規 模：梁間1間 (3.50m)×桁行2間 (6.60m)。棟持ち柱間 (8.30m)

柱穴規模：直径70～90cm、深さ90～100cm。柱痕は40cm。

根 固 め：石で根固め

遺 物：縄文土器 (271・272)

時 期：中道Ⅳ期 (三十稲場式段階)

そ の 他：特になし

○第3号掘立柱建物跡 (第16図)

位 置：ⅧIE-6・7c

形 態：長方形プランに、棟持ち柱を持つ。

規 模：梁間1間 (3.30m)×桁行2間 (8.30m)。棟持ち柱間 (11.3m)

柱穴規模：直径1～1.20m、深さ0.90～1.20m。柱痕は50～60cm。

根 固 め：石で根固め

遺 物：縄文土器 (273～280)

時 期：中道Ⅳ期 (三十稲場式段階)

そ の 他：特になし

・掘立柱建物の柱穴跡 (第17・18図)

掘立柱建物を構成する根固めが見られる柱穴跡をここにまとめた。版築土だけの根固めは少なく、多くは礫と版築土との組み合わせである。次に主な柱穴の計測値などを収録した表を掲げる。

掘立柱穴跡一覧表

ピット番号	位置	図No	平面形	掘り形(m)	深さ(cm)	根固め	備考
VIE-P 17	VIE-1c	17	円形	0.55×0.50	50	礫+版築土	
VIE-P 156	VIE-7h	17	円形	0.75×0.70	70	礫+版築土	
VIE-P 222	VIE-3g	17	円形	直径0.60	80	礫+版築土	
VIE-P 240	VIE-4g	17	円形	直径0.90	90	礫+版築土	
VIE-P 2	VIE-6g	17	円形	0.95×0.80	30	礫+版築土	
VII F-P 27	VII F-1c	17	円形	1.75×1.55	1.30	礫+版築土	
VII F-P 30	VII F-3d	17	円形	直径1.00	1.00	礫+版築土	
VII F-P 114	VII F-10c	18	円形	直径1.00	1.00	礫+版築土	
VIII E-P 13	VIII E-1j	18	円形	直径0.60	0.50	礫+版築土	
VIII E-P 61	VIII E-4h	18	楕円形	1.30×1.10	0.70	礫+版築土	
IX D-P 22	IX D-1j	18	円形	直径0.70	0.60	礫+版築土	
IX E-P 6	IX E-5j	18	円形	直径1.00	0.70	礫+版築土	
IX E-P 22	IX E-2g	18	円形	直径1.00	1.10	礫+版築土	
IX E-P 42	IX E-8h	18	楕円形	1.30×1.00	1.00	礫+版築土	

## (3) フラスコ状ピット

開口部が狭くて内部が袋を広げたようなピットを、フラスコ状ピットとした。中道からは67基が確認されている。貯蔵用の穴と考えられているが、トチの実などの植物遺体の存在は確認されなかった。炭化したトチの実が後述するピットから出土しており、フラスコ状ピットが果たして貯蔵用の施設なのかという疑問が中道の調査を通じて生じている。この性格付けについては、今後の課題としたい。

## ○FP 2 (第29図)

位置：III C-4e・f

規模：開口部直径0.80m、基底部直径2m、深さ1.40m

遺物：小形土器1・縄文土器・凹石3

時期：中期

その他：フラスコ部の広がり、開口部から1m下と、かなり低い位置にある。

## ○FP 3 (第29図)

位置：III C-5c・d

規模：開口部直径2m、深さ0.70m

遺物：縄文土器

時期：中期

その他：上部に他のピットが掘られており、フラスコ状ピットとしての判断は基底部の広がりがフラスコ状ピットの形態に近いところから判断した。

## ○FP 4 (第29図)

位置：III C-1c・d

規模：開口部直径0.80m、基底部直径2.10m、深さ1.50m

遺物：一括土器1・縄文土器・板状石器1・凹石3

時 期：中期

そ の 他：覆土に地山の黄褐色土がいく筋か入っており、数回にわたって天井部が崩落した痕跡と思われる。崩壊の回数は、少なくとも3回位と思われる。

○FP6 (第30図)

位 置：III C-3・4 a

規 模：基底部直径1.50m、深さ1.40m

遺 物：縄文土器

時 期：中期

そ の 他：中世の第3号地下式横穴でFP6の上部が削られている。第17号住居と隣接し、FP7・8とも近接している。

○FP7 (第30図)

位 置：III C-2 b

規 模：開口部直径1 m、基底部直径1.80m、深さ0.9m

遺 物：縄文土器

時 期：中期

そ の 他：南側の基底部がFP8と重複している。

○FP8 (第30図)

位 置：III C-1・2 b

規 模：開口部直径0.60m、基底部直径2.10m、深さ1.30m

遺 物：縄文土器

時 期：中期

そ の 他：第3号地下式横穴と重なっている。

○FPI0 (第10図)

位 置：IIID-4 b (第21号住居跡内に位置)

規 模：基底部直径1.35m

遺 物：縄文土器・打製石斧1・石皿1

時 期：中期

そ の 他：第21号住居跡内に位置しているが、フラスコ状ピットは天井が崩落しやすい面があることから付属施設とは考えにくい。

○FPI1 (第30図)

位 置：IIIB-3・4 j、III C-3・4 a

規 模：開口部直径0.60m、基底部直径1.50m、深さ1.23m

遺 物：縄文土器

時 期：中期

そ の 他：第17号住居跡の北西側の周壁部分に位置している。

○FPI3 (第31図)

位 置：IVC-8・9 j

規 模：開口部直径0.90m、基底部直径2 m、深さ1.20m

遺 物：縄文土器

時 期：中期

そ の 他：フラスコ状の広がり、下部の方で、内部の高さは低い。

○FP15 (第31図)

位 置：IVC- 8j

規 模：基底部直径1.40m、深さ1m

遺 物：縄文土器・凹石1

時 期：中期

そ の 他：天井部の一部に他のピットが掘られている。

○FP16 (第31図)

位 置：IVC- 5f

規 模：基底部直径2.20m、深さ1m

遺 物：縄文土器・凹石1・打製石斧1・石棒1

時 期：中期

そ の 他：底にピット有り。

○FP18 (第32図)

位 置：IVD- 3f

規 模：基底部直径2.10m、深さ0.95m

遺 物：縄文土器 (359)。基底部から出土

時 期：中道I期 (大木8a式段階) か

そ の 他：FP21と南側が重複。開口部に他のピットが多数掘り込まれている。

○FP20 (第33図)

位 置：IVD- 5・6f

規 模：開口部直径0.50m、基底部直径0.80m、深さ0.70m

遺 物：縄文土器・石錘1

時 期：中期

そ の 他：小形のフラスコ状ピット

○FP22 (第32図)

位 置：IVD- 3e

規 模：開口部直径0.50m、基底部直径1.95m、深さ1.05m

遺 物：縄文土器・凹石1・石皿1

時 期：中期

そ の 他：基底部に小ピット有り。開口部と基底部の小ピットの位置がほぼ重なっている。

○FP24 (第33図)

位 置：IVD- 1・2b

規 模：開口部直径0.65m、基底部直径2.30m、深さ1m

遺 物：縄文土器

時 期：中期

その他：底に小ピット有り。河原石が基底部の小ピットの周辺に3個位置していた。

○FP29 (第33図)

位置：IC-10a・b、IIC-1a・b

規模：開口部直径0.60m、基底部直径1.70m、深さ0.85m

遺物：縄文土器・凹石1

時期：中期

その他：西側に浅いピットが掘られており、天井部が欠損している。

○FP30 (第34図)

位置：IIC-1a・b

規模：開口部直径0.70m、基底部直径1.80m、深さ0.80m

遺物：縄文土器・凹石2

時期：中期

その他：フラスコ状ピットのFP31・39が近接している。

○FP31 (第34図)

位置：IIC-2・3b

規模：開口部直径0.50m、基底部直径2.40m、深さ1m

遺物：なし

時期：中期

その他：基底部の北側がFP39と重複する。

○FP32 (第35図)

位置：IIC-4・5b

規模：開口部直径0.50m、基底部直径2m、深さ1.20m

遺物：縄文土器

時期：中期

その他：基底部に浅い小ピットがある。

○FP33 (第35図)

位置：IID-9・10a

規模：開口部直径0.50m、基底部直径1.45m、深さ0.70m

遺物：縄文土器

時期：中期

その他：フラスコ状の内部が薄い。

○FP34 (第35図)

位置：VD-1i

規模：基底部直径2.10m、深さ0.85m

遺物：縄文土器

時期：中期

その他：フラスコピットの開口部は別のピットにより削平され不明。基底部に河原石がある。



○FP35 (第36図)

位 置：IVD-10f～VD-1f

規 模：開口部直径0.90m、基底部直径2.10m、深さ0.65m

遺 物：縄文土器 (362)・凹石 1

時 期：中道Ⅰ期 (大木8a式段階)

そ の 他：開口部が基底部の外周より西側にずれている。

○FP36 (第36図)

位 置：IVD-10g～VD-10g

規 模：基底部直径2.40m、深さ0.90m

遺 物：縄文土器 (363・364)

時 期：中道Ⅰ期 (大木8a式段階)

そ の 他：天井部に多数のピットが掘り込まれている。

○FP37 (第36図)

位 置：VD-2j

規 模：基底部直径2.30m、深さ1.20m

遺 物：縄文土器 (365～371)・凹石 1・大形石棒 1 (39)

時 期：中道Ⅱa期 (大木8b式古段階)

そ の 他：底に小ピット有り。河原石が基底部にある。

○FP39 (第34図)

位 置：IIC-3b

規 模：基底部直径2.30m、深さ0.60m

遺 物：縄文土器

時 期：中期

そ の 他：基底部の広がり、フラスコ状ピットの規模に近いことからフラスコ状ピットと判断した。

○FP41 (第37図)

位 置：IVD-9f

規 模：開口部直径0.50m、基底部直径1.60m、深さ0.60m

遺 物：縄文土器 (375～378)・凹石 1

時 期：中道Ⅰ期 (大木8a式段階)

そ の 他：北側の天井部分は残っていたが、南側の天井部分は崩れていた。

○FP42 (第37図)

位 置：VD-3・4f

規 模：基底部直径1.85m、深さ0.60m

遺 物：縄文土器 (380～384)・凹石 1

時 期：中道Ⅰ期 (大木a式段階)。後期前葉の三十稲場式古段階の土器も少量含まれている。

そ の 他：天井部が崩落したフラスコ状ピットと思われる。

○FP43 (第37図)

位 置：VE-6a・b

規 模：開口部直径0.70m、基底部直径1.80m、深さ0.80m

遺 物：縄文土器（385～387）

時 期：中道IIa期（大木8b式古段階）

そ の 他：基底部に河原石がある。

○FP44（第37図）

位 置：VE-7b

規 模：基底部直径2.30m、深さ1m

遺 物：縄文土器（388～391）・石皿1

時 期：中道IIa期（大木8b式古段階）

そ の 他：底に小ピット有り。基底部の周囲に河原石が置かれていた。

○FP49（第38図）

位 置：VID-1・2i

規 模：開口部直径0.90m、基底部直径2.40m、深さ1.10m

遺 物：縄文土器（406・407）

時 期：中道I期（大木8a式段階）か

そ の 他：底に楕円形の小ピット有り。開口部は若干斜めに掘り込まれている。

○FP50（第38図）

位 置：VE-8f

規 模：基底部直径1.35m、深さ1m

遺 物：縄文土器（404・405）・石錘1・石皿2

時 期：中道I期（大木8a式段階）

そ の 他：西側に別のピットが掘られており、東側の天井部とフラスコ部だけが確認された。

○FP52（第38図）

位 置：VE-7・8a

規 模：開口部直径0.90m、基底部直径2m、深さ1m

遺 物：縄文土器（411）・凹石1

時 期：中道IIa期（大木8b式古段階）

そ の 他：天井部に別のピットがある。

○FP55（第39図）

位 置：VD-6・7j

規 模：基底部直径1.80m、深さ0.90m

遺 物：縄文土器（412）・凹石2

時 期：中道IIb期（大木8b式新段階）か

そ の 他：河原石が基底部にあった。天井部に多数のピットが掘られ、基底部の状況しか確認できない。

○FP57（第39図）

位 置：VIE-9・10e・f

規 模：基底部直径2.10m、深さ1.20m

遺 物：縄文土器（415～423）・凹石2

時期：中道IIa期（大木8b式古段階）

その他：断面は南側の部分での観察である。

○FP58（第39図）

位置：VID-5・6h・i

規模：基底部直径2.45m、深さ0.95m

遺物：縄文土器・凹石1

時期：中期

その他：開口部の状況は浅いピットが掘られているため不明。基底部に小ピットがある。天井部が崩落しているのか、ピットの覆土は天井部と思われる薄い地山の黄褐色土を挟んで2枚確認できた。

○FP59（第40図）

位置：VIII-5d

規模：開口部直径0.50m、基底部直径1.50m、深さ0.85m

遺物：縄文土器・打製石斧1・凹石1

時期：中期

その他：開口部に近い覆土に礫があった。

○FP62（第40図）

位置：VIE-4i

規模：基底部直径1.30m、深さ0.90m

遺物：縄文土器（428～431）・打製石斧1（109）

時期：中道I期（大木8a式段階）

その他：天井部は別のピットが掘られ、フラスコ部及び基底部の状況から判断。

○FP63（第40図）

位置：VIE-5・6a

規模：基底部直径2m、深さ0.70m

遺物：縄文土器（432～435）

時期：中道I～II期（大木8a～8b式段階）

その他：断面が観察できたのは西側であり、フラスコ部と基底部の断面である。河原石が基底部のほぼ中央部に固まって見られた。

○FP64（第41図）

位置：VID-7・8f・g

規模：基底部直径2.20m、深さ0.80m

遺物：縄文土器（436）・砥石1

時期：中道IIb期（大木8b式新段階）

その他：直径1mを超える別のピットなどが掘り込まれており、断面は基底部しか確認できなかった。基底部のほぼ中央部に河原石があった。

○FP65（第41図）

位置：VIE-1d

規模：基底部直径1.70m、深さ1.15m

遺物：縄文土器（437～440）・凹石3・磨石1  
時期：中道Ⅰ期（大木8a式段階）  
その他：天井部が崩落したのか、フラスコ部は薄い。

(4) トチの実ピット（第42図）

VIE・F、VIIFから炭化したトチの実を出土したピットが9基確認された。このピットを便宜上「トチの実ピット」とした。時期は中期中葉から後期中葉までである。VIE・Fのトチの実ピットは、上面から覆土の中ほどにかけてトチの実が位置していた。それに対し、VIIFのトチの実ピットは、5メートルほどの中に6基が位置し、覆土の上面に散らばっている状況のものが多い。

○VIE-P61（第42図）

位置：VIE-2g  
形態：円形  
規模：直径0.50m、深さ0.50m  
遺物：縄文土器・石錘1・凹石1・石皿1

トチの実：240粒（重さ1360g）。覆土の上から下までまばらに入っていた。貯蔵したものと思われる。

時期：中道Ⅵ期（三仏生式段階）

○VIF-P64（第42図）

位置：VIF-4b  
形態：楕円形  
規模：長軸1.20m×短軸1m、深さ0.50m  
遺物：縄文土器（506）

トチの実：50粒（重さ350g）。確認できたトチの実の位置は、ピットの壁から底面に近いところであるが、これはトチの実が炭化した範囲であり、トチの実の遺存状況からはかなり広く、かつ厚く堆積していたものと思われる。貯蔵したものと考えられる。

時期：中道Ⅲ期（大木9式段階）

○VIF-P89（第42図）

位置：VIF-5b  
形態：楕円形  
規模：長軸1m×短軸0.80m、深さ0.60m  
遺物：縄文土器（510）

トチの実：68粒（重さ470g）。覆土の中位からまとまって出土。貯蔵したものと思われる。

時期：中道Ⅱ期（大木8b式段階）

○VIIF-P2（第42図）

位置：VIIF-8・9c  
形態：楕円形  
規模：長軸0.70m×短軸0.50m、深さ0.30m  
遺物：縄文土器（517～522）

トチの実：150粒（重さ1010g）。覆土の上面から底部まで満遍なくトチの実があった。貯蔵したものと思わ

れる。

時期：中道IV～V期（三十稲場式～南三十稲場式段階）

○VIIF-P3（第42図）

位置：VIIF-8c

形態：楕円形

規模：長軸0.70m×短軸0.50m、深さ0.30m

遺物：縄文土器

トチの実：40粒（重さ260g）。全体的にまばらにトチの実が出土。

時期：中道IV期（三十稲場式段階）

○VIIF-P4（第42図）

位置：VIIF-7c

形態：楕円形

規模：長軸0.90m×短軸0.80m、深さ0.50m

遺物：縄文土器（523～528）

トチの実：35粒（重さ230g）。覆土の上面に多く、覆土中は上から下までまばらに出土した。

時期：中道IV期（三十稲場式段階）

○VIIF-P5（第42図）

位置：VIIF-6・7c

形態：楕円形

規模：長軸0.80m×短軸0.60m、深さ0.30m

遺物：縄文土器（528・529）

トチの実：20粒（重さ100g）。浅い皿状のピットの上面に散らばっていた。

時期：中道IV～VI期（三十稲場式～三仏生式段階）

○VIIF-P8（第42図）

位置：VIIF-9c

形態：円形

規模：直径0.90m、深さ0.50m

遺物：縄文土器（530～534）・石鏃1

トチの実：70粒（重さ460g）。覆土上面からまとまって出土。上面のトチの実だけが炭化して残ったものと思われ、場合によっては貯蔵したものと考えられる。

時期：中道IV～V期（三十稲場式～南三十稲場式段階）

#### (5) その他の土壌

縄文土器等が出土しているピットで、上記に含まれない性格不明なピットを表にまとめた。

その他の土壌-1

ピット番号	位置	形態	平面規模 (cm)	深さ(cm)	時期	備考
III B-P 11	III B-1 g・h	円形	直径110	10	中道IVa期（三十稲場式古段階）	土器（442）
III C-P108	III C-8 h	円形	直径130	15	中道IV期（三十稲場式段階）	土器（443）

その他の土壌-2

ピット番号	位置	形態	平面規模 (cm)	深さ(cm)	時期	備考
IIID-P33	IIID-6d・e	円形	直径180	150	中道I期 (大木8a式段階)	土器 (446)
IIIE-P123	IIIE-8f	楕円形	70×53	10	中道IIa期 (大木8b式古段階)	土器 (447)
IVD-P7	IVD-3・4i	円形	直径70	25	中道IV期 (三十稲場式段階)	土器 (449)
IVE-P154	IVE-10c・VE-1c	円形	直径30	20	中道VII期 (晩期)	
IVF-P12	IVF-6a	円形	直径55	30	中道IVa期 (三十稲場式古期)	土器 (450・451)
VD-P108	VD-2・3h	楕円形	145×85	50	中道VII期 (晩期)	土器 (453)
VD-P115	VD-3・4f	円形	直径185	60	中道VII期 (晩期)	土器 (454)
VD-P154	VD-7i	楕円形	100×75	130	中道VII期 (晩期)	土器 (455)
VD-P158	VD-7h	楕円形	26×18	40	中道IV期 (三十稲場式段階)	土器 (456)
VE-P30	VE-5f	円形	直径70	30	中道IVa期 (三十稲場式古段階)	土器 (457)
VE-P90	VE-4・5c・d	円形	直径220	130	中道V期 (南三十稲場式段階)	土器 (458)
VE-P151	VE-8f	円形	直径135	100	中道I期 (大木8a式段階)	土器 (459)
VE-P198	VE-10d	円形	直径110	120	中道I期 (大木8a式段階)	土器 (460・461)
VF-P31	VF-2・3i・j	円形	直径370	50	中道IV~VI期 (後期)	土器 (462~469・506)
VID-P27	VID-8i	円形	165×160	30	中道I期 (大木8a式段階)	土器 (501)
VIIIF-P61	VIIIF-3ef・4e	楕円形	175×130	41	中道V期 (南三十稲場式段階)	
VIE-P142	VIE-1g	楕円形	70×50	67	中道II期 (大木8b式段階)	弓筈出土
VIF-P15	VIF-9・10a	円形	直径43	66	中道IV期 (三十稲場式段階)	土器 (504)
VIF-P31	VIF-6c・d	円形	直径25	36	中道V期 (南三十稲場式段階)	
VIF-P61	VIF-6c	楕円形	60×32	43	中道VII期 (晩期)?	
VIF-P78	VIF-6b	円形	直径105	68	中道IV期	土器 (509)
VIF-P83	VIF-6b・c	楕円形	160×122	86	中道IV期 (三十稲場式段階)	土器 (507)
VIF-P84	VIF-7c	円形	68×60	25	中道IVb期 (三十稲場式新段階)	土器 (508)
VIF-P98	VIF-8e・9efg・10fg	長楕円	900×320	90	中道IV期 (三十稲場式段階)	土器 (511)
VIF-P99	VIF-10h・i	長楕円	600×180	63	中道IV~V期	土器 (512・513)
VIF-P101	VIF-7i	楕円形	153×120	32	中道IVa期 (三十稲場式古段階)	
VIIIE-P105	VIIIE-1i	円形	直径45	47	中道VI期 (三仏生式段階)	土器 (515)
VIIIE-P119	VIIIE-6g	円形	直径30	30	中道VI期 (三仏生式段階)	土器 (516)
VIIIF-P10	VIIIF-8a	楕円形	120×95	46	中道IV期 (三十稲場式段階)	土器 (535)
VIIIF-P13	VIIIF-6a	楕円形	60×45	49	中道VII期 (晩期)?	土器 (536)
VIIIF-P28	VIIIF-2・3g	楕円形	195×143	38	中道VI期 (三仏生式段階)	土器 (537)
VIIIF-P34	VIIIF-3f	円形	95×85	55	中道IVa期 (三十稲場式古段階)	土器 (538・539)
VIIIF-P53	VIIIF-5b・c	円形	160×150	65	中道IVa期 (三十稲場式古段階)	土器 (540・541)
VIIIF-P80	VIIIF-4d	楕円形	36×24	10	中道I期 (大木8a式段階)?	土器 (542)
VIIIF-P103	VIIIF-9c	円形	直径20	30	中道IVa期 (三十稲場式古段階)	

その他の土壌— 3

ピット番号	位置	形態	平面規模 (cm)	深さ(cm)	時期	備考
VIII-E-P2	VIII-E-5 i・j	円形	188×170	41	中道IVa期(三十稲場式古段階)	
VIII-E-P23	VIII-E-4 b	円形	直径60	66	中道IVb期(三十稲場式新段階)	土器 (545)
VIII-E-P37	VIII-E-5・6 c	不正円	直径110	73	中道II期 (大木8 b式段階)	土器 (546)
MP15	VIF-10f	—	—	—	中道IIIb~IVa期 (大木10式~三十稲場式段階)	土器 (548)
MP20	VIF-9 h	—	—	—	中道IIIb期 (大木10式段階)	
MP21	VIG-10b	—	—	—	中道IIIb期 (大木10式段階)	土器 (549)

(6) 弓矢出土のピット (第4図)

骨角器の弓矢が、VIE-P142から出土した。骨角器などの有機質の遺物はこれまでのところ、長岡市内の縄文遺跡からの出土はなく、トチの実と同じく初めての出土例である。

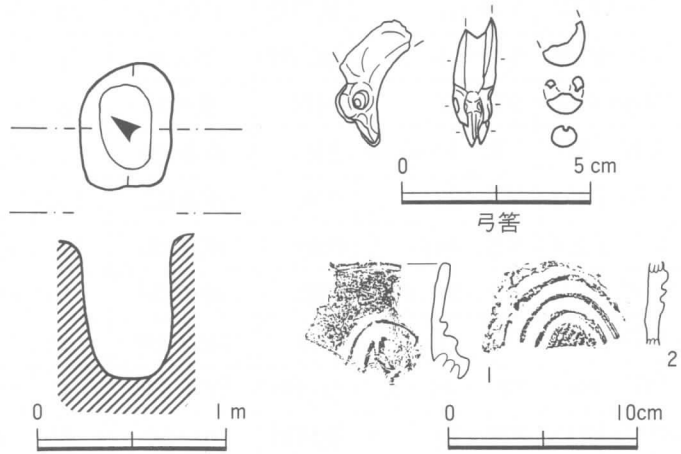
弓矢を出土したピットは、縄文後期初頭の三十稲場式段階の第2号掘立柱建物跡などの、掘立柱穴跡が集中している箇所位置していた。規模は長軸65cm×短軸50cm、深さ80cmほどの楕円形を呈するピットで、規模的には掘立柱穴跡に近い。ピットからは弓矢の他に縄文土器などが出土している。

弓矢は、横から見ると鳥のクチバシのような形状で、大きな目が付いている。また、弓の弦を通すように背中が大きく割れている。弓矢の材質は、動物の骨であるが、動物の特定まではできなかった。

弓矢のピットからは第4図で示した縄文土器などが出土している。1は口縁部の破片で、無文の口縁に立体的な渦巻文が貼付されている。2は胴部の破片で、縄文を地文とした上に円弧文が描かれている。土器の時期は、いずれも中期中葉の大木8 b式段階と思われる、弓矢はこのころの所産と考えられる。

小 結

縄文時代の遺構は、竪穴住居跡や掘立柱建物跡の建物跡を中心に、遺跡の東から南西にかけて弓なりに展開していた。建物以外には、これまで貯蔵用の遺構とされてきた中期のフラスコ状ピット、炭化したトチの実が大量に出土したピットなどが存在していた。中道の縄文時代の遺構で注目されるのは、炭化したトチの実や建物の建築部材などを出土した中期・晩期の竪穴住居跡、トチの実ピットなどである。これまでの長岡市内の縄文集落遺跡での発掘では出土しなかったものばかりで、中道の土質が若干の湿地であったことが、これらの遺構と遺物を長い年月にわたって保存してきたことにつながったものと考えられる。このことが縄文遺構の研究に、特に竪穴住居跡の研究に大きく寄与することになるものと確信している。



第4図 弓矢出土ピット及び弓矢並びに出土土器

### 3 遺物

発掘調査区のほぼ全域にわたって縄文時代の遺物が多量に出土した。その種別としては、土器・土製品、石器・石製品、骨器（40ページ参照）がみられる。以下、各種別ごとに概要を記載する。

#### (I) 縄文土器（第51～76図、観察表1～6）

出土した土器の総量は、整理用コンテナで1,035箱を数える。その内訳は、住居跡出土156箱、フラスコ状ピット出土19箱、その他のピット出土216箱、包含層出土644箱である。時期的には中期中葉から晩期後葉にわたり、量的には中期中葉～後葉が最も多く、次いで後期初頭、後期前・中葉、晩期の順である。出土状況には概ね遺構の位置に対応した傾向が認められ、中期の遺物は発掘調査区の西側から中央部に、後期は中央部から東側にかけて、また晩期は東側と中央部南側付近から主に出土している。

ここでは、各遺構（竪穴住居跡・掘立柱建物跡・フラスコ状ピット・その他のピット）及び遺物包含層から出土した主な土器を取り上げた。出土量が極めて多く、また時間的な制約もあって、全資料を網羅するような属性の細分を行うことができなかったため、器形や文様を中心に系統や時期などの概要を適宜記載する（観察表は完形復元個体についてのみ示した）。系統については、関連する土器型式名や在地系・東北系・北陸系・関東系などの表記によって説明を加えた。また時期については、新潟県内通有の土器編年観に基づいて次の区分を設定し記載に用いた。

中道Ⅰ期（中期中葉、大木8a式段階）

中道Ⅱ期（中期中葉、大木8b式段階、古段階：Ⅱa期、新段階：Ⅱb期）

中道Ⅲ期（中期後葉、大木9～10式段階、9式段階：Ⅲa期、10式段階：Ⅲb期）

中道Ⅳ期（後期初頭、三十稲場式及び直前段階、古段階：Ⅳa期、新段階：Ⅳb期）

中道Ⅴ期（後期前葉、南三十稲場式段階）

中道Ⅵ期（後期中葉、三仏生式段階）

中道Ⅶ期（晩期前葉～後葉、大洞BC～A式段階）

#### ① 竪穴住居跡・掘立柱建物跡出土の土器（第51～62図、観察表1・2）

竪穴住居跡の覆土や炉跡、掘立柱建物跡を構成する柱穴から出土した主な土器をまとめた。竪穴住居跡や炉跡は中期中葉（Ⅱ期）～後葉（Ⅲ期）、掘立柱建物跡には後期初頭（Ⅳ期）～前葉（Ⅴ期）の土器が多く認められる。概ね中期、後期、晩期の順で各遺構ごとに記載したが、時期の明確な土器片が出土していない遺構や土器片自体が出土しなかった遺構については記載を省略した。

第1号住居跡出土（第51図1・2） 長方形石組炉のみ確認の住居跡で、炉内に埋設されていた1は斜行縄文を施す深鉢。2は炉縁に組み込まれていた土器破片で、山形の波状口縁である。隆線による渦巻状の文様を施す。Ⅱa期の在地系土器。

第5号住居跡出土（第51図3～13） 長方形住居の覆土から出土。隆線による渦巻状の文様をもつ3・6・7はⅡ期の在地系である。火焰型土器に類似する隆線を施す5、竹管沈線による区画文の9、口縁に幅広の沈線を巡らす11・12はⅠ期に位置づけられる。8は縄文を地紋に渦巻状の沈線を加える手法でⅢb期の在地系、4と13は東北系（大木9式）の波状口縁部でⅢa期。時期的に混在するが、住居形態からⅢa期が主体とみられる。

第6号住居跡出土（第51図14） 楕円形石組炉のみ確認の住居跡で、14は炉中央に埋設されていた。斜行縄文を施す深鉢底部である。中期中葉の所産か。

第7号住居跡出土（第51図15） A字形の複式炉のみ確認の住居跡で、15は炉の頂部に埋設されていた。



斜行縄文を施す深鉢で、口縁部を欠損する。炉の形態からⅢ期の所産と考えられる。

第9号住居跡出土(第51図16) A字形の複式炉のみ確認の住居跡で、15は炉の頂部に埋設されていた無文の深鉢。胴部のみ残存。炉の形態からⅢ期の所産と考えられる。

第10号住居跡出土(第51図17) 正方形石組炉のみ確認の住居跡で、17は炉外縁西側に埋設されていた。不定方向の斜行縄文を施す深鉢で胴部のみ残存。炉の形態からⅣ期に位置づけられる。

第11号住居跡出土(第51図18) 長方形石組炉のみ確認の住居跡で、大小2個体の埋設土器あり、18はそのうちのひとつ。口縁部には無文帯が巡り、胴部には斜行縄文を地紋とした竹管沈線の区画がみられる。第17号住居跡出土の32と同様の文様構成をもつⅡa期の在地系である。

第12号住居跡出土(第52図19) 長方形石組炉のみ確認の住居跡で、19は炉内に敷き詰められていた。斜行縄文を施す深鉢底部。中期中葉の所産とみられる。

第15号住居跡出土(第52図20) 長方形石組炉のみ確認の住居跡で、20は炉内に埋設されていた。頸部が屈曲するキャリパー形の深鉢で、口縁部には渦巻状の突起を巡らし縦位の沈線を充填する。頸部は無文帯となり、胴部には隆線区画内に斜位の細沈線を施す。Ⅱa期に位置づけられる。

第16号住居跡出土(第52図21~28) 円形住居の覆土から出土。若干の混在はあるが、Ⅱb期の復元個体がまとまっている。21~23は平口縁の深鉢で、21と23は頸部が内湾する形態、22は口縁部が外反し端部がやや内湾する形態を呈する。21は口縁部に刻目、頸部には平行する沈線を巡らし、胴部には渦巻状突起をもつ区画内に矢羽状の細沈線を充填する。22は渦巻状の区画文に縦位の沈線を組み合わせる。23は口縁部と頸部に横位各2列の刺突による列点文を巡らし、4単位の渦巻状突起を付けた橋状把手をもつ。胴部には渦巻状の区画文に縦位の竹管沈線を施す。これらはⅡb期の在地系土器である。24は口縁部に渦巻状の沈線を巡らす深鉢でⅡb期。25は口縁部が内湾する浅鉢の胴部片で、包含層出土561に共通する文様を施す。Ⅲa期の所産とみられる。26は口縁部に貫通しない円孔を巡らし、胴部には縄文を地紋として剣先文状の沈線を描く。小形品の27は粗い細沈線で半円弧状のモチーフ等を描く。26・27はⅡ期の所産か。28は斜行縄文を施す深鉢である。

第17号住居跡出土(第52~54図29~59) 円形住居の覆土から出土。若干の混在はあるが、Ⅱa期の復元個体がまとまっている。29は4単位の大振りな把手をもつ深鉢。口縁部には装飾的な渦巻状の突起を配し、縦位の細沈線を充填する。頸部は無文帯となり、胴部には斜行縄文を地紋として竹管沈線で区画する。把手の文様はやや異なるが、30・37・38・41も同様であり、Ⅱa期の在地系土器の特徴を示す。31は平口縁のキャリパー形の深鉢で、口縁部に横S字状の渦巻文が巡る。頸部は無文となり、胴部には斜行縄文を施す。東北系(大木8b式)で42も同類。32は平口縁の深鉢で、口やや外反する口縁部は無文帯となり、胴部には斜行縄文を地紋として竹管沈線の区画が施されている。口縁部が剥落する33は、4単位の把手をもつとみられ、頸部にはさらに橋状把手を付ける。胴部の区画内には矢羽状沈線を加える。34・35も胴部の区画内に矢羽状沈線を充填する類。34は2単位の波状口縁、35は平口縁気味で口縁部に剣先状の文様を加えられている。36・39・43・44なども同種の口縁部片。45・46は口縁部を隆線や幅広の沈線で区画し斜行沈線を加えるもので、Ⅱ期の非在地系とみられる。47~53・57は胴部破片で、区画内に矢羽状沈線や斜行縄文が認められる。口縁部に円形印刻文を施す54、半截竹管による波状の平行沈線を巡らす56・58(同一個体片)、横位と縦位の複数の平行沈線で区画する59はⅠ期に位置づけられる在地系である。

第18号住居跡出土(第54図60) 長方形石組炉のみ確認の住居跡で、60は炉内に埋設されていた。無文の深鉢底部で、底面に網代痕を残す。後期の所産か。

第20号住居跡出土(第54図61~82) 長方形住居の覆土から出土。IIIa期の個体がまとまっている。62~66は東北系の大木9式で、62・65・66にみられる磨消縄文の区画は東北地方の特徴と共通する。太沈線を加える63・64はその変容種であろう。なお、61は矢羽状沈線が残るII期の土器。67は口縁部に幅広の沈線を巡らし、その間に連続した刻目を加える手法で、4単位の渦巻状部分からは縦方向にも垂下する。また胴下半部には斜行縄文を施す。文様構成や手法に若干の相違もあるが、69~78にも同様の文様がみられる。これらは沖ノ原式と称される在地系の類であり、IIIa期に比定される。68は口縁部に横方向の平行沈線と4単位の長楕円状区画を巡らし、その間に貝殻腹縁による櫛歯状の連続刺突文を加えるもので、串田新式の影響が濃厚な北陸系の土器。口縁部に幅広の平行及び長楕円状沈線を巡らす79は、IIIa期の在地系である。80・81は口縁部に平行沈線を巡らす斜行縄文の深鉢、82は縦方向の条痕文の深鉢である。

第23号住居跡出土(第55図83) 長方形石組炉のみ確認の住居跡で、83は炉内に敷き詰められていた。キャリパー形の深鉢で、口縁部には渦巻状の隆線間に細沈線を加え、胴部は縄文を地紋として沈線で区画する。IIa期の在地系。

第24号住居跡出土(第55図84~93) 楕円形とみられる住居の覆土から出土。84は斜行縄文の深鉢。85は斜行縄文を全面に施す深鉢で、炉の埋設土器である。いずれも口縁端部に撚糸側面圧痕文を巡らしている。86~93は渦巻状の隆線を主とするII期の土器破片。

第25号住居跡出土(第55図94・95) 長方形石組炉のみ確認の住居跡で、炉の覆土から出土した。94は磨消手法のJ字状の区画文を施す大形の深鉢。口縁部に縁帯文状の施文が認められることから、堀之内式の影響を受けた関東系の土器とみられ、V期に位置づけられる。95は無文のミニチュア土器である。

第26号住居跡出土(第55・56図96~107) 円形住居の覆土から出土。96~99はキャリパー形の深鉢の口縁部片で、渦巻状の隆線間に斜位や矢羽状の細沈線を充填する。II期の在地系である。100はI期の浅鉢か。渦巻状隆線をもつ102もI期の所産とみられる。101・103・104は縄文地に竹管沈線による区画を施す深鉢、105は矢羽状の沈線を縦位に重複させる深鉢の胴部片。106は波状口縁部に渦巻状の隆線で文様を描き、胴部には横位と縦位の竹管沈線で区画する。II期の在地系と考えられる。107は炉内に埋設されていた台付鉢で、口縁部と体部下端に横位の沈線を巡らし、その間に縦位の角張った竹管沈線を施す文様構成である。脚部には3か所の円孔がみられる。脚部の性状はピット出土の441に共通することからII期の所産と考えられる。

第27号住居跡出土(第56図112~124) 楕円形石組炉のみ確認の住居跡で、112は炉内に埋設されていた。口縁部に撚糸側面圧痕文を巡らす斜行縄文の深鉢。113・119~122は炉内に敷き詰められていた土器片で、II~VII期のものが混在している。山形把手の113はIIa期、磨消縄文の119はIII期、刺突文・刻目隆帯の120・121はIV期、綾絡文と撚糸文を施す122はVII期の所産。その他は炉の覆土から出土した。口縁部に刻目を加えた隆帯をもつ114、太い平行沈線を巡らす115、磨消縄文の116はIIIa期の東北系と考えられる。117・118は斜行縄文を竹管沈線で区画する類でIIa期か。123はVII期の雲形文、124はVII期の網目状撚糸文で、覆土に混在したものであろう。炉の形態から、本住居の主體的な時期はII期と推測される。

第28号住居跡出土(第56図108~111) 楕円形石組炉のみ確認の住居跡で、炉の覆土から出土。108は縦横の竹管沈線で文様を構成する胴部片。その竹管沈線は角張った形状を呈し、107の施文に似ることからII期の所産か。109はVII期、110は後期の所産とみられる。111は細かい矢羽状の縄文を施すもので、VI期に比定される。

第29号住居跡出土(第56図125) 長方形石組炉のみ確認の住居跡で、125は炉内に埋設されていた。口

縁部は欠損、胴部には斜行縄文を地紋として渦巻状の沈線を施す。IIa期の在在系である。

第30号住居跡出土（第56図126） 楕円形石組炉のみ確認の住居跡で、126は炉内に埋設されていた。斜行縄文を施す深鉢で胴下半が膨らむ形態。炉の形態からII期の所産とみられる。

第31号住居跡出土（第56図127～143） 円形住居の覆土から出土した。第49号と重複する。128～137はII期に比定される。128・131は渦巻文様を配した大振りの把手をもつ類でIIa期の所産。王冠型土器の把手に似た127・131、浅鉢片の132、口縁部に竹管沈線を巡らす136などはI期の特徴を残している。一方、138～143はIVa期初頭に位置づけられる。口縁部に刻目を加えた隆帯が巡る138～140は、三十稲場式の初期的な様相を示す。磨消縄文手法の142は称名寺式の影響を受けた関東系土器。口縁端部が蓋受状になる141や、条痕文を施す143も同時期の深鉢であろう。以上のように、本住居跡出土として取り上げた土器はIIa期とIVa期に大別されることから、IIa期は第49号住居跡からの混在で、IVa期が第31号住居跡に帰属するものと考えられる。この傾向は住居の形態と相応する。

第32号住居跡出土（第57図144） 石組炉（A字形複式炉か）のみ確認の住居跡で、144は炉内に埋設されていた。底部が残存、胴下半には斜行縄文を地紋として半截竹管による沈線が垂下していることから、II期の所産と考えられる。

第34号住居跡出土（第57図145～157） 楕円形住居の覆土から出土。第35号住居跡と重複する。竹管沈線で文様を描く145～148・152はI期の特徴をもつ。渦巻状の区画内に矢羽状の細沈線を充填する149はIIb期。横位の沈線間に押し引きによる連続刺突を加える150は北陸系の申田新式、また151は在在系の沖ノ原式に類似し、いずれもIIIa期の所産である。153～157はIIIb期の在在系とみられる。153は縦位の磨消縄文、155は円形押圧を加えた隆帯文を施す。総体としてはIII期の土器が主体的で、I～II期の土器は後述の第35号住居跡に関連するものであろう。

第35号住居跡出土（第57図158～176） 円形住居の覆土から出土。第34号住居跡と重複する。隆線による渦巻文様を描く158は、中部高地系の焼町式に類似する。I期の所産。159～161は渦巻状の隆線間に細沈線を加える類で、IIa期の在在系。磨消状の渦巻文が口縁端部を巡る162はIIIa期、口縁部に太沈線を巡らし波状部が渦巻文様となる163・164はI～IIa期に伴うとみられる。165は火焰型または王冠型土器の胴部片でI期の所産。166～171は斜行縄文を地紋として半截竹管による区画文を描く類、172・173は矢羽状沈線を充填する類で、I～IIa期。沖ノ原式に類似する174はIIIa期、平行沈線と波状沈線を施す175は東北系（大木8a式）でI期、磨消縄文の176は東北系（大木9式）でIIIa期に位置づけられる。全体としてはIIa期を主体とし、III期に属する類は前述の第34号住居跡に伴うものと考えられる。

第36号住居跡出土（第57・58図177～186） 円形住居の覆土から出土。177は胴部に入り組んだ渦巻状の隆線で文様を構成する深鉢。178・179は大振りの渦巻状把手をもつ。180～186は渦巻状の隆線間に細沈線を加える類で、キャリパー形深鉢の口縁部片及び胴部片である。いずれも在在系でIIa期の所産。

第38号住居跡出土（第58図187～190） 円形住居から出土。187と190は炉内に埋設されていた深鉢である。187は結節をもつ合燃のL{RL原体を縦位に施し、同原体で口縁端部に側面圧痕文を巡らしている。190は口縁部に1条の沈線を巡らし、胴部に斜行縄文を施文する。188は深鉢の底部で胴下半は縦位の沈線で構成し、刻目を加えた2条4単位の隆線で区画する。口縁部に穿孔を施す189は小形品で、胴部に渦巻状の隆線を2単位で貼り付ける。188及び炉の形態からいずれもIIb期の在在系と推測されるが、189は時期的に遡る可能性もある。

第41号住居跡出土（第58図191～194） 円形住居の覆土から出土。191は斜行縄文を地紋として竹管沈線

による区画をもつ深鉢。192は縦方向に条痕文を施す深鉢。193・194は渦巻状の隆線間を矢羽状沈線で充填する深鉢。193は2単位の波状口縁、194は平口縁で、2単位の渦巻文様の把手がみられる。192を除いて第17号住居跡の様相に共通し、IIa期の在地系と考えられる。

第42号住居跡出土（第58図195） 長方形石組炉（複式炉）のみ確認の住居跡で、195は炉内に埋設されていた。深鉢の胴部で、渦巻状の隆線の区画内に斜行縄文を施す。大木8b～9式にかけての過渡的な特徴を示す東北系で、IIIa期に位置づけられる。

第45号住居跡出土（第58図196～206） A字形複式炉を伴う長方形住居で、IIIb期の個体がまとまっている。205は炉内に埋設され、200は炉内に敷き詰められていた深鉢。小波状口縁の200は口縁部に太沈線と連続刺突を巡らし、波頂部下には円形の貼付文を加える。平口縁の205は斜行縄文を地紋としてJ字状のモチーフを組み込んだ沈線区画をもつ深鉢で、称名寺式に関連する関東系とみられる。196・197は渦巻状の隆線間に斜位や矢羽状の細沈線を加える類。198・199は複数列の矢羽状沈線を施す。201は口縁部に太沈線を巡らす深鉢、202・203は平行沈線と刺突文を組み合わせる沖ノ原式の変容種であろう。204も同類の胴下半部片。206は斜行縄文を地紋として渦巻状の細沈線で文様を描く小形品。胎土は白色気味で205と類似する。196～199はII～IIIa期の在地系、それ以外は主にIIIb期の在地系と考えられる。IIIb期以外の土器は重複する第46号住居跡に帰属するものか。

第46号住居跡出土（第59図207） 楕円形住居で、207は炉内に埋設されていた。平口縁の深鉢で、口縁部には撚糸側面圧痕文、胴部に斜行縄文を施す。第45号住居跡と重複。炉の形態からIIIa期の所産か。

第47号住居跡出土（第59図208～223） 地床炉のみ確認の長方形とみられる住居跡で、第48・50・51号住居跡と重複する。208・209は渦巻状の隆線間に斜位や矢羽状に細沈線を加える深鉢で、II期の在地系。214・220も同時期の胴部片。210～213は磨消縄文手法の深鉢である。東北系の大木9式でIIIa期の所産。215・219も同種の胴部片。216は口縁部に太沈線を巡らし、その間に刻目を加える沖ノ原式でIIIa期に位置づけられる。217はその変容種か。218は斜行縄文を地紋として長楕円形の沈線を描く218、磨消状の沈線や隆帯をもつ221・222、円形刺突列を巡らす223は、大木10式が変容したIIIb期の在地系とみられる。

第48号住居跡出土（第59・60図224～242） A字形複式炉を伴う長方形住居で、第48・50・51号住居跡と重複する。225・226は炉内に埋設されていた。225は結節をもつ縦位の斜行縄文を地紋として沈線を加える大形深鉢。胴部が膨らみ口縁部には大振りの把手をもつとみられる。大木8a式の特徴を示す東北系で、I期に位置づけられる。226は4単位の小波状口縁の深鉢で、斜行縄文を地紋として口縁部に2条の沈線が巡る。III期の所産か。224・227・230～234は渦巻状の太沈線区画による磨消縄文を施す東北系の大木9式、沈線間に櫛歯状工具による連続刺突を加える228は北陸系の申田新式、237・238は在地系の沖ノ原式またはその変容種で、いずれもIIIa期に位置づけられる。229はIIb期の在地系。235・239・241・242にはI期の特徴がみられる。第31号住居跡出土の141に類似する236や、口縁部に円形押圧を加えた隆帯が巡る240などはIIIb期終末の在地系と考えられる。

第47・48・50・51号住居跡出土（第65図243・244） 243・244は住居跡が重複するため、その帰属は明瞭でない。渦巻状の把手をもつ在地系でIIa期の所産。前述の第47・48号住居出土分を含め、時期的に混在した状況が窺われる。これら4棟の住居跡から出土した土器の時期はI～III期にわたるが、住居や炉の形態及び土器の出土量から、構築された主たる時期はIII期と推測される。なお、第48号住居跡としたA字形複式炉の埋設土器225にはI期の土器が用いられており、長方形住居構築以前に埋設されていた土器を再利用した可能性が考えられる。

第49号住居跡出土（第60図245） 楕円形住居とみられる覆土から出土。第31号と重複する。245は平口縁の深鉢で、斜行する隆線で文様を構成する。II期の在地系。また、先に第31号住居跡出土として取り上げた128～136もII期の所産であり、本住居跡に伴うものと考えられる。

第52号住居跡出土（第60図246・247） 楕円形とみられる住居から出土。247は炉内に埋設されていた斜行縄文を施す深鉢。246は炉縁に配されていた平口縁の深鉢で、渦巻状の隆線間に矢羽状の細沈線を充填する。IIb期の在地系である。

第55号住居跡出土（第60図250） 楕円形石組炉のみ確認の住居。250は炉内に埋設されていた無文の深鉢。後期の所産とみられる。

第56号住居跡出土（第60図248） 長方形石組炉のみ確認の住居。248は炉内に埋設されていた斜行縄文の深鉢。炉の形態からII期の所産か。

第57号住居跡出土（第60図249） 楕円形石組炉のみ確認の住居。249は炉内に埋設されていた深鉢。結節を伴う斜行縄文を施す。炉の形態からII期の所産か。

第64号住居跡出土（第60図251） 石組炉のみ確認の住居。251は炉内に埋設されていた深鉢。斜行縄文を施す底部。晩期の所産か。

第37号住居跡出土（第61図252～262） 円形住居の覆土から出土。252～256は口縁部や頸部の隆帯に円形の押圧文を巡らす在地系で、IV期の所産。252は縁帯文をもつ南三十稲場式。254は斜行縄文に沈線で文様を描く三十稲場式の蓋で、端部がまくれ上がる形態からIVb期に位置づけられる。257～259は磨消縄文手法の深鉢で、VI期の三仏生式。260～262は条痕文や斜行縄文を施す深鉢でIV～VI期の所産とみられる。時期的に混在するが、住居の形態からその構築時期はIV期と考えられる。

第1号掘立柱建物跡出土（第61図263～268） 建物を構成する柱穴から出土。いずれも三十稲場式の類で、IVa期の所産。小波状口縁の263は口縁端部に刻目隆帯が巡り、波状部下には円形隆帯を加える。264も同類。266・267は縦位2列の列点状刺突を施す。これらの特徴は三十稲場式でも初期的な様相を示している。270は蓋である。

第2号掘立柱建物跡出土（第61図271・272） 建物を構成する柱穴から出土。271は刺突文を施す深鉢。272は斜行縄文の胴部片である。いずれもIV期の所産。

第3号掘立柱建物跡出土（第61図273～280） 建物を構成する柱穴から出土。273～277は三十稲場式の類でIV期に位置づけられる。273は貼瘤文をもつ古相（IVa期）、275は橋状把手は8の字状に退化した新相（IVb期）を示す。274は蓋である。278～280は混在したVII期の網目状撚糸文土器。

第22号住居跡出土（第61・62図281～317） 円形住居の覆土から出土。281～298は斜行縄文・撚糸文・綾絡文を主とする深鉢や鉢の類。口唇部に刻目を加えるものや口縁部に数条の平行沈線を巡らすものが多い。299～305は口縁部に羊歯状文をもつ深鉢や鉢で、胴部には斜行・羽状縄文や網目状撚糸文が施されている。307は口縁部に三叉文がみられる。308～317は浅鉢。胴部に雲形文。306・312・316・317の雲形文はやや平行化している。VII期に位置づけられ、主体は大洞C1式である。

第61号住居跡出土（第62図318～320） 円形住居の覆土から出土。晩期中葉とみられる細片の他、後期の土器が混在。318は刻目隆帯をもつ三十稲場式の蓋でIVa期の所産か。319・320は多孔底土器の底部片でVI期に位置づけられる。

第63号住居跡出土（第62図321～338） 円形住居の覆土から出土。第61・62・71号と重複。321・322は刺突文の三十稲場式でIV期。323～327は平行化した雲形文、眼鏡状浮線文などを施す大洞C2式の浅鉢。328

は工字文の大洞A式。329～331は口縁～頸部に退化した羊歯状文や沈線を巡らす深鉢、332～338は網目状撚糸文・斜行縄文・綾絡文などを施す深鉢である。Ⅶ期の大洞C2式を主とする。

第66号住居跡出土（第62図339～358） 円形住居の覆土から出土。刺突文の339・340は三十稲場式でⅣ期、縁帯文・集合沈線文・磨消縄文などの手法をもつ341～347は南三十稲場式でⅤ期。348は羊歯状文、349・350は眼鏡状浮線文や平行化した雲形文を施す。351～328は胴部に縄文・撚糸文・綾絡文を施文する深鉢や鉢の類。Ⅶ期の大洞C2式を主とする。

## ② フラスコ状ピット出土の土器（第63・64図、観察表2）

各フラスコ状ピットの覆土からは、主に中期中葉（Ⅰ～Ⅱ期）の土器が出土している。中期終末（Ⅲ期）や後期初頭（Ⅳ期）の土器も混在するが、構築された時期は概ねⅠ～Ⅱ期とみられる。

FP18出土の359は4単位の把手をもつ深鉢で、Ⅰ期の大木8a式。口縁部は波状隆帯を貼り付けて刺突文を充填し、頸部に格子状の沈線、胴下半部には斜行縄文を施す。FP25出土の360は渦巻状の沈線間を斜行縄文で充填するⅡ期の在在系。FP35出土の362は火焰型土器の口縁部片。363・364はFP36出土で、363は王冠型土器の口縁部片、364も同時期でⅠ期の所産であろう。365～371はFP37出土。火焰型あるいは王冠型土器の胴部片の365を除いて、口縁部に渦巻状の文様を配する深鉢で、Ⅱ期でも古段階の在在系がまとまっている。橋状把手をもつ372はFP38出土で、Ⅳa期の三十稲場式の深鉢。373～375はFP40出土。373は大振りの渦巻状突起をもつ口縁部片はⅡa期の在在系。375は同時期の浅鉢。376～378はFP41出土。376は火焰型あるいは王冠型土器の底部で、同種の377もⅠ期の所産。378はⅢ期終末～Ⅳa期初頭の深鉢。379～384はFP42出土。379は竹管沈線による区画文様をもつ深鉢で、Ⅰ期の在在系。380・381は三十稲場式の蓋でⅣ期に、382～384はⅢ期終末～Ⅳa期初頭に位置づけられる。385～387はFP43出土。385・386は渦巻状の突起や隆線間に斜行する細沈線を加えるⅡa期の在在系。387は竹管沈線で入り組んだ渦巻文様を描くもので、北陸系の上山田・天神山式。388～391はFP44出土。隆線区画に斜行・矢羽状の細沈線や縄文を充填する類で、Ⅱa期の在在系。392～396はFP46出土で、Ⅰ期に比定される在在系と東北系の一群。392は口縁部がくの字に屈曲する浅鉢、394・395は深鉢で在在系。393・396は縄文地に竹管沈線で文様を描く大木8a式の深鉢で東北系。

397～401はFP48出土で、399は浅鉢、その他は深鉢。397～400はⅠ期の在在系と東北系。397は火焰型あるいは王冠型土器の胴部片である。401～403は混在した後・晩期の深鉢片とみられる。FP49出土の404・405は斜行縄文を地紋として半截竹管による沈線を描く深鉢で、Ⅰ期の大木8a式か。FP50出土の406・407はⅠ期の在在系で、406は火焰型土器の口縁部片である。408～410はFP51・59出土。Ⅱ期の在在系か。FP52出土の411は渦巻状の把手をもつⅡa期の在在系、FP55出土の412はⅡb期の所産か。FP56出土の413・414はⅠ期の在在系。415～423はFP57出土で、渦巻状の隆線間に細沈線を充填するⅡa期の在在系がまとまっている。423は北陸系か。FP60出土の424は渦巻状の把手をもつ在在系で、Ⅰ期に遡る可能性をもつ。FP61出土の425～427は刺突文を施す三十稲場式で、Ⅳ期の所産。428～431はFP62出土でⅠ期の所産。428は中部高地系の焼町式、431は火焰型あるいは王冠型土器の胴部片か。432～435はFP63出土。渦巻状の突起をもつ433と火焰型または王冠型土器の胴部片の434はⅠ～Ⅱ期の在在系、竹管沈線に連続刺突文を加える435は浅鉢または台付鉢で、北陸系の上山田・天神山式とみられる。FP64出土の436は渦巻状の文様に縦位の隆線を充填する平口縁の深鉢で、Ⅱb期の在在系。437～440はFP65出土。437・438は中部高地系の焼町式でⅠ期の所産と考えられる。

## ③ ピット出土の土器（第65～70図、観察表2～4）

各ピットの覆土からは中期中葉（Ⅰ・Ⅱ期）から晩期（Ⅶ期）にわたる土器が出土しているが、量的に

は後期初頭（IV期）のものが多い。以下、発掘区順に主な土器を記載する。

441はII B・P3から出土した小形の台付鉢。胴部は渦巻状の隆線間を斜行細沈線で充填し、脚部に3か所に孔をもつ。胴部の文様からII期の在在系と考えられる。脚部のつくりは第26号住居跡出土の107に類似する。442はIII B・P11出土の深鉢で、4単位の橋状把手をもち、胴部には斜行縄文を地紋として8の字状の沈線や矢羽状の短沈線を加える。IVa期で三十稲場式の初期に位置づけられる。443はIII C・P108から出土した三十稲場式の蓋。444はIII C・P113出土の深鉢で、渦巻状の隆線を配するIIa期の在在系。III C・P18出土の445は長楕円形の磨消縄文区画をもつ深鉢で、東北系の大木10式でIIIb期の所産。446はIII D・P33出土。口縁部は隆線、胴部は斜行縄文を地紋として沈線による区画で文様を構成する深鉢。東北系の大木8a式でI期の所産。III E・P123出土の447は第17号住居跡出土の32と同様の文様構成をもつ深鉢で、IIa期の在在系である。

448はIV C・P60出土。4単位の小波状口縁の深鉢で、波状部下に円形の突起を付け、胴部には条痕文を施す。IVa期の三十稲場式最初頭に位置づけられる。IV D・P7出土の449は一对の橋状把手をもつ三十稲場式の蓋。450・451はIV F・P12出土。450は4単位の波状口縁の浅鉢。2単位が橋状把手で、その一方は注口状となる。口縁部には斜行縄文、胴部には網目状燃糸文を施す。451は全面を刺突文で覆う蓋。いずれもIVa期で三十稲場式古段階の特徴をもつ。IV F・P154出土の452は羊歯状文と4単位の把手が巡る鉢で、VII期の大洞BC式か。V D・P108出土の453は無文の皿で、晩期の所産とみられる。V D・P115出土の454、P154出土の455、P158出土の456はミニチュア土器である。壺形の454と注口土器形の455は晩期、蓋形の456は後期の所産か。V E・P30出土の457は4単位の橋状把手をもつ無文の深鉢でIVa期の三十稲場式、V E・P90出土の458は胴部が球体状に膨らむ無文の注口土器でV期の南三十稲場式に比定される。V E・P151出土の459は浮彫様の円形貼付文をもつ浅鉢で、I期の在在系。460・461はV E・P198から出土。460は火焰型土器、461は竹管沈線による平行沈線・渦巻文・鋸歯状文で文様を構成する細身の深鉢で、いずれもI期の在在系。

462～499・505はV F・P31から出土。462～467は刺突文を施す三十稲場式の深鉢でIV期。468～481・505は縁帯文・集合沈線文・入り組んだ磨消縄文などで文様を構成する南三十稲場式の深鉢でV期の所産。482～487は櫛歯状工具で格子状や波状の条線を描く深鉢で、V期の南三十稲場式に伴うとみられる。488～499は磨消縄文手法の带状文を主とする三仏生式の類でVI期に位置づけられる。488は壺、その他は波状口縁の深鉢が多い。V F・P98出土の500は球体状の器形で、胴部には渦巻状の隆線で文様を描き、口縁部には円孔が巡る。有孔罅付土器の類でI期の北陸系（上山田・天神山式）とみられる。V I D・P27出土の501は斜行縄文の深鉢。502・503はV I I F・P2（トチの実ピット）出土。502はV期の南三十稲場式、503はVII期の洞C2式。V I F・P15出土の504は三十稲場式の蓋。V I F・P64（トチの実ピット）出土の506は斜行縄文の深鉢で中期の所産か。V I F・P83出土の507と同P84出土の508は同心円上の沈線及び刺突文を施す三十稲場式の蓋。端部の4か所がまくれ上がる形態の508は三十稲場式でも新しい様相を示し、IVb期に位置づけられる。

V I F・P78出土の509は口縁部に4単位の渦巻状突起をもつ斜行縄文の大形深鉢。IV期の所産か。V I F・P89（トチの実ピット）出土の510は渦巻状の隆線区画間を矢羽状の細沈線で充填する深鉢で、II期の在在系。V I F・P98出土の511は三十稲場式の蓋。512・513はV I F・P99出土。512は三十稲場式の蓋、513は集合沈線で渦巻状の文様を描く浅鉢。気屋式の影響を受けた北陸系でV期の所産か。V I I E・P105出土の515、同P119出土の516は多孔底土器の底部片。VI期の三仏生式に伴うと考えられる。517～522はV I I F・P2（トチの実ピット）出土。口縁部を巡る円形押圧文、刺突文、櫛歯状工具による条線文がみられ、IV～V期に比定される。

523～527はVIII・P4（トチの実ピット）出土。523は蓋、524～526は深鉢片で、IV期の三十稲場式。527は磨消縄文を施すV期の南三十稲場式。VIII・P5（トチの実ピット）出土の528・529、同P8（トチの実ピット）出土の530～534には磨消縄文や刺突文などがみられ、IV～Vに比定される。VIII・P10出土の535は三十稲場式の蓋。VIII・P13出土の536は高台付きの鉢で晩期の所産か。VIII・P28出土の537は丸底の多孔底土器でVI期の所産。538・539はVIII・P34出土。538は口縁部に眼鏡状隆帯が巡り、波頂部では蕨手状となる。胴部には斜行縄文を地紋として円形の押圧が垂下する。539は斜行縄文を施す小波状口縁の深鉢で、538とともにIVa期初頭に位置づけられる。540・541はVIII・P53出土。典型的な三十稲場式の蓋（540）と深鉢（541）でIVa期。VIII・P80出土の542は口縁部に円孔を巡らす土器で、内外面に朱彩の痕跡を残す。500に近い形状からI期の所産とみられる。VIII・P2出土の544は4単位の橋状把手をもち、胴部に刺突文を施す三十稲場式の深鉢。

VIII・P23出土の545は三十稲場式の蓋。端部がまくれ上がる形態を呈することから、IVb期に位置づけられる。VIII・P37出土の546は2単位の波状口縁で、胴部には渦巻状の区画に矢羽状の細沈線を充填する。II期の所産。547～550には石組などの炉を伴わない埋設土器（取上記号：MP、総数35個体）の一部を示した。MP6の547は渦巻状の隆線による大振りの把手をもつ深鉢で、胴部には斜行縄文を地紋として渦巻状のモチーフを組み合わせた文様を描く大木8b式。IIa期の東北系。MP15の548は口縁部に無文帯、胴部に撚糸文を施す深鉢で、IIIb～IVa期の在在系。MP21の549は斜行縄文を地紋として器外面を縦位に6分割し、さらにその内部を横位の太沈線で区切る深鉢。分割の手法は大木10式に共通することから、東北系の影響が変容したIIIb期の在在系とみられる。MP29の550は口縁部を欠損する三十稲場式の深鉢である。

なお、551～555は中世の土壌（GP）の覆土に混在して出土した主な縄文土器である。GP3出土の551は円形刺突を加えた隆帯の巡る深鉢でIVa期に、GP7出土の552・553は磨消縄文による入組文を施す深鉢の口縁部でVI期以降の後期終末に位置づけられる。GP42出土の554は円形刺突の隆帯で区画する小形鉢で、全面に朱痕が残る。朱を貯蔵したものか。555は橋状把手をもつ三十稲場式の深鉢で、いずれもIVa期の所産。

#### ④包含層出土の土器（第71～76図、観察表4～6）

包含層からは、中期中葉（I期）から晩期（VII期）にわたる土器が出土している。ここでは完形復元個体を中心に取り上げたが、その中でも中期中葉（II期）と後期初頭（IV期）の個体がまとまっている。以下、時期ごとに主な土器を記載する（出土区等は観察表を参照）。

556は人面付土器で、平口縁の台付鉢とみられる。刻目を加えた隆帯で文様を構成し、部分的に斜行縄文を充填する。人面は横位に付けられ、刻目の細隆線で目や鼻を表現する。北陸系の上山田・天神式でI期古段階の所産。557は鶏冠状把手をもつ火焰型土器でI期の新段階、558は王冠型土器で口縁部と胴部の文様帯区分が明瞭でなくI期でもやや古い様相を示す。559は口縁部に円形の突起と同心円状の沈線を描き、斜行縄文を施す細身の深鉢で、I期新段階の在在系。560は口縁部に隆線を巡らし4単位の山形部分を配する浅鉢で、I期の在在系。561は楕円形状の区画内に幅広の刺突文を充填する浅鉢で、その2区画には渦巻状のモチーフが入る。IIIa期の東北系か。562は4単位の小波状口縁の深鉢。斜行縄文を地紋として鋸歯状の沈線を施す大木8a式でI期の所産。563～566はII期の深鉢。563は4単位の波状口縁の深鉢で、波頂部に渦巻状の文様をもつ。564は口縁部に円孔を加え、胴部には竹管沈線による区画内に斜行縄文を施す。565は球体状の胴部をもつ小形品で入り組んだ渦巻状の文様を描く。566は斜行縄文を地紋として、横位・縦位の沈線による区画内に渦巻状の文様を加える。東北系の大木8b式でIIb期の所産。

567～578はII期の深鉢。567～569はキャリパー形を呈する在在系である。口縁部を巡る渦巻状突起や隆



線間に斜位や矢羽状の細沈線を充填する。また頸部の無文帯を挟んで、胴部には斜行縄文を伴う竹管沈線による区画文様を描く。住居跡の出土例からIIa期に位置づけられる。570～578は渦巻状突起や隆線間を斜位や矢羽状の細沈線を充填する文様構成で、斜行縄文は施されない。口縁部の内湾の程度が弱いものや外反するものが目立つ。これらは住居跡の出土例からIIb期の在り系と考えられる。その中でも、573・574・577など横位の文様構成を介在させる類は、縦位の区画が崩れたもので、より新しい特徴を示している。579は浅鉢で、口縁部文様帯は568に共通することからIIa期に比定される。

580は7単位の渦巻状把手をもつ大形深鉢。胴部には斜行縄文を地紋として、渦巻状や剣先状の文様を組み合わせた区画を描く。東北系の大木8b式でIIa期の所産。581は有孔罅付（短頸）土器で、頸部に円孔が巡り、胴部には入り組んだ磨消縄文が施される。また外面には朱彩の痕跡を残す。大木8b～9式（IIb～IIIa期）にかけての特徴をもつ東北系。582は楕円形状の磨消縄文を施す注口土器で、東北系の大木10式でIIIb期の所産。583は楕円形状の磨消縄文で縦位に区画する深鉢底部。貼瘤文をもつことから、大木10式の変容種とみられ、IIIb期に位置づけられる。584～587は斜行縄文や無文の深鉢。斜行縄文の性状や胎土・色調から中期の所産と考えられる。

588～591は胴部に縦位の貼瘤列を付ける深鉢の類。IVa期の最初頭で、三十稲場式直前段階に位置づけられる。貼瘤列は4単位で、地紋には縦位の斜行縄文や撚糸文が施される。588・590は口縁部に円形刺突を加えた横位の隆帯が巡る。また590・591は2単位の橋状把手をもつ。592・593は4単位の波状口縁で、口縁部に円形の隆帯や刺突を加えた隆帯が巡る深鉢。592の胴部には縦位の条痕文、593には斜行縄文を施す。594は口縁部に貼瘤を付け、その直下に縦位施文の斜行縄文の結節部分が垂下する。これらも後期最初頭の所産とみられるが、第45号住居跡の200の事例などから中期終末のIIIb期に遡る可能性もある。

595～616はIV期の三十稲場式の深鉢と蓋である。595は4単位の把手をもち、胴部全面を円形刺突文で覆う深鉢。把手部分の隆帯が捻れた形態を呈し、三十稲場式でも新しいIVb期に位置づけられる。596～598は三十稲場式の深鉢のミニチュア土器で、IV期の所産。596は刺突文、597は撚糸文、598には網目状撚糸文を施す。599～616は三十稲場式の蓋で、その形状や文様は多様である。橋状把手を付けないものは頂部に摘部をもち、把手を付けるものには1個のものと2個のものがみられる。無文以外の文様としては、刺突文・貼瘤文・斜行縄文・刺突を加えた隆帯などを施す。その多くは古段階のIVa期の所産とみられるが、600のように端部の4か所がまくれ上がる形態は時期的に新しい特徴を示し、IVb期に位置づけられる。

617～631は後期の土器である。617は波状口縁部に2個の円孔をもち、胴部に集合沈線で曲線的な文様を描く南三十稲場式の深鉢でV期の所産。618～631はVI期の三仏生式に比定される。618・619は帯状文を施す深鉢で、底面に網代痕を残す。620・621は胴部に浮彫風の入組文様を施す注口土器で、外面は良好に研磨されている。622は磨消縄文の小形鉢、623は磨消縄文の壺とみられる。624は2単位の波状部に円孔をもつ無文の浅鉢、625は無文のミニチュア土器、626は無文の壺で、胎土や色調から三仏生式段階の所産であろう。627～631は多孔底土器である。627・628は多孔部を上面にもつ注口土器の形態、629～631は皿または鉢状の形態を呈し、VI期の三仏生式に伴うものと考えられる。632～639はVII期の晩期に位置づけられる土器で、東北系の亀ヶ岡式に準じた器形や文様が認められる。632は口縁部に4条の沈線を巡らす深鉢、633は頸部に沈線を巡らす壺で、いずれも胴部に羽状縄文を施す。634は胴部に玉抱状の浮彫文様をもつ壺。625は磨消縄文手法の小形壺で、大洞C2式段階か。636は半円弧状の沈刻を施す注口土器。637は工字文が崩れたような文様構成をもつ浅鉢で、大洞A式古段階の所産。638は口縁部に眼鏡状（突起状）の浮線を部分的に付ける浅鉢。639は口縁部に工字文を巡らす鉢で、大洞A式段階に比定される。

中道遺跡縄文土器（完形・復元土器）観察表 I

※口径・胴径・器高・底径の単位はmm

番号	器種	出土位置	注記No	口径	胴径	器高	底径	時期	文様等	調整等	備考
1	深鉢	第1号住居	3994	160	—	207	90	II	斜行縄文(LR)	ナデ、ケズリ	炉埋設
14	浅鉢	第6号住居	3317	—	180	+104	150	I~II?	斜行縄文(LR・縦位施文)	ナデ、ケズリ	炉埋設
15	深鉢	第7号住居	3273	—	303	+357	104	III?	斜行縄文(LR?)	ナデ、ケズリ	炉埋設
16	深鉢	第9号住居	3265	—	295	+208	—	III?	無文	ナデ、ケズリ	炉埋設
17	深鉢	第10号住居	3359	—	+305	+256	—	IV?	斜行縄文(LR・縦位)	ナデ、ケズリ	炉埋設
18	深鉢	第11号住居	3319	—	218	—	—	IIa	竹管沈線区画、斜行縄文(LR)	ナデ、ケズリ	炉埋設
19	深鉢	第12号住居	2176	—	292	+188	118	I~II?	斜行縄文(LR)	ナデ、ケズリ	炉埋設
20	深鉢	第15号住居	3267	+170	126	209	76	IIa	口縁部：渦巻状隆線、細沈線充填、 胴部：竹管沈線区画、細沈線充填	ナデ、ケズリ、 ミガキ	炉埋設
21	深鉢	第16号住居	2684	180	212	260	77	IIb	渦巻状隆線、矢羽状細沈線充填	ナデ、ケズリ	
22	深鉢	第16号住居	2690	170	125	+181	—	IIb	渦巻状隆線、縦位竹管沈線	ナデ、ケズリ	
23	深鉢	第16号住居	2691	188	182	265	94	IIb	横位連続刺突、渦巻状突起付把手、 渦巻状隆線、縦位竹管沈線	ナデ、ケズリ、 ミガキ	
27	深鉢	第16号住居	2694	85	150	80	47	II	竹管沈線による連弧状文	ナデ、ケズリ	
28	深鉢	第16号住居	2685	202	200	228	84	II	斜行縄文(LR・斜位)	ナデ、ケズリ	
29	深鉢	第17号住居	2951	370	242	441	108	IIa	口縁部：渦巻状把手、縦位細沈線 胴部：竹管沈線区画、斜行縄文(LR)	ナデ、ケズリ、 ミガキ	
31	深鉢	第17号住居	2527	260	—	+142	—	IIa	竹管沈線の渦巻文、斜行縄文(RL)	ナデ、ミガキ	
32	深鉢	第17号住居	3307	245	200	304	100	IIa	竹管沈線区画、斜行縄文(RL)	ナデ、ミガキ	
33	深鉢	第17号住居	3548	225	—	+128	—	IIa	渦巻状突起付把手、竹管沈線区 画、矢羽状細沈線充填	ナデ、ケズリ、 ミガキ	炉埋設
34	深鉢	第17号住居	2895	122	99	+162	—	IIa	竹管沈線区画、矢羽状細沈線充填	ナデ、ミガキ	
35	深鉢	第17号住居	2892	170	—	+82	—	IIa	竹管沈線区画、矢羽状細沈線充填	ナデ、ミガキ	
60	深鉢	第18号住居	2494	—	150	+96	135	?	胴部：無文?、底面：網代痕	ナデ、ケズリ	炉埋設
67	深鉢	第20号住居	3286	160	—	+157	—	IIIa	口縁部：幅広沈線(渦巻文)、連 続刺突、胴部：斜行縄文(LR)	ナデ、ケズリ、 ミガキ	
68	深鉢	第20号住居	10109	260	—	+207	—	IIIa	口縁部：平行沈線、長楕円区画、貝 殻腹縁連続刺突、胴部：斜行縄文	ナデ、ミガキ、 内面炭化物	
83	深鉢	第23号住居	10778	190	138	+187	—	IIa	口縁部：竹管沈線、斜行細沈線、 胴部：竹管沈線区画、斜行縄文(LR)	ナデ、ミガキ	炉埋設
85	深鉢	第24号住居	10844	264	275	375	98	II	端部側面圧痕、斜行縄文(LR)	ナデ、ケズリ	炉埋設
94	深鉢	第25号住居	11480	344	386	+517	220	V	入組沈線磨消区画、斜行縄文(LR)	ナデ	
95	小形土器	第25号住居	11480	44	—	52	16	V?	無文	ナデ、ケズリ	
107	台付鉢	第26号住居	11501	160	168	205	112	II	口~胴部：横位円形刺突、平行・縦 位竹管沈線、脚部：縁取りの円孔	ナデ、ケズ リ、ミガキ	炉埋設
125	深鉢	第29号住居	11321	—	195	233	75	IIa	渦巻状竹管沈線、斜行縄文(LR)	ナデ	炉埋設
126	深鉢	第30号住居	11331	—	138	+120	—	II?	斜行縄文(LR)	ナデ、ケズリ	
135	深鉢	第31号住居	12419	134	—	+94	—	II	縦位竹管沈線、縦位連続刺突	ナデ、ミガキ	
144	深鉢	第32号住居	12416	—	180	+82	125	IIa	縦位竹管沈線、斜行縄文(LR)地紋	ナデ、ケズリ	炉埋設
177	深鉢	第36号住居	10389	118	142	153	70	IIa	渦巻状竹管沈線、斜行縄文(LR)	ナデ、ケズリ	

中道遺跡縄文土器（完形・復元土器）観察表2

番号	器種	出土位置	注記No	口径	胴径	器高	底径	時期	文様等	調整等	備考
187	深鉢	第38号住居	11338	210	—	220	92	IIb	端部側面圧痕(合捺L(RL)、斜行縄文(合捺L(RL)、末端結節、縦位施文)	ナデ、ミガキ	炉埋設
188	深鉢	第38号住居	11207	—	98	+72	55	IIb	縦位竹管沈線、縦位連続刻目	ナデ、外面炭化物	
189	小形	第38号住居	11208	60	—	70	50	II?	口縁部: 円孔、胴部: 渦巻状隆線	ナデ、ケズリ	
190	深鉢	第38号住居	11339	205	—	269	92	II	平行沈線、斜行縄文(RL)	ナデ、ケズリ	
191	深鉢	第41号住居	12392	—	95	+80	50	IIa	竹管沈線区画、斜行縄文(LR)	ナデ	
192	深鉢	第41号住居	12049	135	—	143	65	II	条痕文(縦位)	ナデ、ケズリ	
193	深鉢	第41号住居	11128	82	190	+140	—	IIa	渦巻状突起付把手(1)、竹管沈線区画、矢羽状細沈線充填	ナデ、ミガキ、内面煤・炭化物	
194	深鉢	第41号住居	12391	—	160	167	80	IIa	渦巻状突起付把手、竹管沈線区画、矢羽状細沈線充填	ナデ、ケズリ	
195	深鉢	第42号住居	11676	—	143	—	—	IIIa	渦巻状隆線(磨消)、斜行縄文(LR)	ナデ、ミガキ	
206	小形	第45号住居	7643	60	—	72	30	IIIb	渦巻状細沈線、斜行縄文(RL)	ナデ、ケズリ	
207	深鉢	第46号住居	12423	230	—	243	80	II~III?	端部側面圧痕、斜行縄文(LR)	ナデ、ケズリ	炉埋設
225	深鉢	第48号住居	12420	—	370	+310	—	I	口縁部: 渦巻状把手?、胴部: 縦位沈線、斜行縄文(LR、末端結節、縦位)	ナデ、ケズリ	炉埋設
226	深鉢	第48号住居	12420	250	—	286	102	III?	平行沈線、斜行縄文(RRL、斜位)	ナデ	炉埋設
245	深鉢	第49号住居	12224	160	—	+194	—	II	縦位竹管沈線、上端部連続刺突	ナデ、ミガキ	
246	深鉢	第56号住居	20103	—	150	+142	78	IIb	渦巻状沈線、矢羽状細沈線充填	ナデ、ミガキ	炉埋設
247	深鉢	第52号住居	12415	—	192	+192	90	II?	斜行縄文(RLL?)	ナデ、ケズリ	炉埋設
248	深鉢	第52号住居	12418	200	—	+116	—	II?	斜行縄文(LR)	ナデ、ケズリ	炉縁土器
249	深鉢	第57号住居	19490	165	—	185	60	II?	斜行縄文(RL、末端結節、縦位)	ナデ、ミガキ	炉埋設
250	深鉢	第55号住居	20653	196	—	253	96	IV・V?	無文	ナデ	炉埋設
251	深鉢	第64号住居	20649	—	127	+80	106	VII?	縄文?	ナデ、ケズリ	炉埋設
281	深鉢	第22号住居	3745	205	—	264	96	VII	平行沈線、捺糸文(R、縦位)	ナデ	
282	深鉢	第22号住居	3769	160	—	+160	—	VII	平行沈線、斜行縄文(RL)	ナデ、ケズリ、内面煤・炭化物	
283	鉢	第22号住居	3547	146	—	+86	—	VII	平行沈線、斜行縄文(LR)	ナデ、ミガキ、内外面炭化物	
284	小形鉢	第22号住居	3808	58	86	+62	—	VII	綾絡文、捺糸文(R、縦位)	ナデ	
285	浅鉢	第22号住居	3727	170	—	+124	64	VII	平行沈線、突起、捺糸文(R、縦位)	ナデ、内外面煤・炭化物	
318	蓋?	第61号住居	18094	100	—	50	—	IVa	刻目隆帯	ナデ	
319	多孔底	第61号住居	20280	—	—	+12	34	VI	斜行縄文(LR)、底面穿孔	ナデ	
320	多孔底	第61号住居	20232	—	—	+8	28	VI	底面穿孔	ナデ	
359	深鉢	FP18	9992	148	—	90	36	I	波状浮線文、格子目状細沈線、平行沈線、斜行縄文(RLL?)	ナデ、ミガキ	
436	深鉢	FP64	19503	170	—	+136	—	IIb	渦巻状沈線区画、連続刺突、縦位竹管沈線	ナデ、内面炭化物	
441	台付鉢	IIB-P3	4023	—	—	+12	—	II	胴部: 渦巻状沈線区画、斜位細沈線充填、脚部: 円孔(3)	ナデ、ミガキ	

中道遺跡縄文土器(完形・復元土器)観察表3

番号	器種	出土位置	注記No	口径	胴径	器高	底径	時期	文様等	調整等	備考
442	深鉢	IIIB-P11	4002	216	220	338	134	IVa	口縁部:橋状把手、隆線上刻目、胴部:矢羽状等沈線、斜行縄文(RL)	ナデ、ミガキ	
443	蓋	IIIC-P108	3434	225	-	72	-	IV	無文、橋状把手	ナデ、ミガキ	
444	深鉢	IIIC-P113	3468	-	220	+232	-	IIa	渦巻状沈線区画	ナデ、外面煤	
445	深鉢	IIIC-P18	3118	-	-	+292	-	IIIb	長楕円区画(磨消)、斜行縄文(RL)	ナデ、ミガキ	
446	深鉢	IIID-P33	3133	283	205	350	107	I	口縁部:山形把手、剣先状浮線文、胴部:縦横・連弧状沈線、斜行縄文	ナデ、ミガキ	
447	深鉢	IIIE-P123	10637	257	-	290	100	IIa	竹管沈線区画、斜行縄文(RL)	ナデ、外面煤	
448	深鉢	IVC-P60	3401	234	-	-	-	IVa	円形突起、条痕文(斜位)	ナデ	
449	蓋	IVD-P7	2731	220	-	55	-	IV	橋状把手、端部刺突、入組沈線、斜行縄文(?)		
450	浅鉢	IVF-P12	11631	162	-	130	75	IVa	橋状把手(注口状)、口縁部:斜行縄文(RL)、胴部:網目状捺糸文(R)	ナデ、外面煤・炭化物	
451	蓋	IVF-P12	11626	170	-	77	-	IVa	円形摘み、橋状把手、刺突文	ナデ、ケズリ	
452	鉢	IVE-P154	12065	-	+127	+75	50	VII	橋状把手、羊歯状文(陽刻)	ナデ、ミガキ	
453	皿	VD-P108	11619	192	-	44	-	VII?	無文	ナデ、ミガキ?	
454	小形丸底壺	VD-P115	11860	15	44	45	-	VII	無文	ナデ、ミガキ	
455	小形注口丸底	VD-P154	11849	27	54	35	-	VII	無文	ナデ	
456	小形蓋	VD-P158	11861	41	-	15	-	IV?	無文、把手状突起、貼瘤文	ナデ	
457	深鉢	VE-P30	11313	84	-	112	82	IVa	橋状把手、無文	ナデ、ケズリ	
458	注口	VE-P90	11314	130	200	180	52	V	橋状把手付注口、無文	ナデ、ミガキ	
459	浅鉢	VE-P151	12162	350	-	116	102	I	平行沈線、円形貼付文	ナデ、ミガキ	
460	深鉢	VE-P198	19008	312	303	+264	-	I	鋸歯状突起、入組状渦巻文	ナデ	
461	深鉢	VE-P198	19008	125	114	+194	-	I	横位竹管沈線、渦巻文、鋸歯状文、斜行縄文(RL)	ナデ	
500	小形鉢	VF-P98	19650	86	112	100	56	I	口縁部:円孔、胴部:入組状渦巻文	ナデ	
501	深鉢	VID-P27	19400	104	110	160	52	?	斜行縄文(RL)	ナデ	
504	蓋	VIF-P15	19209	+102	-	20	-	IV	入組沈線、中央橋状把手?	ナデ	
505	深鉢	VF-P31	11168	146	110	95	60	V	縁帯文(太沈線)、外面煤	ナデ、ミガキ	
506	深鉢	VIF-P64	19922	-	108	+130	72	?	斜行縄文(LR)	ナデ、ケズリ	
508	蓋	VIF-P84	19534	132	-	26	-	IVb	橋状把手、中央円孔、同心円状刺突・沈線	ナデ、ケズリ	
509	深鉢	VIF-P78	19546	350	393	452	126	IV	渦巻状突起、斜行縄文(LR、斜位)	ナデ	
510	深鉢	VIF-P89	20175	-	112	+115	80	II	渦巻状沈線区画、矢羽状沈線充填	ナデ、ケズリ	
511	蓋	VIF-P98	20150	120	-	+28	-	IV	橋状把手、円形隆帯、円形刺突	ナデ	
513	浅鉢	VIF-P99	19914	232	316	200	80	V?	端部刻目、円孔(8?),渦巻状入組沈線、底面:網代痕	ナデ、ミガキ	
514	深鉢	VIF-P101	19405	248	226	327	135	IVa	橋状把手、刺突文	ナデ	
523	蓋	VIII-P4	19953	+95	-	48	-	IV	円形摘み、無文	ナデ、ミガキ	
535	蓋	VIII-P10	20256	+113	-	33	-	IV	橋状把手、入組隆線	ナデ	

中道遺跡縄文土器（完形・復元土器）観察表 4

番号	器種	出土位置	注記No	口径	胴径	器高	底径	時期	文様等	調整等	備考
536	台付鉢	VIIIF-P13	18279	—	—	+70	57	VII	平行沈線、斜行縄文(?)	ナデ、ミガキ	
537	多孔底	VIIIF-P28	19666	105	—	52	30	V	無文、底部穿孔	ナデ、ケズリ	
539	深鉢	VIIIF-P34	19776	185	—	319	120	IVa	口縁部：無文、胴部：斜行縄文(RL)	ナデ	
540	蓋	VIIIF-P53	19839	132	—	38	—	IVa	橋状把手、入組沈線	ナデ、ミガキ	
541	深鉢	VIIIF-P53	19976	143	—	219	80	IVa	橋状把手、刺突文、外面煤・炭化物	ナデ	
542	深鉢	VIIIF-P80	19995	104	—	130	55	I?	円孔、無文、内外面朱痕(部分)	ナデ、ミガキ	
543	蓋	VIIIF-P103	20491	127	—	58	—	IVa	円形摘み、刺突隆帯	ナデ、ケズリ	
544	深鉢	VIII-E-P2	20230	291	240	+265	—	IVa	橋状把手、刺突文	ナデ	
545	蓋	VIII-E-P23	19765	170	—	48	—	IVb	橋状把手、同心円状刺突・沈線	ナデ	
546	深鉢	VIII-F-P37	20673	95	—	+135	—	II	竹管沈線区画、矢羽状沈線充填	ナデ、ミガキ	
547	深鉢	MP6(IVF)	8593	400	340	+270	—	II	口縁部：渦巻状把手、胴部：渦巻状沈線区画、斜行縄文(LR)	ナデ	
548	深鉢	MP15(VIF)	16159	—	330	+465	146	III~IV?	平行沈線、撚糸文(斜位)	ナデ	
549	深鉢	MP21(VIG)	16379	190	194	232	68	IIIb	縦横磨消沈線区画、斜行縄文(LR)	ナデ、ミガキ	
550	深鉢	MP29(VIIF)	18106	—	258	+253	110	IVa	刺突文	ナデ	
554	小形鉢	VF-GP42	10467	70	100	64	38	IVa	刺突隆帯、円形貼付文、内外面朱彩	全面ミガキ	
556	台付鉢	VF-6d	8305	133	—	+80	—	I	鋸歯状文、S字状刻目隆帯、横位人面(刻目)、斜行縄文(LR)	ナデ、ミガキ	
557	深鉢	IIIF-10b	7482	157	—	+210	—	I	鶏冠状把手、鋸歯状突起、入組状渦巻文	ナデ、ミガキ、内外面炭化物	
558	深鉢	IVF-8a	7227	150	—	223	72	I	山形把手、入組状渦巻文	ナデ、ミガキ	
559	深鉢	IID-9b	6340	110	—	206	55	I	円形突起・沈線、斜行縄文(RL)	ナデ、ケズリ	
560	浅鉢	IIID-1・2ef	5507	346	—	130	100	I	山形隆帯、斜行縄文(RL)	ナデ、ミガキ	
561	浅鉢	IIIC-1i	2025	140	188	86	68	II~III?	楕円(磨消)区画、幅広刺突文	ナデ	
562	深鉢	IVE-4e	5811	96	—	142	55	I	平行・鋸歯状沈線、斜行縄文(RL?)	ナデ、ケズリ	
563	深鉢	VF-5d	8204	130	—	200	73	II?	渦巻状突起、無文	ナデ、ケズリ	
564	深鉢	VF-9h	7941	137	—	+215	—	II?	口縁部：渦巻状突起、円孔、胴部：平行・縦位沈線、斜行縄文(LR)	ナデ、ミガキ	
565	小形鉢	VF-6e	8315	75	—	81	42	II	竹管沈線区画、内面朱彩痕	ナデ	
566	深鉢	IIC-9e	2174	237	—	+390	—	II	平行沈線、渦巻状入組沈線区画、斜行縄文(LR)	ナデ	
567	深鉢	VF-5d	8205	210	—	+146	—	IIa	口縁部：渦巻状隆線、斜行沈線充填、胴部：沈線区画、斜行縄文(RL)	ナデ、ミガキ、内外面炭化物	
568	深鉢	VF-4d	8184	130	—	159	60	IIa	口縁部：隆線区画、縦位沈線充填、胴部：沈線区画、斜行縄文(LR)	ナデ、ミガキ	
569	深鉢	VIF-6d	15494	—	230	217	91	IIa	口縁部：渦巻状隆線、矢羽状沈線充填、胴部：沈線区画、斜行縄文(LR)	ナデ	
570	深鉢	VIII-F-3f	17676	164	—	+170	—	IIb	渦巻状沈線区画、矢羽状沈線充填	ナデ、ミガキ、内面炭化物	
571	深鉢	IIIE-10j	8563	—	130	+210	—	IIb	渦巻状沈線区画、矢羽状沈線充填	ナデ	
572	深鉢	IXE-2c	18321	250	—	261	—	IIb	渦巻状沈線区画、矢羽状沈線充填	ナデ	

中道遺跡縄文土器(完形・復元土器) 観察表 5

番号	器種	出土位置	注記No	口径	胴径	器高	底径	時期	文様等	調整等	備考
573	深鉢	IVF-1c	7660	204	-	196	-	IIb	渦巻状沈線区画、矢羽状沈線充填	ナデ	
574	深鉢	VF-6g	8306	200	-	234	80	IIb	渦巻状沈線区画、矢羽状沈線充填	ナデ、ミガキ	
575	深鉢	VIF-5f	15428	-	106	+105	76	IIb	渦巻状沈線区画、矢羽状沈線充填	ナデ、ケズリ	
576	深鉢	VIF-4d	15427	-	128	+120	84	IIb	渦巻状沈線区画、矢羽状沈線充填	ナデ、ケズリ	
577	深鉢	IVF-5d	7929	217	-	+160	-	IIb	渦巻状沈線区画、矢羽状沈線充填	ナデ	
578	深鉢	VF-8e	8685	-	135	127	60	IIb	渦巻状沈線区画、矢羽状沈線充填	ナデ、ミガキ	
579	浅鉢	III E-2e	5515	+178	-	75	65	IIa	隆線区画、斜位沈線充填	ナデ、ミガキ	
580	深鉢	IVF-5d	7947	370	380	+530	-	II	口縁部：渦巻状把手、胴部：渦巻・ 剣先状沈線区画、斜行縄文(LR)	ナデ、ケズリ	
581	深鉢	IVE-8g	11218	92	-	100	58	IIIa	頸部：円孔、胴部：渦巻状隆線(磨 消)区画、斜行縄文(LR)	ナデ、ミガキ、内 外面朱彩	
582	浅鉢	VIII F-5b	17758	-	160	+124	72	IIIb	楕円形磨消区画、斜行縄文(LR)	ナデ、ミガキ	
583	浅鉢	VIII F-9b	16652	227	-	155	-	IIIb	貼瘤文、楕円形磨消区画、斜行縄文 (RL)	ナデ、ミガキ、内 外面煤炭化物	
584	深鉢	IVF-1c	7691	130	-	176	64	I~II?	刺突隆帯、斜行縄文(LR)	ナデ、ミガキ	
585	深鉢	III F-10a	7654	260	-	439	100	I~II?	斜行縄文(LR)	ナデ、外面煤	
586	深鉢	VF-9c	7881	119	-	143	79	?	無文、内外面煤	ナデ、ミガキ	
587	深鉢	VIII E-4h	18010	242	-	221	-	III~IV?	平行沈線、斜行縄文(LR)	ナデ	
588	深鉢	IVD-9d	940	-	-	+280	97	IVa	刺突隆帯、貼瘤文、斜行縄文(RL)	ナデ	
589	深鉢	IVE-9g	8914	+211	210	304	122	IVa	橋状把手、貼瘤文、撚糸文(?)	ナデ、外面煤	
590	深鉢	IVD-5j	1352	+110	+180	+180	-	IVa	橋状把手、刺突隆帯、貼瘤文、斜行 縄文(末端結節、LR、縦位)	ナデ、外面煤	
591	深鉢	III D-10e	1937	-	117	126	79	IVa	刺突隆帯、貼瘤文、撚糸文(?)、底 面：木葉痕	ナデ、ミガキ	
592	深鉢	VIII F-10c	16056	178	-	244	90	IVa	円形隆帯、刺突隆帯、条痕文	ナデ	
593	深鉢	VF-7f	9136	316	-	489	106	IVa	刺突隆帯(渦巻)、斜行縄文(LR)	ナデ、ミガキ	
594	深鉢	VF-9c	7882	-	265	227	-	IVa	貼瘤文、斜行縄文(LR、斜位)	ナデ	
595	深鉢	IVE-1i	7006	-	250	245	110	IVb	橋状把手(捻)、沈線文、円形刺突文	ナデ	
596	小形鉢	VIII F-8c	17871	69	87	71	51	IVa	刺突文	ナデ	
597	深鉢	IVF-2a	7235	92	108	81	58	IVa	刺突隆帯、撚糸文(R、縦位)	ナデ	
598	小形	VIF-9f	16325	-	50	+59	28	IV?	網目状撚糸文(R)	ナデ	
599	蓋	VIF-8j	16078	-	-	+50	-	IV	円形摘み、刺突文、沈線文	ナデ	
600	蓋	VIF	21667	140	-	52	-	IVb	円形摘み?、刺突文、沈線文	ナデ、ミガキ	
601	蓋	VIF-8h	16109	-	-	61	-	IVa	橋状把手、円形刺突隆帯	ナデ	
602	蓋	VIII F-1g	15702	+112	-	33	-	IVa	円形摘み、貼瘤文	ナデ、ミガキ	
603	蓋	VIG-3b	15281	108	-	37	-	IV	中央橋状把手、無文	ナデ	
604	蓋	VIII E-1j	17649	+91	-	60	-	IV	円形摘み、斜行縄文(RL)、側面圧痕	ナデ	
605	蓋	IVE-6h	11076	195	-	58	-	IV	橋状把手、刺突文、斜行縄文(?)	ナデ、ケズリ	
606	蓋	IVF-6h	15441	118	-	+28	-	IV	円形摘み?、橋状把手、刺突隆帯	ナデ	

中道遺跡縄文土器（完形・復元土器）観察表 6

番号	器種	出土位置	注記No	口径	胴径	器高	底径	時期	文様等	調整等	備考
607	蓋	VIII F-8 g	16711	100	-	+24	-	IV	中央橋状把手?、無文	ナデ、ミガキ	
608	蓋	VIII E-3 j	17809	89	-	34	-	IV	中央橋状把手、渦巻状隆線	ナデ	
609	蓋	VIII F-3 b	17609	87	-	27	-	IV	橋状把手、隆帯	ナデ	
610	蓋	VIII F-2 f	17472	92	-	32	-	IV	橋状把手、刺突隆帯	ナデ	
611	蓋	VF-1 h	8486	115	-	19	-	IVa	橋状把手?、円形刺突文	ナデ、ミガキ	
612	蓋	IVC-2 i	1965	91	-	42	-	IVa	円形摘み、円形刺突文	ナデ、ケズリ	
613	蓋	IVE-4 j	9008	92	-	28	-	IVa	円形摘み?、貼瘤文	ナデ	
614	蓋	VIII F-4 b	17681	+67	-	24	-	IV	円形摘み(穿孔)、橋状把手?、刺突隆帯・沈線	ナデ	
615	蓋	VF-1 f	8511	113	-	65	-	IV	円形摘み、無文	ナデ、ミガキ	
616	台付鉢	VD-4 j	8907	70	-	32	-	IV?	脚部、無文(部分的に斜行縄文)	ナデ	
617	深鉢	VE-9 g	12314	165	-	+88	-	V	口縁部円孔、縁帯文、内外面煤	ナデ、ミガキ	
618	深鉢	VIII F-8 a	17868	238	-	+163	64	VI	帯状文(磨消)、斜行縄文(LR)	ナデ、ミガキ	
619	深鉢	IVD-4 e	1672	170	-	124	61	VI	帯状文(磨消)、斜行縄文(RL)、底面：網代痕	ナデ、ミガキ	
620	注口	VIII F-9 a	18031	56	105	100	28	VI	浮彫風入組文、底面：網代痕	ミガキ	
621	注口	VIII F-3 i	17663	-	110	+64	34	VI	浮彫風入組文、底面：網代痕	ミガキ	
622	鉢	IVD-9 e	9001	+71	-	61	38	VI?	磨消縄文(LR)	ナデ、ミガキ	
623	壺	VD-3 g	9077	50	-	82	42	IV	磨消縄文(LR、横・縦位)	ナデ、ミガキ	
624	浅鉢	VIII F-9 f	16667	131	-	92	75	?	口縁部円孔、無文、内外面煤	ナデ、ミガキ	
625	小形	表採	20977	-	-	42	40	?	無文	ナデ	
626	壺	VIII F-9 f	16634	68	90	100	53	VI?	無文、底面：網代痕	ミガキ	
627	多孔底注口	VIII F-6 d	17824	135	-	109	87	VI	上面皿部穿孔、無文、底面：網代痕	ナデ、ミガキ	
628	多孔底注口	VF-3 h	8614	-	-	+102	118	VI	上面皿部穿孔、無文、底面：網代痕	ナデ	
629	多孔底	VE-9 i	7358	172	-	30	110	VI	底面穿孔、無文	ナデ	
630	多孔底	VIF-8 e	16117	+132	-	72	64	VI	底面穿孔、無文	ナデ	
631	多孔底	IVD-8 i	1524	-	-	+18	50	VI	底面穿孔、無文	ナデ	
632	深鉢	VIE-6 f	16620	163	-	184	68	VII	平行沈線、羽状縄文(RL・LR非結束)	ナデ	
633	壺	VIE-2 h	16485	78	132	105	45	VII	平行沈線、羽状縄文(LR・RL非結束)	ナデ、ミガキ	
634	深鉢	VC-7 j	276	-	182	+147	77	VII	浮彫風玉抱文、斜行縄文(LR)	ナデ、ミガキ	
635	壺	IVC-10h	634	38	85	92	25	VII	雲形文	ナデ、ミガキ	
636	注口	VIE-8 i	16455	70	100	87	30	VII	沈線文(浮彫?)	ナデ、ミガキ	
637	浅鉢	XE-6 d	20905	177	-	112	55	VII	口縁端部刻目、工字文、漆塗痕?	ナデ、ミガキ	
638	浅鉢	VIII F-9 a	18031	176	-	76	60	VII?	眼鏡状(突起状)浮文	ナデ、ミガキ	
639	深鉢	VII G-7 f	15190	155	-	101	57	VII	工字文、斜行縄文(LR)	ナデ、内外面煤・炭化物	

## (2) 土製品 (第77図～第81図)

遺構や包含層から、土偶・三角形土版・有孔球状土製品・土製耳飾など7種類、160点の土製品が出土している。中道の縄文集落は、中期から晩期までの長い期間にわたって断続的に営まれており、土製品の中には時期の特定が困難なものも含まれている。

### 土偶 (第77図～第79図)

出土した総数54点の土偶のうち、中期の河童形土偶が大半を占め、後期のハート形土偶や山形土偶、晩期の遮光器土偶と思われるものなどがある。いずれも破損したもので、完存品は1点もない。

中期の土偶(2～18)は、板状の体部が特徴的な河童形土偶Aタイプに分類されるもので、時期は中葉の大木8a式段階(2～12)と、大木8b式段階(13～18)に限定される。2・3は首から肩それに背面上部に渦巻文が、5・7は乳房を囲んで腕に伸びる沈線、背面に菱形の沈線文が見られる。大木8a式段階の第44号住居跡出土の11の土偶は乳房から腕へ、そして脇腹と背面に沈線文が伸びている。また、4・9の腕には2条の沈線が刻まれている。これも大木8a式段階の特徴である。3・5は首が長い土偶で、頭部を欠いているが、場合によっては頭部を持たない土偶の可能性が残っている。体部の二つに割れていた12の土偶は、大木8b式段階の第38号住居跡と同じレベルから出土した土偶であるが、文様が少ない大木8a式段階土偶の特徴を残すものと判断してこのグループに含めた。

右腕を欠損した13の土偶は、体部が大木8b式段階の第17号住居跡の覆土から、頭部が第17号から南へ15mほど離れた包含層から、割れて別々に出土した。頭部は仮面のように逆三角形の顔が突き出ており、水平に広げた腕、平らな体部、それに脚部を省略した形態である。文様は小さい乳房を下から支えるようなY字状の沈線文、出臍を中心に腹から脇腹を通して背中周囲にかけての渦巻文などの文様が描かれている。大木8b式段階の土器把手が炉縁の石に挟まれた第1号住居跡の石組炉の脇で、同じレベルの黒色土中から出土した15の土偶も、13と同じ形態・文様構成である。1は13と同じ形態の顔の河童形土偶であるが、顔からは時期の特定が付きにくく、中葉の河童形土偶としておきたい。

左腕と左腹の20の土偶は、後期前葉の南三十稲場式の第25号住居跡(石組炉)の周辺から出土したものであるが、後期前葉から中葉に見られるハート形あるいは山形土偶の形態を示しておらず、ここでは時期不詳の土偶としておきたい。

新潟県内における後期の土偶は、ハート形土偶と山形土偶などがある。19は細い腰に足を広げた形態の土偶で、足などの渦巻文に、右肩だけの21は肩が張っているところから、左足の22は踏ん張るところと足の文様がハート形土偶に類似している。24は鼻が飛び出た丸い顔の土偶であるが、山形土偶の顔の一形態に類似している。山形土偶は体部の正中線が刺突文で表現されることがある。25も山形土偶と思われる。26は三角形の頭から名付けられた山形土偶そのものの顔で、29・30は腰に三角形の鋸歯状文があり、刺突文の正中線など、山形土偶の特徴を伝えている。両面に顔が描かれた27は、土器の把手の部分の可能性もあるが、顔の特徴が山形土偶に類似しており、土偶と認定した。

耳が上に突き出た点が特徴的な28は、晩期大洞C1式段階の第62号住居跡の出土である。後期終わりごろのミミズク土偶から晩期の遮光器土偶は、目の表現が特徴的であるが、28は遮光器土偶の範疇にも属さないもので、分類については見解をもたない。32は、細い腹から腰が張る形態の土偶で、晩期の遮光器土偶に類似している。肩が張って刺突文が施された33は、大洞C2式段階の第63号住居跡出土である。36は第61号住居跡の覆土からの出土である。

### 三角形土版 (第80図39～45)



平面が二等辺三角形を呈し、断面が若干反る形態の土製品で、刺突文や沈線文で文様が施されている。中道からは8点出土している。三角形土版は中期の所産が多い。40は第1号住居跡の脇からの出土で、大木8b式段階の三角形土版である。完存品は39・44・45の3点で、39は肩に相当する部分に刺突文が施されている。44・45は無文である。42・43は二等辺に相当する部分の破片で、42は沈線と刺突文で、43は両面に沈線で文様を描いている。

#### スタンプ状土製品 (46)

ゴム印のように、文様が彫られた面と、その背面に穴が穿ってあるつまみをもつ土製品で、中道からは1点出土している。文様は、沈線で菱形のような放射状文である。縄文後期の所産と思われる。

#### 罈形土製品 (47)

中央に大きな楕円形の穴があり、周囲が円弧状に抉られたようになった土製品で、全面に朱が塗られている。入組文風の文様が両面と脇に施されている。文様は縄文後期末から晩期初めごろの土器に見られる文様であり、罈形土製品の時期は、このころと考えられる。

#### 有孔球状土製品 (48～51)

細長い球に、中央に穴が貫通している土製品で、51の一端に矢羽状の沈線文が見られる以外は、無文である。50・51の2点は、晩期大洞C1～C2式段階の第61号住居跡出土である。

#### 土錘 (52～54)

長軸と短軸の両軸に十字と、長軸の1本の縄掛けの沈線が刻まれている土製品で、中道では図示した3点が出土した。石錘と同様な用途が考えられている。

#### 円板状土製品 (55～74)

縄文土器の破片の周囲を磨いて、円板状の丸い形状を呈する土製品である。大きさは図示したとおりである。中道からは72点出土している。63は中期中葉の大木8b式段階の第41号住居跡出土、73は三十稲場式段階の第31号住居跡出土である。それ以外は、包含層出土である。用途は不明である。

#### 土製耳飾 (75～94)

総計20点の土製耳飾が出土している。中央に穴が貫通し、両脇がくぼんでいるもの(75～82)と断面が漏斗状のもの(83)、断面が漏斗状で上面が若干くぼんでいるもの(84・89・90)、両脇がくぼんで穴をもたないもの(85～87)、白形で上部が円弧状のつまみをもつもの(88)、白形で透かし彫りをもつもの(92)、白形で刺突文(91)や文様をもつもの(93)、それに白形で縁が薄いもの(94)など、さまざまな形態と文様の土製耳飾がある。このうち、79は中期後葉の大木9式段階の第34号住居跡の覆土から出土した滑車形耳飾で、白形の91・92・94は晩期大洞C1～C2式段階の第61号住居跡出土である。

### (3) 石製品 (第104～108図)

身を飾る装身具の玉類や独特の形態の呪術的な道具である石冠や石棒などの石製品をここにまとめた。

#### 硬玉製大珠 (1～3)

破損品を含めて3点出土している。いずれも鏗節形を呈する大珠で、穿ってある穴は1個である。3は1・2に比べて小形で破損している。包含層出土であるが、中期の所産と考えられる。

#### 玉類 (4～19)

垂玉(4)、小玉(5～10)、丸玉(11～16)、勾玉(17・18)それに2個の穴を穿った薄い板状の石などが出土している。総数は16点に上る。垂玉の4は、晩期の大洞C1～C2式段階の第61号住居跡からの出土で、18の勾玉は付近から大洞C1式段階の土器が出土しており、時期的には晩期中葉の玉と考えられる。こ

の他に、ヒスイの剥片が20点ほど出土しており、中道で小玉などの生産が行われたことを物語っている。

#### 三角埴石製品 (20・21)

長方形の礫を断面三角形に研磨した石製品で、中道からは図示した2点が出土している。21は底面がくぼんでいる。本資料に類似するものに中期に出現する三角埴土製品があり、この三角埴石製品も中期の所産と思われる。

#### 三脚石器 (22～24)

三角形土版と形態が類似していることから呪術的な道具との指摘があり、ここでは呪術具の仲間として扱った。その他に削り具の機能も指摘されている道具でもある。23は第31号住居跡出土として取り上げたが、重複する第49号住居跡(大木8b式段階)に帰属するものと考えられる。他の2点の時期も中期に位置するものであろう。

#### 石剣 (25・26)

横断面が両刃の剣のように楕円形もしくは菱形を呈する石製品で、4点出土している。図示した2点とともに先端部が遺存したものである。後期から晩期の遺物であろう。

#### 石刀 (27～30)

図示した4点の石刀が出土している。横断面が片刃である点が石剣と異なる。両端部を欠損した29は、かなり広範囲にわたって朱が塗布されている。

#### 石冠 (31～33)

三角埴石製品に類似するが、石冠は上部が烏帽子状のつまみか、横断面の底部近くが横に張り出しを残すように研磨している点が異なる。晩期大洞C式段階の第66号住居跡出土の32は、穴が貫通し、底の側面に沈刻が見られる。33は晩期大洞C2式段階の第63号住居跡出土である。

#### 独鈷石 (34～38)

両端部に刃部をもって中央部に握りの抉り込みがある点から、両頭石斧とも呼ばれる遺物で、中道では5点出土している。34の握りは粗削りの仕上がりで、かつ右側面が縦に破損しているところから、製作途上で欠損した可能性もある。握りのところから欠損している35も製作途上の破損品かもしれない。36は第62号住居跡出土で、晩期大洞C1～C2式段階の遺物である。他も晩期のものと考えられる。

#### 石棒 (39～70)

未製品も含めて94点が出土している。大きさに大小の区別がある。大形品の39～41の頭部は、環状のリングや三角形に刻まれている。大形・小形を問わず頭部が亀頭状になっているものが多い。小形の62・63・69は両端が亀頭状になっている。亀頭状の頭部は丸いものや手の指を表現したかのような刻みが入っているものなどがある。石棒は断面が丸いものが一般的であるが、69の断面はやや偏平となっており、縦に半分に破損した可能性もある。

三角埴石製品観察表

図No	出土位置	長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重(g)	備考
20	II D - P 171	85	55	30	220	全面良く磨かれており断面は三角形
21	VI E - 6 e	130	80	55	1060	底面は擦ってかるく凹んでいる

三脚石器観察表

図No	出土位置	長(mm)	厚(mm)	重(g)	備考
22	II D - 10 b	56 × 55 × 57	11	30	
23	31号住居跡	45 × 45 × 42	15	20	
24	III C - 7 d	35 × 42 × 40	11	10	

石剣観察表

図No	出土位置	長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重(g)	備考
25	VII F - 8 g	71	25	9	15	縦に両面剥離、横に欠損、先端部遺存
26	III D - 3 b	70	26	6	20	縦に両面摩耗

石刀観察表

図No	出土位置	長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重(g)	備考
27	VII F - 6 a	100	22	7	25	縦と横に欠損、先端部遺存
28	VII E - 1 e	91	26	19	80	先端付近で欠損、先端部遺存、刀の様な形
29	VI E - 2 i	200	27	19	180	両端欠損、刀の様な形、広範囲に朱塗りである
30	III F	64	28	15	60	両端欠損、一部のみ遺存

石冠観察表

図No	出土位置	長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重(g)	備考
31	V F - 6 g	100	90	50	440	石棒状の頭を持つ
32	66号住居跡	90	50	32	180	人工的な直径7mmの穴が貫通 底面側面に沈刻
33	63号住居跡	115	61	42	290	被熱あり、底面多少窪んでいる

独鈷石観察表

図No	出土位置	刃平	刃断	長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重(g)	備考
34	V E - 8 f	円刃	両刃	107	50	27	200	縦に破損
35	IV F - P 111	円刃	—	101	83	59	720	中央部で破損
36	62号住居跡	円刃	両刃	215	73	43	930	被熱あり
37	IV E - 6 g	円刃	両刃	157	62	43	580	
38	VIII E - 3 f	円刃	両刃	161	64	29	460	被熱あり

石棒(大型)観察表

図No	出土位置	長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重(g)	備考
39	FP37	108	81	61	475	頭部あり円錐状、頭頂部凹あり
40	IV D - P 23	132	90	84	900	頭部近くで欠損、文様不明、頭部あり、円錐状
41	IV F - 10 d	120	95	80	930	有文、頭部あり、頭頂部凹、円錐状
42	VIII F - 1 e	210	115	120	2300	頭部あり、円錐状
43	V E - 5 a	220	120	115	3970	頭部あり、円錐状、中央部付近で欠損
44	III F - 10 C	35	120	100	4800	完形、頭頂部凹、円錐状、下部平ら
45	II D - 10 d	305	90	90	3300	頭部あり、頭頂部平ら、円錐状、下部欠損
46	III C - 7 h	205	111	100	3270	頭部あり、円錐状
47	II D - 10 d	190	120	120	2720	頭部あり、被熱あり、円錐状、頭部で欠損
48	V F - 1 a	380	145	130	5600	頭部あり、頭頂部平ら、円錐状、下部欠損
49	VIII G	400	110	100	5000	頭部側で欠損し縦にも欠損、下部は円錐状
50	FP40	300	100	90	4100	頭部欠損、下部平ら
51	V E - 5 f	200	100	100	2480	下部平ら、中央部付近で欠損、被熱あり
52	VI G - 10 a	93	72	40	320	頭部あり、縦横に欠損
53	VIII E - 6 e	93	56	45	415	頭部作成中とみられる敲打痕あり
54	III D - 1 d	89	54	43	270	頭部近くで縦と横に欠損、頭部あり
55	IV D - P 5	80	42	40	230	頭部近くで欠損、頭部あり、円錐状
56	IV F - 3 d	192	61	50	950	頭部あり、磨痕あり
57	IX E - 3 e	325	34	29	460	完形、下部にアバタ状の敲打痕、下部円錐状
58	VIII F	70	25	22	65	両端欠損
59	61号住居跡	100	31	19	75	頭部あり、頭部に線状の文あり
60	61号住居跡	111	30	26	155	頭部無し、下部遺存、下端部は円錐状

石棒(小型)観察表

図No	出土位置	長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重(g)	備考
61	IX E - 5 i	60	27	26	70	頭部あり、赤色系
62	VIII E	79	27	23	50	両頭、頭部とは浅い凹線で区画される
63	IV E - 7 a	87	31	27	80	両頭、被熱あり
64	表 採	67	22	12	25	頭部あるが一部欠損
65	61号住居跡	53	26	13	25	頭部あり、偏平
66	VI F - P 98	106	22	19	80	完形、頭部に線状の彫刻あり
67	VIII G - 1 a	96	26	23	105	頭部側で欠損、下端部平ら
68	66号住居跡	90	21	13	35	単頭、手の指様な彫刻あり
69	VI F - 8 d	102	20	7	20	完形、両頭、偏平
70	VII G - 10 C	117	20	10	40	単頭(両頭有ったと思われる欠損状態)偏平

#### (4) 石器 (第82~103図)

出土した石器は総数3,801点を数える。その器種は18種類で、石鏃・石槍・石錐・打製石斧・石筥・磨製石斧・その他の石斧・三日月形石器・石匙・スクレイパー・板状石器・楔形石器・石錘・敲石・凹石・磨石・石皿・砥石がある。量的には、凹石・石皿などの磨石類が最も多く、次いで石鏃、磨製石斧、打製石斧、石錘などが目立っている。これらの器種の組成比率が高い状況は、長岡周辺の縄文時代中期~晩期遺跡にみられる傾向とほぼ同様である。

ここでは、各器種ごとに形態的な特徴を記載する。住居跡やピットなどの遺構に伴うものもあるが、その多くは包含層から出土しているため、両者をあわせて取り上げた。石器の帰属時期は、出土した土器からみて中期中葉から晩期 (I~VII期) にわたるが、遺構に伴うものを除いて時期的な限定は困難である。なお、各器種の点数及びその割合は8ページの表に、また器種別の出土状況は第44~49図に示した。

石器の分類は、堀之内町清水上遺跡(田海他1990、鈴木・寺崎他1996)、小千谷市城之腰遺跡(藤巻他1991)、塩沢町五丁歩遺跡(高橋他1992)などを参考とした。

石鏃(1~70) 完形品及び略完形品358点、未製品や大部分を破損しているもの118点の計476点が出土した。完形品及び略完形品を中茎の有無及び基部の形状に基づいて分類し、凹基無茎鏃については基部の挟り度(挟り部分の深さ÷幅)によって細分した。

A類：平基無茎鏃(1~11) 中茎をもたず、基部が直線的なもの。基部の挟り度が0.15未満のものを含めた。53点。長幅分布では長さ13~25mm、幅9~17mmのものが多いが、長さ30mm以上のものも6点ある。厚さは8~9mmのものもあるが、3~4mmのものが多い。重さは0.4~1.0gのものも多く、3g以上のものが3点ある。

B類：凹基無茎鏃(12~23) 中茎をもたず、基部の挟り度が0.15以上0.30未満のもの。49点。長さ14~42mm、幅9~21mmで、長幅分布に顕著な偏りは見られない。厚さは2.5~6.0mmであるが、3~5mmのものが多い。重さは0.7~1.3gのものも多く、3g以上のものは2点ある。

C類：凹基有茎鏃(24~32) 中茎をもたず、基部の挟り度が0.30以上のもの。54点。長さ13~35mm、幅7~20mmで、長幅分布に特に偏りは見られない。厚さ2~5mm。重さ0.4~1.5gのものも多く、3g以上のものが2点ある。

D類：凸基有茎鏃(33~54) 中茎をもち、基部が突出しているもの。106点。長さ16~46mm、幅9~20mmで、長幅分布では長さ18~35mm、幅9~17mmのものが多い。厚さ3~12mm。重さ0.7~2.1gのものが多いが、3g以上のものが12点あり、その中には6g以上のものが4点ある。最も重いものは10.22gである。

E類：凹基有茎鏃(55~59) 中茎をもち、基部に挟りの入っているもの。31点。長さ21~28mm、幅13~15mmで、長幅分布に特に偏りはみられない。厚さ3~6mmのものが多い。ほとんどが重さ0.6~2.0gで特に偏りはみられないが、3g以上のものも1点ある。

F類：平基有茎鏃(60~65) 中茎をもち、基部が直線的なもの。30点。長さ5.8mmのもの1点あるが、多くが長さ19~39mm、幅10~16mmで、長幅分布に特に偏りはみられない。厚さ4~6mmのものが多い。重さ1.0~1.5gのものが多いが、4gを超えるものも1点ある。

G類：尖基鏃・円基鏃(66~70) 基部が棒状のもの及び基部が丸味を帯びているもの。計35点。長さ13~62mm、幅6~19mmで、長幅分布では長さ28~36mm、幅9~19mmのものが多い。厚さは4~10mmで、A~F類のものに比べてやや厚い。重さ0.8~3.5gのものもあるが、5g以上のものが5点あり、最も重いものは12.28gある。

石鏃に用いられている石材は、476点のうち、玉髓が152点で31.93%を占めており、次いで流紋岩96点(20.17%)、鉄石英(黄)50点(10.50%)が多い。他にはチャート46点(9.66%)、鉄石英(赤)34点(7.14%)、頁岩29点(6.09%)、凝灰岩23点(4.83%)、黒曜石15点(3.15%)、安山岩6点(1.26%)などとなっている。なお、無茎鏃と有茎鏃とでは石材の比率が異なっており、無茎鏃は流紋岩26.92%(42点)、玉髓11.53%(18点)であるのに対して、有茎鏃では玉髓39.50%(66点)、流紋岩18.56%(31点)と逆転している。また、尖基鏃・円基鏃は玉髓45.7%(16点)、鉄石英(黄)17.14%(6点)、鉄石英(赤)11.43%(4点)、チャート11.43%(4点)、流紋岩5.71%(2点)などで、無茎鏃・有茎鏃と比べると流紋岩の割合が低い。

観察表の「アスファルト」はアスファルトの付着位置を示している。アスファルトの付着している石鏃は68点出土しており、無茎鏃で基部のみに付着しているもの(A)5点、基部から鏃身にかけて付着しているもの(B)12点、鏃身に少量付着しているもの(C)5点、有茎鏃で中茎には付着していないが基部に付着しているもの(D)6点、中茎と基部に付着しているもの(E)38点、鏃身に少量付着しているもの(F)2点であった。また、観察表の「欠損」は欠損部分を表し、先端が欠損しているものをA、基部が欠損しているものをB、その他の部分が欠損しているものをCとした。

出土状況を見ると、発掘調査区中央から東側にかけて多数分布しており、その範囲は後期から晩期の遺構の分布域と重複する。特に有茎鏃の類は未製品を含めて晩期の遺構付近にまとまっている。住居跡からの出土は46点で、第61号住居跡(13点)、第66号住居跡(11点)、第63号住居跡(7点)、第22号住居跡(7点)などからの点数が多い。第62号住居跡から出土した22は朱塗りの痕跡を残す特異なもので、図面では朱塗りの部分を網点で示した。

石槍(71~78) 先端の尖った槍先形の形態で、完形品1点(75)、略完形1点(78)、刃部のみ遺存のもの3点(72・73・77)、未製品3点(71・74・76)の計8点が出土している。完形品は第45号住居跡(中期後葉)から出土したもの。先端から約1/3の辺りで折断していた。大形で特異な形状を呈することから、儀器的な機能が推測される。

石錐(79~88) 鋭い先端部を作り出している石器で、未製品2点を含む54点が出土した。欠損等により分類できなかったものを除く42点を錐部と摘みの形状によって分類した。

a類：錐部と摘み部の区別が明確でなく、棒状のもの(81・87・88)。9点。

b類：錐部と摘み部の区別が明確でなく、幅狭のV字形のもの(86)。4点。

c類：錐部と摘み部の区別が明確でなく、幅広の逆三角形のもの(82・83)。5点。

d類：錐部と摘み部の区別が明確なもの(79・80・84・85)。24点。

石材は、チャート14点(25.92%)、流紋岩14点(25.92%)、頁岩12点(22.22%)、鉄石英(黄)4点(7.40%)、玉髓4点(7.40%)、不明6点である。また、出土状況は石鏃同様、発掘調査区中央から東側にかけて分布し、後・晩期の遺構の範囲とほぼ重なっている。

打製石斧(89~135) 完形品及び略完形品が197点、未製品47点、欠損品124点の計368点が出土している。未製品を除く321点を平面形から撥形・短冊形・分銅形に分類した。

撥形(89~109) 三味線の撥に似た形状で、刃部幅が基部幅の1.5倍以上のもの。104点。完形品・略完形品の長幅分布をみると、長さ80~140mm、幅40~65mmのものが多い。長さが150mm以上のものが6点あり、最大のものは、長さ210mm、幅92mmである。

短冊形(110~131) 長方形をしたもので、刃部幅が基部幅の1.5倍未満のもの。213点。完形品・略完形品の長幅分布は、長さ82~127mm、幅35~55mmのものが多く、また、長さ120~140mm、幅45~65mmのもの

もやや多い。長さが150mm以上のものは8点あり、長さ220mm、幅71mmのものが最大である。

分銅形 (132~135) 上下両端が張り出し、中央部がくびれるもの。4点。長さ94~138mm、幅52~68mmである。

観察表の「遺存状態」の分類は、破損位置が基部寄りで、基部側が残っているものをA、刃部側が残っているものをA'、以下同様に、破損位置がほぼ中央のものをB、B'、破損位置が刃部側のものをC、C'とし、また、縦に割れているものをD、基部と刃部の両端が破損しているものをEとした。

観察表の「刃平」は、刃部の平面形を表し、円刃、直刃、偏刃に分類した。また、「刃断」は刃部の断面形を表し、両刃、片刃に分類した。完形品及び略完形品で刃部の形状を観察できたものでは、撥形では円刃・両刃21点、円刃・片刃38点、直刃・両刃5点、直刃・片刃14点、偏刃・両刃2点、偏刃・片刃1点、短冊形では円刃・両刃22点、円刃・片刃41点、直刃・両刃8点、直刃・片刃13点、偏刃・両刃10点、偏刃・片刃14点、分銅形では円刃・両刃1点、円刃・片刃2点、偏刃・片刃1点であり、全体的に円刃・片刃のものの割合が高い。

石材は、総数368点のうち粘板岩が244点で66.12%を占めている。他には頁岩45点(12.20%)、安山岩17点(4.61%)、砂岩16点(4.33%)、結晶片岩15点(4.07%)、ホルンヘルス11点(2.98%)などが利用されている。また出土状況を見ると、発掘調査区の西側から中央部にかけて分布する傾向が認められ、中・後期の遺構範囲との関連が窺われる。

石篋 (136・137) 打製石斧より小形で篋状の形態を呈するものである。周縁に調整を加えて刃部を形成する。未製品3点を含む5点が出土している。

磨製石斧 (138~231) 完形品・略完形品が63点、未製品99点、欠損品294点の計456点を数える。形状によって定角式・擦切・両刃に分類した。また、定角式の完形品・略完形品の長幅分布をみると、長さ39~72mm・幅16~39mmのものと、長さ76~154mm・幅39~70mmのものに区分されたので、前者を小形(磨製石斧)とした。

定角式 (128~186) 両側縁及び頭部が研磨され、石斧主面とのあいだに稜を作り断面が隅丸長方形となるもの。309点。完形品・略完形品43点をみると、長さ83~130mm、幅39~62mmのものが多く、厚さは14~36mmである。また、完形品・略完形品の重さは、90~200gのものが18点、201~400gのものが19点、401~500gが6点であった。

擦切 (187~190) 側縁に擦切面(痕)が残るもの。5点がある。定角式未製品の可能性が残るものもあるが、本類に含めた。

定角式未製品 (191~200) 小形のものを5点を含めて99点が出土している。擦切の痕跡を残しているものは含めていない。刃部は磨かれていても側縁の稜が作られておらず、基部側が研磨されていないものが約半分を占める。遠隔地石材の蛇紋岩を含めて、集落内で石斧生産が行われていたことが推測される。

両刃 (201・202) 定角式を基部側で背合わせにした形で、刃部が両方にあるもの。2点。

小形 (203~231) 定角式で長さ39~72mm・幅16~39mmのもの。完形品・略完形品18点、欠損品23点の計41点を数える。

観察表の「遺存状態」・「刃平」・「刃断」が表している内容や分類の方法は打製石斧と同様である。定角式の完形品・略完形品で刃部の形状を分類できたものは、円刃・両刃32点、直刃・両刃6点、直刃・片刃1点、偏刃・両刃2点であり、円刃・片刃のものと偏刃・片刃のものはなかった。擦切では分類できたものは1点で、偏刃・両刃であった。両刃は、2点とも円刃・両刃を両方の刃部にもつ。小形では、円刃・

両刃5点、直刃・両刃8点、偏刃・両刃3点であり、断面形が片刃のものはなかった。

使用石材は、456点の48.68% (228点) を砂岩が約半数を占めており、続いて、蛇紋岩135点 (29.60%)、安山岩43点 (9.42%)、凝灰岩17点 (3.72%)、粘板岩17点 (3.72%) などが多い。なお、擦切の5点はすべて蛇紋岩であり、小形のもの未製品も含めた46点のうち29点が蛇紋岩であった。また、出土状況としては、主に発掘調査区中央から東側にかけて分布し、後・晩期の遺構範囲との関連が窺われる。

その他石斧 (232) 刃部周辺を部分的に研磨する。1点。石材はホルンヘルスで、刃部の形状は直刃・両刃である。小形磨製石斧の未製品の可能性がある。

三日月形石器 (233・234) 平面形が三日月の形を呈するスクレイパー状の石器で、2点出土している。細かな剥離によりほぼ全周に刃部が作られている。中期の所産とみられる。

石匙 (235～250) 完形品21点、未製品とみられるもの8点の計29点が主に発掘調査区の中央部と東側で出土している。摘み部を上にしたときに、刃部が縦になるタテ形 (235～239) と、横になるヨコ形 (240～250) とに区分される。タテ形8点、ヨコ形21点であった。そのうち、摘み部付近にアスファルトが付着しているものが8点認められる。249は摘み部を2つもつ特異な形態で、両方の摘み部にアスファルトが付着する。

スクレイパー (251～254) 周縁に刃部を形成する楕円形状のもの3点、直線的な刃部をもつ方形のもの1点の計4点が出土している。浅い角度の剥離によって刃部を作り出している。

板状石器 (255～263) 完形品21点、未製品4点の計25点が出土。偏平礫あるいは平坦な剥片の全周に急角度の調整によって刃付けされ、その多くが平面円形・楕円形を呈する。石材は粘板岩を主として、安山岩、凝灰岩などを用いている。

楔形石器 (ピエス・エスキュー) 表裏の上下両端に小剥離がみられるもの。図示していないが、IIC-8d区から1点出土している。長さ3.7cm、幅2.9cm、厚さ1.3cm、重さ12.16gである。

石錘 (264～280) 円礫の両端を打ち欠いて縄かけ部を作るいわゆる礫石錘が215点、細い切り込みによって縄かけ部が作られる切目石錘が22点、溝を巡らして縄かけ部が作られる有溝石錘が8点の計245点が出土している。すべて偏平な小円礫で、主に安山岩や砂岩などが用いられている。出土状況としては、発掘調査区の中央部付近に比較的多い。

観察表の「縄かけ部」は、縄かけ部の数を表している。礫石錘は破損により不明なもの4点を除くと、2か所のものが200点、3か所のものが7点、4か所のものが4点、切目石錘は22点すべてが2カ所である。有溝石錘は、1点のみ溝が十字に巡って縄かけ部が4カ所になるが、残りの7点は縄かけ部が2カ所になるものである。

敲石 (281～294) 偏平な礫や柱状の礫を用いているもの25点、磨製石斧を転用したもの5点の計30点が出土している。使用痕の分類は、敲打により表面がアバタ状を呈するもの (a)、大きな剥離を伴うツブレ (b)、面的なツブレ (c)、面的なツブレが複合し、多面状を呈するもの (d) とした。

敲石としてだけでなく、複合的に利用されていたものも多く、磨石の痕跡もあるもの11点、凹石の痕跡もあるもの1点、磨石の痕跡と凹石の痕跡のあるもの3点、凹石の痕跡と砥石の痕跡もあるもの1点があった。磨製石斧から転用されていたものはすべて磨石としても利用されていた。石材には、主に安山岩・砂岩などが用いられている。

凹石 (295～317) 偏平礫を素材とするものが771点、磨石や敲石などとしても利用されたとみられるもの670点、破損などにより不明なもの21点で、合計1,462点の多数を数える。塊状礫を素材とするものは



ない。発掘調査区のほぼ全域から出土している。

観察表の「正面」・「裏面」はそれぞれの面の使用痕を示している。その分類は、敲打が集中せず、石面が荒れてアバタ状を呈するもの (a)、単独の深くぼみを有するもの (b)、複数の深くぼみを有するもの (c) とした。片面のみ利用されているものが180点、両面が利用されているものが1,252点、破損などで不明なものが30点で、両面利用されているものが多い。さらに、片面利用の内訳は、aが47点、bが56点、cが77点、両面利用の内訳は、a・aが186点、a・bが73点、a・cが126点、b・bが155点、b・cが221点、c・cが491点である。また、被熱しているものが210点ある。石材には、安山岩・砂岩・凝灰岩などが用いられている。

磨石 (318~324) 337点が発掘調査区のほぼ全域にわたって出土している。自然礫をそのまま使用しており、偏平礫を素材としているもの282点、塊状礫を素材としているもの55点である。使用痕による分類では、主平面上にみられるもの (a) 20点、側辺あるいは稜上にみられるもの (b) 1点、円筒形の側周にみられるもの (c) 1点、全面にみられるもの (d) 304点、欠損のために不明なもの1点、また、使用痕が2種類あるものでは、a・b 7点、b・d 3点であった。なお、被熱しているものは16点である。石材には、主に安山岩・砂岩・凝灰岩などが用いられている。

石皿 (325~349) 大きさによる分類を行い、長さ3.5~16.5cm、幅2.9~13.5cm、厚さ1.0~6.5cmのものを小形石皿、長さ18.0~58.0cm、幅10.0~50.0cm、厚さ4.0~33.5cmのものを石皿とした。

小形石皿 (325~330) 37点出土しており、そのうち、完形品は36点である。住居跡からの出土はないが、グリッド別に出土が多いのは、8点のVIF、5点のVIIF、3点ずつのIVEとVIEである。

石皿 (331~349) 発掘調査区のほぼ全域から213点出土しており、完形品は100点を数える。住居跡からの出土は10点で、第22号住居跡と第31号住居跡からは2点ずつ出土している。偏平な自然礫をそのまま使用しているもの、楕円形で三方に縁をもち、掃き出し口のあるもの、また、足付きのものが認められる。石材には、安山岩や砂岩が用いられている。

観察表の「縁形態」は縁の形態の分類で、縁をもたないもの (1)、若干縁をもつもの (2)、幅広の縁をもつもの (3)、高い縁をもつもの (4) とした。「凹形態」は磨面の凹みの形態の分類で、縁をもつもので磨面が平らなもの (1)、縁をもたないもので磨面の凹みがあるもの (2)、縁をもたないもので磨面の凹みがなく平らなもの (3) とし、さらに磨面の深さが浅いものをa、深いものをbとした。「掃出口」は掃出口の有無で、掃出口があるものに○印をつけた。

使用痕が片面だけではなく、表裏両面にあるものが17点ある。また、石皿としての研磨痕だけではなく、凹石のような敲打痕を残すものもあり、敲台として利用されたとみられる。使用によって中央が磨り減って底が抜けたものも出土している。

砥石 (350~358) 48点が出土しており、素材別の内訳は、偏平礫・楕円形礫13点、塊状礫6点、柱状礫・板状礫29点である。その多くは砂岩が用いられている。

観察表の「使用法」は、どの面にどのような使用痕があるかを表している。使用痕の分類は、面状のもの (A)、玉砥石として使用されたとみられる筋状のもの (B)、線状 (C)、ツブレ (D) とした。(B) は集落内で玉作りが行われていたことを示している。

素材として偏平礫・楕円形礫や柱状礫・板状礫を用いているものの大半が1kg以下であるのに対し、塊状礫を用いているものは1~3kgのものが2点、3kg以上のものが4点である。

石鏝 (A類=平基無茎鏝) 観察表

図No	出土位置	石 材	アスファルト	欠損	長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重(g)	備 考
1	V F - 8 j	玉 髓			16	13	3	0.66	
2	37号住居跡	流 紋 岩			17	12	4	0.51	
3	VIII E	玉 髓			16	13	3	0.52	
4	V D - 1 j	鉄石英(赤)			22	11	4	1.03	
5	VIE - 1 f	チャート		A	23	13	3	0.94	
6	VIII E - P127	頁 岩	C		25	18	4	1.47	
7	66号住居跡	鉄石英(黄)			32	18	8	4.33	
8	表 採	鉄石英(黄)			30	21	9	4.73	
9	VIE - P316	チャート	A	B	30	18	5	2.41	
10	VIG - 2 d	玉 髓		A	21	16	3	0.76	
11	IXD - 5 h	玉 髓	A	B	40	15	5	2.44	

石鏝 (B類=凹基無茎鏝抉り度0.15~0.29) 観察表

図No	出土位置	石 材	アスファルト	欠損	長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重(g)	備 考
12	25号住居跡	鉄石英(黄)		A	31	16	6	2.37	
13	VII F - 10 e	玉 髓		A	21	13	3	1.00	
14	IV F - 7 e	流 紋 岩			24	19	6	1.70	
15	17号住居跡	凝 灰 岩			27	12	3	1.23	
16	II D - 8 f	チャート		B	24	15	4	1.22	
17	表 採	チャート			15	10	3	0.44	
18	VIII D - P33	頁 岩	B		37	21	6	3.66	
19	1号住居跡	頁 岩	B	A	31	22	6	3.20	
20	VII F - P 6	玉 髓	A		42	14	5	1.98	
21	V E - P11	安 山 岩			33	17	6	2.81	
22	62号住居跡	鉄石英(茶)	B		30	18	5	1.68	朱塗り
23	VIF - P82	黒 曜 石			14	11	3	0.36	

石鏝 (C類=凹基無茎鏝抉り度0.30以上) 観察表 - I

図No	出土位置	石 材	アスファルト	欠損	長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重(g)	備 考
24	25号住居跡	流 紋 岩			25	13	5	1.11	
25	II B - 7 h	鉄石英(赤)		A	31	18	5	3.26	
26	V F	チャート			21	16	4	1.21	
27	VIF - 8 j	頁 岩	B		25	17	3	0.77	
28	IXD - P14	チャート	B		20	19	5	1.36	
29	VID - P51	流 紋 岩			23	16	4	1.13	
30	III G - 1 e	玉 髓			26	13	4	0.96	

石鏃 (C類=凹基無茎鏃 抉り度0.30以上) 観察表-2

図No	出土位置	石 材	アスファルト	欠損	長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重(g)	備 考
31	VIII F-7 f	流 紋 岩		B	32	14	5	1.26	
32	IV F-3 c	玉 髓			31	12	4	1.14	

石鏃 (D類=凸基有茎鏃) 観察表

図No	出土位置	石 材	アスファルト	欠損	長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重(g)	備 考
33	VII E-9 e	玉 髓			23	13	4	0.79	
34	II D-10 d	玉 髓			32	15	4	1.70	
35	VI F-4 f	鉄石英(黄)	E		25	16	3	1.16	
36	VIII E-6 c	頁 岩	E		25	16	4	1.07	
37	VI E-8 f	玉 髓	E		24	14	4	0.79	
38	22号住居跡	チャート			33	20	10	4.04	
39	61号住居跡	流 紋 岩		B	28	13	7	1.54	
40	61号住居跡	鉄石英(黄)			22	13	5	1.26	
41	63号住居跡	玉 髓	E		25	12	4	0.94	
42	61号住居跡	頁 岩	E	C	35	14	5	2.06	
43	VIII G-1 a	チャート	E		33	14	3	1.02	
44	V E	鉄石英(赤)			25	9	7	1.67	
45	VD-P19	玉 髓			31	12	3	0.76	
46	IVD-P37	流 紋 岩			32	16	4	1.78	
47	VD-3 i	緑色流紋岩			46	20	12	6.90	
48	IX E-2 c	凝 灰 岩	E	A・C	48	14	6	3.81	
49	VIII E-7 f	玉 髓		A・C	42	12	6	1.15	
50	VII E-P1	玉 髓		C	38	10	4	1.50	
51	IX E-10 e	チャート		A・C	60	16	10	10.22	
52	VII E-5 f	緑色流紋岩	E	C	56	11	6	3.15	
53	VD-9 i	凝 灰 岩		C	45	26	9	9.11	
54	VE-6 b	鉄石英(黄)		B・C	45	25	9	8.06	

石鏃 (E類=凹基有茎鏃) 観察表

図No	出土位置	石 材	アスファルト	欠損	長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重(g)	備 考
55	IX E-10 h	鉄石英(黄)		A	26	16	6	1.95	
56	VE-9 b	頁 岩		B・C	29	17	6	1.97	
57	表 採	玉 髓			28	15	4	0.96	
58	VIII E-8 e	鉄石英(赤)	E	A	33	15	4	1.55	
59	VE-7 b	緑色流紋岩		A・B	30	15	5	1.55	

石鏃 (F類=平基有茎鏃) 観察表

図No	出土位置	石 材	アスファルト	欠損	長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重(g)	備 考
60	VIII E - 7 f	凝 灰 岩	D		27	14	6	1.42	
61	63号住居跡	玉 髓	E		25	10	3	0.62	
62	VIE - 5 e	玉 髓			23	15	4	0.87	
63	66号住居跡	玉 髓			29	15	3	0.80	
64	VE - 9 i	鉄石英(黄)	E	C	58	18	6	4.23	
65	XE - 6 e	玉 髓			39	15	6	2.53	

石鏃 (G類=尖基鏃・円基鏃) 観察表

図No	出土位置	石 材	アスファルト	欠損	長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重(g)	備 考
66	VG-P12	玉 髓			62	10	7	5.55	尖基鏃
67	表 採	玉 髓			42	12	6	3.57	尖基鏃
68	IVD-10b	鉄石英(黄)			44	9	7	3.30	尖基鏃
69	61号住居跡	頁 岩	D	C	38	11	7	3.03	尖基鏃
70	VD-1j	鉄石英(黄)		A	32	11	3	1.72	尖基鏃

石槍観察表

図No	出土位置	長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重(g)	備 考
71	表 採	52	22	10	10	未製品
72	VIG-8b	30	27	9	5	刃部遺存
73	VIE-P84	35	29	11	5	刃部遺存
74	VE-6b	53	33	104	20	未製品
75	45号住居跡	202	40	25	160	
76	IXE-10f	133	38	24	120	未製品
77	IIID-1f	60	39	19	45	刃部遺存
78	IID-P101	91	31	10	25	略完形

石錐観察表-1

図No	出土位置	石 材	遺存状態	分類	長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重(g)	備 考
79	VIII E-P128	チャート		d	43	36	11	9.57	
80	IXE-9i	頁 岩		d	29	23	11	4.87	
81	IXE	流 紋 岩		a	36	9	7	1.77	
82	表 採	頁 岩		c	24	21	6	2.55	
83	VII F-9a	チャート		c	45	32	8	11.75	先端欠損
84	VD-1i	頁 岩	完 形	d	33	19	7	2.97	
85	61号住居跡	頁 岩	完 形	d	72	30	6	9.00	

石錐観察表 - 2

図No	出土位置	石 材	遺存状態	分類	長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重(g)	備 考
86	IXE - 4 g	不 明		b	30	14	6	2.56	
87	66号住居跡	頁 岩	完 形	a	44	12	8	4.13	
88	VIE - 10 b	チャート		a	26	8	6	1.27	

打製石斧（撥形）観察表

図No	出土位置	石 材	遺存状態	刃平	刃断	長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重(g)	備 考
89	VF - 4 h	粘板岩	完 形	円刃	片刃	85	68	15	115	
90	IIID - 3 a	粘板岩	完 形	円刃	片刃	80	56	17	80	
91	IID - 10 d	ホルンヘルス	完 形	円刃	片刃	79	54	20	80	
92	IIIC - P26	不 明	完 形	直刃	両刃	84	44	12	55	
93	IVF - 8 b	粘板岩	完 形	直刃	片刃	85	45	15	62	
94	5号住居跡	粘板岩	完 形	偏刃	片刃	99	51	23	110	
95	IIIC	粘板岩	完 形	円刃	片刃	107	43	19	80	
96	IIIB	粘板岩	完 形	円刃	片刃	120	54	17	120	
97	IIIE - 7 c	粘板岩	完 形	円刃	両刃	117	58	19	150	
98	IVE - 6 c	粘板岩	略完形	円刃	片刃	126	52	17	140	
99	IID - 9 d	粘板岩	完 形	円刃	片刃	156	54	19	195	
100	45号住居跡	粘板岩	完 形	円刃	片刃	116	61	17	135	
101	VG	粘板岩	完 形	直刃	片刃	127	51	15	119	
102	IIID - 9 f	安山岩	略完形	直刃	片刃	107	80	21	175	
103	IIIF - 9 a	粘板岩	完 形	直刃	片刃	102	45	12	70	
104	IIIE - 5 h	粘板岩	完 形	直刃	片刃	100	52	27	135	
105	IVE - 1 f	粘板岩	完 形	円刃	片刃	119	69	14	158	
106	VIE-P263	粘板岩	完 形	円刃	両刃	105	55	26	110	
107	VF - 8 e	粘板岩	完 形	直刃	片刃	83	63	23	152	
108	IIIC - 4 h	頁 岩	完 形	円刃	両刃	193	77	25	370	
109	FP62	砂 岩	完 形	円刃	片刃	210	92	35	335	

打製石斧（短冊形）観察表 - 1

図No	出土位置	石 材	遺存状態	刃平	刃断	長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重(g)	備 考
110	IVE - 1 b	安山岩	完 形	円刃	片刃	220	71	37	715	
111	IVE - 1 a	粘板岩	完 形	円刃	片刃	180	61	21	310	
112	IVD - 1 f	粘板岩	完 形	直刃	片刃	92	39	14	65	
113	IIID - 4 a	安山岩	完 形	円刃	片刃	106	47	20	115	
114	IIIE - 8 d	粘板岩	完 形	円刃	両刃	115	40	15	100	
115	IIID - 5 f	安山岩	完 形	円刃	片刃	103	38	17	100	

打製石斧（短冊形）觀察表 - 2

図No	出土位置	石 材	遺存状態	刃平	刃断	長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重(g)	備 考
116	VIII E - 8 g	粘板岩	完 形	円刃	片刃	103	39	14	70	
117	III D - 3 e	粘板岩	完 形	直刃	両刃	106	50	21	130	
118	III D - 3 j	粘板岩	完 形	円刃	両刃	108	47	21	160	
119	III D - 7 c	粘板岩	完 形	円刃	片刃	100	48	18	110	
120	IV E - 2 i	粘板岩	完 形	偏刃	片刃	96	49	16	110	
121	V F - 1 d	粘板岩	完 形	円刃	両刃	106	40	17	100	
122	III E - 1 b	粘板岩	完 形	円刃	片刃	111	43	18	115	
123	V F - 2 i	粘板岩	略完形	直刃	両刃	103	54	25	200	
124	IV D - 3 g	粘板岩	B'	円刃	片刃	77	40	15	65	
125	III D - 9 i	粘板岩	略完形	偏刃	両刃	116	41	25	140	
126	V F - 1 d	粘板岩	完 形	偏刃	片刃	126	42	20	130	
127	I C - 8 h	粘板岩	完 形	偏刃	両刃	130	57	29	220	
128	VIF - 6 g	安山岩	完 形	直刃	両刃	111	51	26	170	
129	IVE-P139	安山岩	完 形	円刃	両刃	153	54	28	300	
130	VIE - 9 d	粘板岩	完 形	円刃	片刃	131	47	17	135	
131	IV E - 2 d	頁 岩	完 形	直刃	片刃	152	50	23	200	

打製石斧（分銅形）觀察表

図No	出土位置	石 材	遺存状態	刃平	刃断	長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重(g)	備 考
132	VE - 1 c	頁 岩	完 形	偏刃	片刃	138	52	29	221	
133	III D - 6 h	結晶片岩	完 形	円刃	片刃	94	62	15	100	
134	VE - 7 b	頁 岩	完 形	円刃	片刃	106	68	19	148	
135	III D - 10 g	結晶片岩	完 形	円刃	両刃	122	61	20	200	

石筥觀察表

図No	出土位置	石 材	長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重(g)	備 考
136	IV E - 2 b	頁 岩	51	25	7	10.36	
137	VII E - 6 f	鉄石英(黄)	42	24	8	11.78	タテ形

磨製石斧（定角式石斧）觀察表 - 1

図No	出土位置	石 材	遺存状態	刃平	刃断	長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重(g)	備 考
138	VC - 9 j	蛇紋岩	完 形	円刃	両刃	115	43	22	170	
139	61号住居跡	蛇紋岩	完 形	円刃	両刃	108	43	28	205	
140	IX F - 2 f	蛇紋岩	略完形	円刃	両刃	102	42	24	110	
141	VIE - 9 j	安山岩	完 形	円刃	両刃	90	43	23	130	

磨製石斧（定角式石斧）観察表-2

図No	出土位置	石 材	遺存状態	刃平	刃断	長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重(g)	備 考
142	V F - 4 f	蛇紋岩	完 形	円刃	両刃	94	50	16	120	
143	IV E - 6 a	蛇紋岩	略完形	円刃	両刃	94	44	19	130	
144	VIII F - 10 d	砂 岩	完 形	円刃	両刃	103	47	25	160	
145	表 採	蛇紋岩	完 形	円刃	両刃	88	39	20	100	
146	III D	蛇紋岩	完 形	円刃	両刃	76	46	17	110	
147	III E - 6 a	蛇紋岩	略完形	円刃	両刃	86	49	20	170	
148	III E - 8 b	不 明	略完形	円刃	両刃	110	48	22	210	
149	II C - 3 i	砂 岩	略完形	円刃	両刃	96	57	28	230	
150	V G - 10 b	蛇紋岩	略完形	円刃	両刃	115	54	32	400	
151	VI E - 1 f	砂 岩	完 形	円刃	両刃	134	55	32	390	
152	III D - 9 f	砂 岩	略完形	円刃	両刃	110	61	37	430	
153	V E - 8 g	砂 岩	略完形	円刃	両刃	106	50	29	280	
154	IV E - 1 d	粘板岩	略完形	円刃	両刃	88	42	22	150	
155	VD-P154	ホルンヘルス	B'	円刃	両刃	67	58	25	160	
156	IV E - 1 a	安山岩	B'	円刃	両刃	75	59	30	220	被熱あり
157	IV D - 8 j	砂 岩	B'	円刃	両刃	68	59	28	180	
158	III D - 3 a	蛇紋岩	B'	円刃	両刃	76	63	2	105	
159	V E - 4 h	砂 岩	A'	円刃	両刃	77	55	26	160	
160	III C - 6 e	不 明	A'	円刃	両刃	68	46	24	150	
161	IV E - 9 b	安山岩	C'	円刃	両刃	53	57	23	120	
162	III E - 10 e	蛇紋岩	B'	円刃	両刃	49	39	15	50	
163	IV C - 10 f	安山岩	C'	円刃	両刃	41	59	26	80	
164	IV D - 2 h	砂 岩	完 形	直刃	両刃	151	61	30	480	
165	IV D - 9 j	砂 岩	略完形	直刃	両刃	120	62	29	340	
166	FP 5	砂 岩	A'	直刃	両刃	87	59	25	250	
167	IX E - 2 b	蛇紋岩	完 形	直刃	両刃	84	40	17	90	
168	VI E - P309	蛇紋岩	D	直刃	両刃	77	39	15	75	
169	IV D - 4 f	蛇紋岩	B'	直刃	両刃	56	56	23	140	
170	V G - 6 b	蛇紋岩	完 形	直刃	片刃	77	47	14	96	
171	IX E - 5 f	砂 岩	完 形	偏刃	両刃	136	54	29	290	
172	III D - 9 e	蛇紋岩	完 形	偏刃	両刃	98	46	19	160	
173	IV D - 2 f	蛇紋岩	C'・D	—	両刃	67	36	28	60	
174	II D - 10 g	蛇紋岩	略完形	—	両刃	108	57	22	250	
175	IV E - 1 d	蛇紋岩	C	—	両刃	102	51	23	183	
176	III D - 10 g	蛇紋岩	E	—	—	82	42	21	140	
177	IV D - 6 j	砂 岩	C	—	—	106	41	28	220	
178	III D - 9 f	安山岩	C	—	—	106	64	26	320	
179	III D - 10 b	砂 岩	C	—	—	118	57	30	340	

磨製石斧（定角式石斧）觀察表 - 3

図No	出土位置	石 材	遺存状態	刃平	刃断	長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重(g)	備 考
180	IVD - P 4	砂 岩	C	-	-	123	54	31	330	
181	III C - P 26	蛇 紋 岩	C	-	-	105	47	27	250	
182	VIII F	砂 岩	C	-	-	118	53	30	260	
183	III D	蛇 紋 岩	C	-	-	85	42	19	84	
184	III D - 10 f	蛇 紋 岩	C	-	-	84	59	22	250	
185	V F - 8 g	砂 岩	B	-	-	66	48	27	140	
186	IV F - 4 c	蛇 紋 岩	C	-	-	98	35	13	90	

磨製石斧（擦切）觀察表

図No	出土位置	石 材	遺存状態	刃平	刃断	長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重(g)	備 考
187	VII F - 7 a	蛇 紋 岩	C	-	-	113	52	31	270	
188	表 採	蛇 紋 岩	B'	-	兩刃	53	31	19	60	
189	VIII G - 2 b	蛇 紋 岩	B	-	-	67	42	13	70	
190	V F - 10 i	蛇 紋 岩	A'	偏刃	兩刃	45	24	9	20	

磨製石斧（定角式未製品）觀察表

図No	出土位置	石 材	遺存状態	刃平	刃断	長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重(g)	備 考
191	IX F - 6 c	砂 岩	A'	凹刃	兩刃	125	70	46	620	
192	VI E - 5 e	安 山 岩	A'	-	-	123	71	40	590	
193	IX F - 5 a	砂 岩	A'	凹刃	兩刃	126	64	39	505	
194	IX E - 5 a	蛇 紋 岩	B'	凹刃	兩刃	62	47	19	90	
195	V E - 4 h	不 明	A	-	-	56	52	35	170	
196	IV D - 10 j	砂 岩	B	-	-	91	63	39	350	
197	VII D - 8 i	砂 岩	B	-	-	93	56	37	330	
198	IV E - 9 c	砂 岩	B	-	-	104	54	22	320	
199	FP53	砂 岩	B	-	-	81	53	31	210	
200	V E - 7 e	砂 岩	B	-	-	70	50	31	178	

磨製石斧（兩刀）觀察表

図No	出土位置	石 材	遺存状態	刃平	刃断	長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重(g)	備 考
201	VIII E - 9 f	砂 岩	完 形	凹刃	兩刃	185	42	31	380	
202	IV D - 5 i	頁 岩	完 形	凹刃	兩刃	103	36	22	120	



小形磨製石斧観察表

図No	出土位置	石 材	遺存状態	刃平	刃断	長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重(g)	備 考
203	VI E - 5 j	砂 岩	完 形	円刃	両刃	63	28	11	35	
204	IV E - 2 c	凝 灰 岩	完 形	円刃	両刃	54	30	15	30	
205	VI D - 1 a	蛇 紋 岩	略 完 形	直刃	両刃	53	29	11	22	
206	V F - P 17	センマイ岩	A'	直刃	両刃	49	28	9	18	
207	VII F - P 9	蛇 紋 岩	略 完 形	偏刃	両刃	60	32	8	25	
208	V C - 8 j	蛇 紋 岩	略 完 形	—	両刃	60	34	13	40	
209	V F - 5 i	蛇 紋 岩	略 完 形	円刃	両刃	62	33	10	32	
210	II B - 9 g	蛇 紋 岩	略 完 形	直刃	両刃	39	16	7	10	
211	VIII F - 1 g	蛇 紋 岩	完 形	直刃	両刃	59	39	14	50	
212	IV E - 10 d	蛇 紋 岩	A'	円刃	両刃	45	33	11	20	
213	IV F - 4 c	粘 板 岩	完 形	直刃	両刃	64	31	10	45	
214	III E - 5 c	蛇 紋 岩	C	—	両刃	61	30	12	38	
215	III D - 10 f	蛇 紋 岩	略 完 形	—	両刃	49	24	8	20	
216	VII E - P 2	不 明	略 完 形	円刃	両刃	71	24	11	30	
217	61号住居跡	蛇 紋 岩	A'	円刃	両刃	32	21	7	10	
218	V E - 7 e	不 明	略 完 形	円刃	両刃	42	27	10	18	
219	VI F - 7 h	凝 灰 岩	B'	円刃	両刃	32	30	11	20	
220	VIII F - 1 a	蛇 紋 岩	B'	円刃	両刃	38	30	9	15	
221	II D - P 30	蛇 紋 岩	B'	直刃	両刃	36	35	11	20	
222	表 採	砂 岩	B'	直刃	両刃	28	21	6	6	
223	63号住居跡	蛇 紋 岩	C	—	—	45	26	11	20	
224	V D - 2 i	蛇 紋 岩	C	—	両刃	45	26	9	12	
225	表 採	蛇 紋 岩	B	—	—	38	25	11	15	
226	IV F - 1 a	蛇 紋 岩	B	—	—	25	17	8	6	
227	IV D - 10 i	蛇 紋 岩	B	—	—	24	17	8	3	
228	61号住居跡	粘 板 岩	B	—	—	31	24	9	10	
229	VD-P102	凝 灰 岩	C	—	—	38	17	7	4	
230	VII F - 9 i	蛇 紋 岩	C	—	—	32	11	7	3	
231	44号住居跡	蛇 紋 岩	B	—	—	39	15	6	5	

その他の石斧観察表

図No	出土位置	石 材	遺存状態	刃平	刃断	長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重(g)	備 考
232	VIF - 4 c	ホルンヘルス	完 形	直刃	両刃	91	23	10	35	

三日月形石器観察表

図No	出土位置	石 材	長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重 (g)	備 考
233	III D - 10 j	チャート	39	21	7	5.00	
234	31号住居跡	玉 髓	50	1	9	9.13	

石匙観察表

図No	出土位置	石 材	長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重 (g)	備 考
235	VIF - P98	鉄石英(赤)	84	33	12	39.66	タテ形・アスファルト付着・摘み状突起
236	VIF - P288	頁 岩	67	30	8	17.66	タテ形
237	VIF - 9 f	頁 岩	84	32	13	28.32	タテ形
238	52号住居跡	玉 髓	39	87	10	34.06	タテ形
239	IVD - 9 b	凝 灰 岩	86	43	12	53.80	タテ形
240	VE - P53	流 紋 岩	32	54	8	12.38	ヨコ形
241	IXF - 4 g	流 紋 岩	35	53	10	16.34	ヨコ形
242	VF - 2 i	頁 岩	42	60	13	23.28	ヨコ形
243	IXE - 10 f	流 紋 岩	41	48	10	13.60	ヨコ形
244	VIII E - 1 j	鉄石英(黄)	25	28	8	3.63	ヨコ形
245	VIE - 6 f	鉄石英(黄)	35	59	11	14.71	ヨコ形・アスファルト付着
246	VIE - P29	凝 灰 岩	24	20	7	2.20	ヨコ形
247	IXE - 2 b	頁 岩	52	54	28	41.48	ヨコ形
248	VE - P55	頁 岩	45	76	9	19.45	ヨコ形・アスファルト付着
249	IXE - 1 b	頁 岩	50	79	13	57.50	ヨコ形・アスファルト付着・摘み2カ所
250	VD - 10 d	鉄石英(黄)	54	84	15	54.97	ヨコ形・アスファルト付着

スクレーパー観察表

図No	出土位置	長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重 (g)	備 考
251	VD - 2 g	84	48	15	75	
252	III E - 1 c	72	57	17	80	
253	VIF - 6 g	67	58	20	80	
254	IV E - 6 e	97	54	15	90	

板状石器観察表 - I

図No	出土位置	長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重 (g)	備 考
255	IXF - P 3	34	29	8	15	
256	VIII E - 2 e	46	45	9	20	
257	VII F	55	43	6	15	
258	VII F - P 7	35	35	7	15	

板状石器観察表 - 2

図No	出土位置	長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重(g)	備	考
259	III C - P113	89	69	10	110		
260	表 採	80	74	10	70		
261	表 採	57	55	14	65		
262	VI F - P98	56	47	10	40		
263	表 採	41	37	12	20		

石錘(礫)観察表

図No	出土位置	縄かけ	長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重(g)	備	考
264	III D - 6 f	2	37	30	15	30	両面剥離	
265	表 採	2	35	32	13	20		
266	IV E - 4 i	2	37	35	9	20	縄かけ片側剥離	
267	61号住居跡	2	36	33	15	20		
268	IV C - 9 g	2	51	49	14	50		
269	22号住居跡	2	63	51	12	60		
270	IV F - 9 a	2	66	50	11	60		
271	II E - 6 e	2	59	58	10	55		
272	VI F - P13	2	52	43	11	35		
273	IX F - 2 b	2	79	60	27	165		
274	表 採	3	70	59	17	110		
275	V F - 2 e	3	48	43	13	40		
276	III E - 8 h	4	58	50	16	70		
277	表 採	4	55	37	8	25	片面欠損	

石錘(有溝)観察表

図No	出土位置	縄かけ	長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重(g)	備	考
278	V G - 3 a	2	61	29	13	25		
279	表 採	2	43	31	11	20		
280	V F - 7 c	2	38	39	11	10		

敲石(偏平・柱状礫)観察表 - 1

図No	出土位置	使用痕	長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重(g)	備	考
281	IV D - 3 b	a	74	70	34	240	磨石と併用	
282	表 採	a	75	43	39	210	磨石と併用	
283	III D	b	87	39	23	140	磨石・凹石と併用	
284	VI F - 4 g	a+b	144	54	43	480		

敲石（偏平・柱状礫）観察表－2

図No	出土位置	使用痕	長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重(g)	備	考
285	VIII E - P 20	a+c	93	33	26	130		
286	IV F - 6 a	a	165	55	30	440		
287	VI F - 5 g	a	147	46	44	480	磨石と併用	
288	V E - 5 b	c	160	60	35	610	磨石・凹石と併用	
289	IX E - 8 h	a	126	45	36	340		

敲石（石斧転用）観察表

図No	出土位置	使用痕	長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重(g)	備	考
290	VI F - P 9	c	134	50	32	350	磨石と併用	
291	IX E - P 7	c	92	50	29	230	磨石と併用	
292	III E - 10 d	c	54	41	19	80	磨石と併用	
293	V E - 4 a	d	76	43	30	170	磨石と併用	
294	V E - 4 e	a+d	126	62	30	360	磨石と併用	

凹石（偏平）観察表

図No	出土位置	正面	裏面	長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重(g)	備	考
295	62号住居跡	c	c	90	57	35	370		
296	VII G - 9 b	c	c	128	74	30	335		
297	47号住居跡	c	c	120	50	71	440		
298	V F - 2 j	c	b	85	78	47	410		
299	VI D - P 46	c	c	113	51	32	240		
300	IID	c	b	107	82	47	510		
301	VII G - 4 f	c	a	123	72	29	330		
302	III E - 9 j	b	b	85	85	36	290		
303	VIII E	a	a	106	78	65	750		
304	35号住居跡	a	a	110	87	42	440	被熱あり	
305	V F - 3 h	c	c	81	46	45	310		

凹石（他機種・併用）観察表－1

図No	出土位置	正面	裏面	長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重(g)	備	考
306	V F - 2 d	b	b	99	92	54	695	磨石と併用	
307	IC	c	c	101	72	41	300	磨石・敲石と併用	
308	VII E - 6 i	c	c	119	76	47	610	磨石と併用	
309	III D - 3 e	c	c	106	102	54	780	磨石と併用被熱あり	
310	V E - 8 f	c	c	101	90	46	540	磨石と併用被熱あり	

凹石（他機種・併用）観察表－2

図No	出土位置	正面	裏面	長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重(g)	備考
311	VII G - 4 d	b	a	108	86	57	850	磨石と併用
312	VIII E - 2 h	b	b	119	89	68	860	磨石・敲石と併用筒形
313	IV F - 5 b	c	c	107	77	30	350	磨石・敲石と併用
314	II D - P 90	c	c	84	80	45	430	磨石と併用
315	FP47	b	c	110	80	60	800	磨石と併用被熱あり
316	VIII F - 4 a	c	c	123	73	41	580	磨石と併用
317	VII E - 2 b	その他	その他	97	81	62	700	磨石と併用

磨石観察表

図No	出土位置	使用痕				長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重(g)	備考
		a	b	c	d					
318	VI F - 6 f				○	123	113	77	1600	
319	FP51				○	90	66	43	360	
320	VIII E - P 122				○	73	65	60	410	
321	47号住居跡				○	95	83	47	560	
322	II C - P 67				○	82	47	39	240	
323	VI D - 10 h				○	85	71	69	550	
324	VII E - 8 j				○	63	52	48	225	

小形石皿観察表

図No	出土位置	縁形態	凹形態	掃出口	脚	使用痕		長(mm)	幅(mm)	高(mm)	海(mm)	備考
						表	裏					
325	VII F - 8 i	1	2 a			○	○	128	95	26		
326	IX E - 4 f	4	2 b			○	○	98	89	47	70×60	
327	V D - 5 e	3	2 a	○				132	117	38	100×80	
328	VI F - 8 b	3	2 a					116	87	35	85×65	
329	VII F - 6 f	3	2 b			○	○	76	67	30	50×30	
330	IV E - 10 f	3	2 a					73	68	36	45×45	

石皿観察表－1

図No	出土位置	縁形態	凹形態	掃出口	脚	使用痕		長(mm)	幅(mm)	高(mm)	海(mm)	備考
						表	裏					
331	VIII F - 2 e	3	2 b	○長				390	240	100	330×140	
332	VII E - 8 j	1	2 a	○長				390	250	80	360×90	被熱あり
333	VIII E - 7 c	4	2 b	○				390	260	95	360×180	オマル形使い込み穴あり

石皿観察表 - 2

図No	出土位置	縁形態	凹形態	掃出口	脚	使用痕		長(mm)	幅(mm)	高(mm)	海(mm)	備考
						表	裏					
334	IV D - 5 i	3	1 a	○長				330	250	90		被熱あり
335	VE - 6 g	4	2 b					360	200	110		被熱敲台に利用穴4個有
336	VI E - 8 f	3	2 b					370	370	100	220×100	
337	VI E - P 84	3	2 b					530	450	180	大260×230 小 80×70	2カ所に海がある 被熱オマル形裏に敲台穴4個
338	28号住居跡	1	3					420	360	110		
339	VI E - 6 g	3	2 b					330	250	130		被熱あり
340	62号住居跡	4	1 b		○			220	190	90		被熱あり
341	VII G - 5 f	1	2 a					310	300	260		
342	44号住居跡	3	1 a					255	180	85		
343	VII G - 10 d	4	2 b					210	180	65		
344	VIII E - 8 i	4			○			160	150	75		
345	VI F - P 98	2	2 a			○	○	250	160	70		被熱オマル形裏に敲台穴4個
346	VIII F - 2 h	4	2 b	○長				190	140	30		縁と海の間に敲いた穴あり
347	VG - 1 b	3	2 b			○	○	120	150	75		裏に穴5個あり
348	III C - 10 i	1	2 a		○			110	120	70		被熱あり
349	VI E - 9 h	1	3			○	○	180	120	65		

砥石（偏平・楕円形礫）観察表

図No	出土位置	使 用 法						長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重 (g)	備考
		正面	裏面	右面	左面	上面	下面					
350	VE - 7 c	A+B	A+B	B	-	B	-	151	151	47	940	
351	VE - 8 f	B	A	-	-	-	-	115	76	34	275	
352	5号住居跡	B	A	A	-	A	-	74	77	32	235	
353	III D - 6 f	B	B	-	D	-	B	80	72	27	140	
354	VII F - P 59	B	B	-	-	-	-	83	48	8	60	被熱
355	49号住居跡	A+B	B	B	B	-	-	72	50	28	60	

砥石（塊状礫）観察表

図No	出土位置	使 用 法						長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重 (g)	備考
		正面	裏面	右面	左面	上面	下面					
356	III C	A+B	-	-	-	-	-	190	170	95	3350	
357	II D - 9 b	A+C	A	A	A	A+C	-	275	130	98	3700	
358	17号住居跡	B	-	A+B	A	-	-	195	95	90	1270	

## 第3章 中世の中道遺跡

### 1 総説

中道遺跡の中世は、15世紀代の遺構・遺物が遺跡の西側に偏って分布していた。遺構の主なものは、地下式横穴、方形を呈する土壇、井戸、骨を伴う墓などで、出土土器類は珠洲焼や瀬戸焼などの国産陶磁器、青磁・白磁などの中国産陶磁器、灯明皿などのかかわりなどがある。木製品としては椀や皿、それに櫛(箸)などが多く出土している。その中でも毬杖の出土は特に注目される。毬杖は広島県草戸千軒遺跡などから出土している遺物で、正月行事に使われる道具である。新潟県では初の出土である。

### 2 遺構 (第110図)

中世の遺構は、墓としての性格も指摘されている地下式横穴 (SX) が12基、骨と六道銭がまとまっていた墓穴 (G) が15基、三貫梨墳墓の土壇の形態に類似して六道銭を出土した土壇 (GP) が41基、井戸跡 (SE) が3基、建物を推定復原できなかった掘立柱建物の柱穴などがある。墓穴は遺跡のほぼ中央部に存在していたほかは、地下式横穴を中心に遺跡の西側に偏って分布していた。

#### (1) 地下式横穴 (第110～115図)

地下式横穴は、地下にトンネル式の横穴を掘った遺構で、遺体を安置する墓、あるいは貯蔵の地下倉などの性格が指摘されている。名称は、地下式横穴のほかには地下式壙なども使用されているが、ここでは地下式横穴の名称を使う。

中道の地下式横穴は、平面の形態は羽子板状を呈するものが多く、縦断面は第9号地下式横穴のように羽子板の柄の部分横穴へ下りる入り口のように階段状になり、内部は方形に広がっているものもある。地下式横穴の基本的な形は、第9号がモデルかと思われる。地下式横穴の分布は、半径15mほどの中に12基が環状に位置していた。出土遺物は少ないが、中でも第9号地下式横穴の底部からの鉄製の鍬の刃先は、禪宗の葬送儀礼にある鍬投げとの関連などから注目される。他には15世紀代の珠洲焼が出土している。また、縄文時代の遺物を出土する地下式横穴が多い。

#### ○第2号地下式横穴 (第111図)

位 置：III C-1・2 e~g

形 態：変形長方形

規 模：長軸4.90m×短軸2m、深さ1m

遺 物：凹石2

そ の 他：羽子板状の地下式横穴が南北に2基重なっている可能性もある。

#### ○第3号地下式横穴 (第110図)

位 置：III C-3・4 a・b

形 態：変形長方形

規 模：長軸5m×短軸1.50m、深さ1.2m

遺 物：凹石2・石錘1・砥石1

そ の 他：縄文中期のフラスコ状ピットが近接していた。

○第4号地下式横穴（第111図）

位置：IID-1・2g・h

形態：羽子板状

規模：長軸2.60m×短軸1.60m、深さ0.70m

遺物：なし

その他：2基の地下式横穴が南北に重なっている。

○第5号地下式横穴（第112図）

位置：ID-10b・c、IID-1b・c

形態：羽子板状

規模：長軸3.40m×短軸1.80m、深さ1.10m

遺物：石器の剥片

その他：平面はきれいな羽子板状を呈している。

○第6号地下式横穴（第112図）

位置：ID-8・9c・d

形態：羽子板状

規模：長軸3m×短軸1.90m

遺物：珠洲焼の大甕・壺（123・124）

その他：羽子板の柄に相当する部分が階段状になっており、横穴への入り口かと思われる。この付近で珠洲焼の大甕と壺が出土。大甕の底部が逆さになって壺の上に重なっていた。横穴の底面にはモミガラなどが見られた。

○第7号地下式横穴（第113図）

位置：IID-2・3d・e

形態：羽子板状（横穴部は円形）

規模：直径1.50m、深さ0.70m

遺物：珠洲焼（134）

その他：小形の地下式横穴で、入り口に相当する部分に珠洲焼の鉢の底部が位置していた。

○第8号地下式横穴（第113図）

位置：IID-5～7j、IIE-5～7a

形態：羽子板状（横穴部は円形）

規模：長軸2.50m×短軸2m、深さ1m

遺物：珠洲焼（115）

その他：横穴へ降りる部分が階段状になっている。

○第9号地下式横穴（第114図）

位置：IID-9・10h～j

形態：羽子板状

規模：長軸3.70m×短軸1.80m、深さ1.20m

遺物：鉄製の鍬（126）

その他：覆土の上部が黒色土と地山の黄褐色土とが入り混じったマーブル状で、中道の地下式横穴では



唯一地山面で確認されたものである。底面より差し込み式の鍬の刃先（鉄製）が出土した。

○第10号地下式横穴（第114図）

位置：IID-2・3j、IIE-2・3a・b

形態：羽子板状

規模：長軸4.20m×短軸2m、深さ0.80m

遺物：凹石2・打製石斧1

その他：入り口相当部分に別の穴が掘り込まれており、入り口の状況が階段状であるかの確認はできなかった。

○第11号地下式横穴（第115図）

位置：IIC-1・2c・d

形態：羽子板状

規模：長軸1.80m×短軸1.20m、深さ0.75m

遺物：石皿1

その他：地山面の平面形は方形であるが、基底部は羽子板状を呈している。

○第12号地下式横穴（第115図）

位置：ID-8~10e・f

形態：羽子板状

規模：長軸2.40m×短軸1.90m、深さ0.90m

遺物：磨製石斧1

その他：横穴部は円形に広がっている。

(2) 墓穴（写真42）

VIIIの黒色土中に骨と六道銭、もしくは骨と六道銭だけがまとまっていた箇所が15カ所あった。遺構の形態は不明であるが、これを墓穴とする。六道銭は開元通宝（621年初鑄）から永樂通宝（1408年初鑄）までの渡来銭である。次に骨と六道銭との関係を示す表を掲げる。

番号	骨	六道銭	番号	骨	六道銭	番号	骨	六道銭	番号	骨	六道銭	番号	骨	六道銭
G1	○	5枚	G2	○	—	G3	○	—	G4	○	—	G5	○	1枚
G6	○	—	G7	○	1枚	G8	○	1枚	G9	○	—	G10	—	7枚
G11	—	1枚	G12	—	7枚	G13	—	6枚	G14	—	6枚	G15	○	6枚

(3) 土壌（第116~124図）

主に方形の箱形を呈する土壌で、形態的には中道から約500mほど西にある三貫梨墳墓（駒形1986年）で土葬の人骨が埋葬されていた土壌に類似していることから、性格的には墓の可能性が高い土壌である。六道銭を埋納することも共通している。分布は、地下式横穴と同じ遺跡の西側に偏り、地下式横穴が分布する内側に位置していることが多い。遺物は六道銭のほかには珠洲焼などが出土している。縄文集落跡の上に土壌が掘り込まれていることから縄文時代の遺物も多く混入していた。

中世土壙一覧表

番号	位 置	番号	平面形態	平面規模(m)	深(cm)	遺 物	備 考
1号	IIIB-1g	122	楕円形	2.20×1.30	75	縄文土器・凹石	2基の土壙
2号	IIIC-6d	122	楕円形	2.00×1.40	55	なし	
3号	IIID-10h・i	122	円形	直径1.30	45	なし	
4号	IIID-6b・c	122	長方形	2.20×1.00	35	なし	
5号	IIID-3b・c	122	円形	直径1.30	30	石錘・敲石	
6号	IIID-2a	122	楕円形	1.50×1.15	40	なし	
7号	IVD-8・9j IVE-8・9a	123	不正円形	直径1.30	30	石錘1	
8号	IVE-7a	123	楕円形	1.70×1.15	30	なし	
9号	IIIC-4a	123	方形	一辺1.60	20	なし	
10号	IIIC-4d	123	円形	直径1.00	30	なし	
11号	IIIC-4・5d	123	不正円形	直径1.20	30	なし	
12号	IIIC-4・5e・f	123	円形	直径1.50	30	なし	
13号	IIIC-5・6f	124	不正円形	1.30×1.00	20	なし	
14号	IIIC-3e・f	124	円形	直径1.80	40	なし	
16号	IC-10j ID-10a	124	三角形?	3.00×2.20	40	渡来銭	六道銭
17号	IIIC-2・3j	125	長方形	1.70×1.30	20	珠洲焼	
18号	IIIC-3j IID-3a	125	長方形	1.80×1.70	20	砥石	
19号	IID-5a	125	楕円形	2.90×2.50	30	珠洲焼・砥石 打製石斧・石鏃	浅いピット
22号	IIIC-4・5j IID-4・5a	126	長方形	2.10×1.20	40	珠洲焼・打製石 斧	
23号	IID-6a・b	126	長方形	2.10×1.80	40	珠洲焼・凹石	
25号	IID-8・9b・c	127	不正円形	直径2.80	40	珠洲焼	複数の土壙
26号	IID-10b	127	円形	直径1.00	60	なし	
27号	IIID-1b	127	円形	直径1.00	30	磨石	
28号	IIID-1c・d	127	円形	直径1.24	30	石皿	
29号	IID-9g	127	長方形	1.80×1.00	40	なし	
30号	IID-9c	128	楕円形	1.30×0.80	30	なし	
31号	IID-7d・e	128	長方形	2.20×1.20	50	珠洲焼・凹石	
32号	IID-6h・j	128	円形	直径1.60	40	珠洲焼	
33号	IID-5h	128	長方形	2.30×1.00	20	珠洲焼	
34号	IID-9・10e	128	楕円形	1.00×0.75	30	なし	

中世土壙一覧表-2

番号	位 置	番号	平面形態	平面規模 (m)	深 (cm)	遺 物	備 考
35号	ID-9h・10i	128	円 形	直径1.10	30	なし	
37号	IID-4f・g	129	長 方 形	2.10×1.70	40	なし	
38号	IID-7・8h	129	円 形	直径0.80	35	珠洲焼	
39号	IE-10b・c IIE-1c	129	台 形	2.30×2.00	70	なし	
40号	IID-7f・8f・g	130	長 方 形	2.80×1.20	90	なし	
42号	VF-9・10d -10e	130	円 形	直径1.60	30	なし	

○第41号土壙 (第124図)

位 置：IE-10a・b、平面形態：長方形、規模：長軸2.00m×短軸1.60m、深さ30cm、遺物：珠洲焼  
そ の 他：炭化米が焼土や炭化材などと出土。貯蔵用の小屋の可能性もある。南辺に杭の痕跡がある。

(4) 井戸跡 (第125図)

3基の井戸跡が確認された。いずれも素掘りの井戸である。

○第1号井戸跡 (第125図)

位 置：VD-5b

平面形態：円形

規 模：直径1m、深さ1.80m

遺 物：縄文土器

そ の 他：第1号井戸跡の周辺には、中世の遺構が確認されていない。

○第2号井戸跡 (第125図)

位 置：IIIC-1a

平面形態：円形

規 模：直径0.70m、深さ2.70m

遺 物：毬杖1 (234)・木製皿 (205) (内外面に黒漆、内面に朱漆で「田」の字が描かれている)・櫛  
(208~212) などの木製品、石錘1・石皿1

そ の 他：第2号井戸跡は、地下式横穴群の南端部に近いところに位置していた。地下式横穴に関する  
井戸と思われる。井戸の内部からは毬杖などの木製品が多数出土。

○第3号井戸跡 (第125図)

位 置：IID-4e

平面形態：円形 (確認面は長方形であるが、井戸の内部は円形を呈している)

規 模：直径0.90m、深さ1.50m

遺 物：珠洲焼・木製椀 (204)・木製品

そ の 他：第2号と同様に、中世の地下式横穴群や掘立柱穴が群集している地域の西側に位置していた。

### 3 遺物 (第126～135図、写真44～48)

中世の遺物としては、船載・国産陶磁器類、土器、木製品、石製品、鉄製品、銭貨がある。

中道遺跡では、古代以降の遺物 (土器・陶磁器類) が破片資料で1,405点出土した。内訳は古代 (21点)、中世 (1,180点)、近世以降 (204点) である。なお、ここでは古代、近世以降の遺物もあわせて図示した。

#### (1) 中世以前の遺物 (第126図1～13)

須恵器の甕 (7点)・小甕 (1点)・坏 (2点)・小壺 (2点)・土師器の坏 (9点) が出土した。出土地点は発掘調査区の南西に偏る傾向があるが、特に集中地点はなく、破片が単独で出土した。なお、中道では採集資料として、凸面に縄目のタタキ痕、凹面に布目圧痕のある瓦破片が報告されている (長岡市1992) が、今回の調査では同種の資料は出土しなかった。

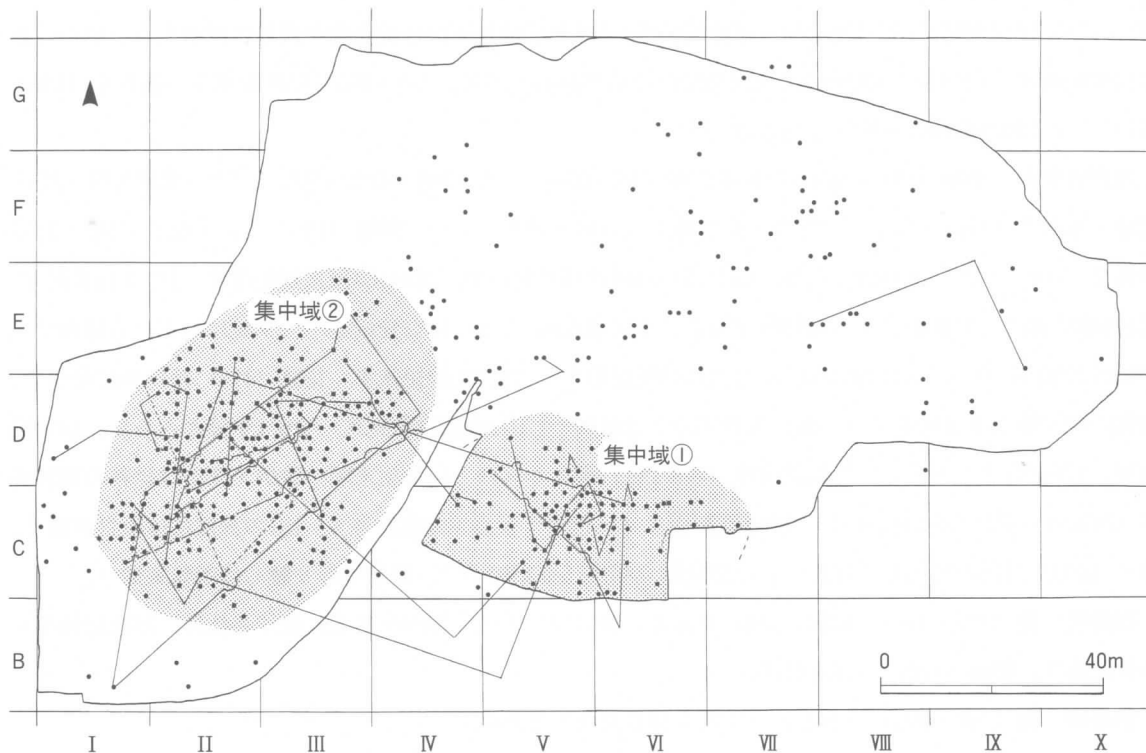
須恵器の甕 (1～3・5・6)・小甕 (4)・坏 (7・8)・小壺 (9・10) のうち、1の内面には炭化物、9の内面には漆が付着している。5の内面には菊花(車輪)文の叩き目がある。また、土師器の坏(11～13)のうち、11・13の底部の切り離しは回転糸切りで、12は内黒である。いずれも9世紀中頃から後半に位置づけられる。

#### (2) 中世の遺物 (第126～135図、写真44～48)

船載陶磁器では青磁 (99点)・白磁 (19点)・染付 (26点)・褐釉壺 (3点)・中国天目 (11点)・青白磁 (2点)、国産土器・陶磁器ではかわらけ [土師質土器皿] (51点)・瓦質土器 (20点)・珠洲焼 (811点)・瀬戸美濃焼 (86点)・越前焼 (45点)・信楽焼 (7点)、木製品 (44点)、石製品 (22点)、鉄製品 (3点)、銭貨 (68点) がある。出土地点は、発掘調査区の南端と南西端付近の二つの範囲に集中する。

#### ①船載陶磁器

青磁 碗 (14～30)、四耳壺 (31～34)、皿 (35・36)、盤 (37)、香炉 (38)、花瓶 (39)、花生がある。



第5図 中世遺物の分布状況及び接合関係

碗の製作年代は、13世紀末～14世紀前半（14・22・24・30）、14世紀末～15世紀初頭（17・18・23・26～29）、15世紀初頭（15・16・19・20・25）、15世紀中頃（21）。15・25には破断面に黒色漆による補修痕が残る。四耳壺はいずれも14世紀代。31～34は花生の可能性もある。皿（35）は12世紀後半～13世紀代で、龍泉窯系。36は14世紀中頃で、同安窯系か。盤（37）は13世紀末～14世紀前半で、破断面に黒色漆による補修痕が残る。香炉（15）・花瓶（39）は15世紀代。

白磁 皿（40～47）がある。40～44・47は15世紀前半。45・46の端反皿は15世紀後半～16世紀。

染付 碗（48～52・55）と皿（53・54・57～61）がある。いずれも15世紀後半～16世紀代の所産であるが、一部は17世紀代まで下るものとみられる。

褐釉壺 62は中国南部雜窯産の壺とみられる。

中国天目 63～66は中国天目で、いずれも15世紀代。

青白磁 67・68はいずれも香炉の破片とみられる。

## ②国産土器・陶磁器

かわらけ 69～84はいずれも内・外面に炭化物和油分が付着する灯明皿。79～83は食膳具。底部が残る個体をみると、いずれも切り離しは回転糸切り。製作年代はいずれも15世紀後半～16世紀。

瓦質土器 土風呂（85～87）・播鉢（87～88）がある。土風呂（85）は内面に巴文、外面に雷文が押印され、86の外面は雷文である。播鉢（87）の破断面には黒色漆による補修痕が残る。

珠洲焼 甕（91～103・123）・壺T種（104～106・111～119）・壺または瓶子（107～110）・壺R種（120～122・124）・播鉢（125・127～155）・播粉木（156・157）がある。91は13世紀。甕（92・93）は14世紀で、93の体部外面にはスタンプ文がある。94～98は14～15世紀前半。99～101は15世紀前半。102は15世紀後半。103は15世紀代。壺T種はいずれも15世紀代。壺T種（104）の体部外面には線刻、105にはスタンプ文がある。壺または瓶子は、いずれも15世紀代。壺R種は124が13世紀末～14世紀で、ほかは15世紀代。播鉢（125・127～134）は14世紀。135・136は14～15世紀前半。136の体部外面には炭化物が顕著に付着する。137～149は15世紀前半。146・147の破断面には黒色漆による補修痕が残る。150～155は15世紀後半。播粉木（156・157）はすり鉢の破損片を転用したもの。

瀬戸美濃焼 平碗（158～166）・平底末広碗（167・168）・小皿（169～172）・花瓶（173）・瀬戸天目（174・175）・水滴？（176）・合子？（177）・広口壺？（178）・香炉（179）・卸皿（180～182）・瓶子（183～185）がある。平碗（158）は14世紀前半。159・161～163は15世紀前半。160・164は15世紀後半。166は14世紀末。164の破断面には黒色漆による補修痕が残る。平底末広碗（168）は14世紀後半。小皿はいずれも緑釉で、169は14世紀前半。170は14世紀後半。171は15世紀前半。172は15世紀後半。花瓶（173）は14世紀後半で、底部の切り離しは回転糸切り。瀬戸天目（174）は鉄釉。175の内面は鉄化粧。176は水滴とみられ、14世紀後半。177は合子とみられ、15世紀後半。178は広口壺とみられ、14世紀末頃。香炉（179）は緑釉の筒形香炉。卸皿はいずれも14世紀後半。180の破断面には黒色漆による補修痕が残る。181の底部には板目が残る。瓶子（183）は14世紀前半。184は14～15世紀。185は15世紀後半で、底部の切り離しは回転糸切り。

越前焼 甕（186～188）・播鉢（189）がある。甕にはいずれも押印がある。製作年代は、15世紀後半～16世紀前半。播鉢（189）は16世紀代。

信楽焼 甕（190～193）がある。いずれも16世紀代と思われる。

## ③木製品

盆（201～203）・椀（204）・小皿（205・206）・櫛（207）・箸または斎串（208～212）・曲物（213～215）・

加工痕のある木片 (218~228・235~237)・折敷 (229~232)・人形 (233)・毬杖 (234) がある。盆 (201) は円形盆。202・203は同一個体か。ともに内外面に黒色漆が塗布され、円形のくぼみをもつ。椀 (204) は内外面に黒色漆が塗布され、見込みには赤色漆で文様が描かれている。小皿 (205) は底部外面を除いて黒色漆が塗布され、見込みには赤色漆で「田」字が描かれている。205・206はともにロクロ引きによる成形。櫛 (207) は幅広の横櫛。すき櫛の類か。漆の塗布は認められない。208~212は櫛または斎串で、両端に削痕がある。材質は杉材。曲物 (213) は底板で、片面には炭化物の付着が顕著である。214・215は蓋板で、中央部に一孔がある。214は内外面とも鉋による削痕が顕著である。216~228・235~237は加工痕がある木片で、235の上下両端は面取りされ、237の下端は削痕が顕著である。219の下端には刃物痕が残り、折敷の側面を止める部材の可能性もある。また、221~223の下端は尖るところから、箸または斎串か。225も断面の形状から箸または斎串の一部ともみられる。229~232は折敷の側面を止める部材。折部には刃物痕がある。それぞれ数箇所鉄釘または木釘による貫通孔が残る。233は人形で、右腕から右脚部分と左脚下端を欠損している。折り取られた痕跡は明瞭でない。顔は逆三角形の形状に削り作られ、目・鼻・口・耳など顔面各部の表現はない。材質は杉材。毬杖 (234) の上部は欠損し、下部の両端は刃物によって削り整えられている。被熱による炭化部分が各所にみられる。

#### ④石製品

砥石 (238~247) がある。平面および断面形態には、摺面を除いて加工がみられないもの (238)、断面が厚く長方形または正方形に全体を加工する物 (239・240)、長方形に全体を加工して断面が厚いもの (241)、長方形に全体を加工して断面が薄いもの (242・243)、分銅形の形状に加工されているもの (244・245)、下端が広がる形状のもの (246・247) がある。分銅形および下端が広がる形状のものには大 (244・246) 小 (245・247) がある。形状と摺面との間には、顕著な傾向は認められない。

#### ⑤鉄製品

第9号地下式横穴から出土した鉄製鎌先 (126) がある。室町時代の所産とみられる。

#### ⑥銭貨

開元通宝 (初鑄年621年、唐) 7枚、景德通宝 (〃1004年、北宋) 2枚、祥符元宝 (〃1008年、北宋) 3枚、天禧通宝 (〃1017年、北宋) 3枚、天聖元宝 (〃1023年、北宋) 3枚、皇宋通宝 (〃1039年、北宋) 9枚、治平元宝 (〃1064年、北宋) 2枚、熙寧元宝 (〃1068年、北宋) 7枚、元豊通宝 (〃1078年、北宋) 7枚、元祐通宝 (〃1086年、北宋) 9枚、紹聖元宝 (〃1094年、北宋) 1枚、聖宋元宝 (〃1101年、北宋) 2枚、大観通宝 (〃1107年、北宋) 1枚、政和通宝 (〃1111年、北宋) 2枚、嘉定通宝 (〃1208年、南宋) 1枚、洪武通宝 (〃1368年、明) 4枚、永楽通宝 (1408年、明) 5枚、寛永通宝10枚、不明3枚の計81枚が出土した。ここでは248~265に一部を図示した。

#### (3) 近世以降の遺物 (第133・134図、写真47・48)

近世以降の遺物は204点ある。ここでは唐津焼を図示した。

唐津焼 碗 (195)・皿 (196~198・200・201)・灯明皿 (199) がある。皿 (198) には砂目が残る。いずれも16~17世紀代の所産とみられる。

## 第4章 ま と め

### I 縄文集落の変遷

信濃川右岸の東山沿いで、栖吉川沿岸の扇状地に突き出た舌状台地の中道に集落を作り始めたのは、縄文時代中期中ごろからで、その後に数回の断絶期を挟んで晩期中ごろまで集落を営んでいる。中道の集落は弓なりになった舌状台地に、竪穴住居を約70軒、掘立柱建物を3棟以上建て替えている。主な時期は、中期中葉の中道II期（大木8b式段階）と、中期後葉のIII期（大木9～10式段階）、後期前葉のIV期（三十稲場式段階）、それに晩期中葉の中道VII期（大洞C式段階）の4時期である。そのうち、竪穴住居跡の覆土や床面出土の土器、炉跡に組み込まれた土器片や埋甕などから時期が特定できたのは、44軒の住居跡である。次に時期が特定できた住居跡の形態・規模などの一覧を掲げる。なお、ここに掲げた住居跡は、竪穴住居跡のほかに地山直上や黒色土中での炉跡も含んでいる。

#### ①中道I期の住居跡（1軒）

番号	形態	規模(m)	炉跡	備考
44号	円形	4.4	長方形石組炉	

#### ②中道II期の住居跡（16軒）

番号	形態	規模(m)	炉跡	備考	番号	形態	規模(m)	炉跡	備考
24号	楕円	?	方形石組炉		11号	不明	?	長方形石組炉	炉跡のみ
15号	不明	?	長方形石組炉	炉跡のみ	16号	円形	5.6	方形石組炉	
17号	円形	5.6×6.4	長方形石組炉		23号	不明	?	長方形石組炉	炉跡のみ
26号	円形	6.5	長方形石組炉		29号	不明	?	長方形石組炉	炉跡のみ
30号	不明	?	楕円形石組炉	炉跡のみ	38号	?	?	長方形石組炉	
35号	円形	5.5	長方形石組炉		36号	円形	5	方形石組炉	
41号	不明	?	長方形石組炉		1号	不明	不明	長方形石組炉	炉跡のみ
52号	不明	?	楕円形石組炉		49号	円?	5?	長方形石組炉	H31重複

#### ③中道III期の住居跡（15軒）

番号	形態	規模(m)	炉跡	備考	番号	形態	規模(m)	炉跡	備考
7号	不明	?	複式炉	炉跡のみ	9号	不明	?	複式炉	炉跡のみ
12号	不明	?	長方形石組炉	炉跡のみ	20号	方形	8×3	長方形石組炉	
21号	方形	8×3.6	長方形石組炉		5号	方形	9.6×3.2	長方形石組炉	
42号	不明	?	長方形石組炉	炉跡のみ	49号	円?	5?	長方形石組炉	H31重複
34号	楕円	6	複式炉						
45号	方形	?×3.5	複式炉	重複 A	46号	楕円	?×3	複式炉	重複 A
47号	方形	?	長方形地床炉	重複 B	48号	方形	?	複式炉	重複 B
50号	方形	?	石組炉	重複 B	51号	方形	7×3.65	不明	重複 B

#### ④中道IV期の住居跡（2軒）

番号	形態	規模(m)	炉跡	備考	番号	形態	規模(m)	炉跡	備考
31号	円形	5.2	炉跡不明		37号	円形	4.1	楕円形地床炉	

⑤中道Ⅴ期の住居跡（1軒）

番号	形態	規模(m)	炉跡	備考
25号	不明	?	長方形石組炉	炉跡のみ

⑥中道Ⅶ期の住居跡（9軒）

番号	形態	規模(m)	炉跡	備考	番号	形態	規模(m)	炉跡	備考
22号	円形	6.8	円形石組炉		61号	円形	9.5	楕円形地床炉	重複 C
62号	円形	12	不明	重複 C	71号	円形	11	不明	重複 C
63号	円形	8.7	不明	重複 D	69号	円形	5.35	円形石組炉	重複 D
70号	円形	4.1	不明	重複 D	72号	円形	6.5	楕円形地床炉	重複 D
66号	円形	10	円形地床炉						

上記の表から平面形態と規模及び炉跡の形態を中心に、各時期ごとの住居跡の状況をまとめてみる。中期中葉後半のⅡ期は、直径5～6.5mの円形で、長方形石組炉の竪穴住居跡が主である。次のⅢ期に入ると、Ⅱ期に存在しなかった方形の竪穴住居が増加し、3×8mの方形と直径5～6mの楕円形の二形態となり、炉跡は前の段階にはなかった複式炉が出現し、長方形石組炉と共存するようになる。後期に入ると、竪穴住居は直径4mほどの円形で、小型になる。また、炉跡は地床炉と方形石組炉があるが、これも中期に比べて小型である。晩期になると竪穴住居跡はすべて円形であるが、10mを超える大型の住居も存在するようになるなど、中期・後期に比べて概して大型化の傾向にある。炉跡は円形の石組炉か地床炉である。

これら4時期の住居の位置は、中期中葉のⅡ期が弓なりの集落の南端から北へ向かって並び、中期後葉のⅢ期はⅢDからⅣEにかけてやや弧状に並び、後期前葉のⅣ期は集落域北端の竪穴住居跡1軒と掘立柱建物跡がEラインに位置し、晩期中葉のⅦ期は東側にかたまって存在するほか、VDに1軒だけ存在している。このことから、中道において、遺跡の南側から集落の原型である住居が建てられ、時間が下るにつれて徐々に北側に移り、最終的には東側へと集落の位置が移動している。その中においても、特に中期後葉の中道Ⅲ期と晩期中葉の中道Ⅶ期の竪穴住居跡は、Ⅲ期で第45号と第46号住居跡のグループ（重複A）と第47号・第48号・第50号・第51号住居跡グループ（重複B）、Ⅶ期で第61号・第62号・第71号住居跡グループ（重複C）、それに第63号・第69号・第70号・第72号住居跡（重複D）のように、2～4軒の住居跡が重複している例が多く、同じ箇所に住まいを建て替えていると言えよう。

縄文時代の集落は、特に中期から後期にかけての集落の形態としては、遺構が存在しない広場を中心に、同心円状に竪穴住居跡や掘立柱建物跡などの住まい、墓と考えられる土壇、それにフラスコ状ピットなどの貯蔵穴が配される環状集落や、馬蹄形集落の存在が知られている。長岡でも信濃川を挟んで対岸の岩野原遺跡の中期は環状に、後期は馬蹄形に集落が形成されている例がある。それに対し、中道の場合は弓なりに南から北にかけて中期の住居跡、中央部に後期の住居跡、晩期には主に遺跡の東端に住居が建ち並び、その結果として弓なりの集落が形成された。中道の集落は、南側に栖吉川が流れ、北側は埋没した沢に囲まれた扇状地に突き出た舌状台地と言う地形の制約を受けて、各時期ごとに集落の位置を移動しながら展開している。岩野原が環状（中期）と馬蹄形（後期）に集落が形成されていると言っても、中期は段丘崖に沿って、後期は段丘崖の一端を開口部にして二種類の形態の集落が展開しているのであって、これも地形の制約を受けている。このことから、少なくとも長岡で発掘調査された岩野原と中道の縄文集落は、いずれも地形の制約を巧みに取り入れて集落を形成していたと考えられる。



## 2 縄文土器の特色と変遷

発掘調査区のほぼ全域にわたって多量の縄文土器が出土した。ここでは第2章3(1)の記載に基づき、設定した時期区分にみられる土器群の特色と変遷について総括する。時期区分は原則として遺構出土資料を基軸に設定し、大木式の各型式や三十稲場式については丹羽(1989)・田中(1989・1990)等の編年観を参考にした。

中道Ⅰ期 遺跡では最も古い時期で、中期中葉の大木8a式段階に相当する。住居跡は明瞭でないが、フラスコ状ピットではFP18・35～36・46・50・62など、その他のピットではIII D・P33やIVE・P198などから出土している。包含層ではⅡ～Ⅳ・D～F区に多く、主として中央部から北西にかけての範囲である。

土器群の系統には、いわゆる火焰型及び王冠型土器などの在地系のほか、東北系の大木8a式、中部高地系の焼町式、北陸系の上山田・天神山式が認められ、深鉢を主として浅鉢や台付鉢を伴う。火焰型及び王冠型土器の文様には、頸部のくびれがなく口縁部と胴部の文様が連続する古い様相(558)と、胴部が細身となり口縁部の鶏頭冠が広がる新しい様相(460・557)がみられる。560の浅鉢などは火焰型や王冠型に伴う在地系であろう。大木8a式の深鉢は4単位の波状口縁で、斜行縄文を地紋に竹管沈線の区画文様や鋸歯状沈線を施す(446・566等)。焼町式(158・428等)と上山田・天神山式は量的には少ないが、後者には人面突起をもつ台付鉢(556)がみられる。これらの類例は信濃川中流域の諸遺跡で出土しており、長岡では栖吉川対岸の松葉遺跡(小熊・広井1994)、柿町山下遺跡(長岡市1992)、関原町馬高遺跡(長岡市1992)、深沢町岩野原遺跡(駒形・寺崎1981)などがある。なお、松葉遺跡は大木7b～8a式段階の集落跡であり、大木8a式段階に入って中道遺跡に移動した可能性が考えられる。

中道Ⅱ期 中期中葉の大木8b式段階で、古段階(Ⅱa期)と新段階(Ⅱb期)に区分される。

Ⅱa期：第17号住居跡出土の土器群を基準とする。そのほか第35・36・41号住居跡などがまとまっている。フラスコ状ピットではFP37・40・43・57など、その他のピットではIII C・P113、III E・P123などから出土し、包含層ではⅢ～Ⅳ・E～F区に復元個体が多い。

土器群は在地系を主として、東北系の大木8b式古段階を伴う。器種には深鉢のほか浅鉢や台付鉢がみられる。第17号住居跡では火焰型及び王冠型土器は認められない。在地系の特徴的な器形や文様としては次の4類がある。①矢羽状沈線を充填した大振りの渦巻状把手をもち、頸部は無文で胴部には斜行縄文を地紋として竹管沈線で区画文様を描く類(29・30等)。この大振りの把手は火焰型土器の鶏頭冠から変化したと考えられる。②渦巻状突起の小波状口縁または平口縁のキャリパー形で、隆線間に矢羽状沈線を充填する類(567～569等)。頸部から胴部の文様は①と同様の構成となる。浅鉢もある(579)。③波状口縁または口縁部に渦巻状把手をもち、胴部は竹管沈線の区画文様に矢羽状沈線を充填する類(33～35等)。頸部に橋状把手を付けるものもあり、Ⅲb期に続く新しい要素とみられる。④口縁部に無文帯を巡らし、胴部に斜行縄文を地紋として竹管沈線で①・②と共通する区画文様を描く類(32・447)。さらに東北系として、⑤平口縁のキャリパー形で、口縁部に斜行縄文を地紋として竹管沈線の横S字文を描く類(31等)や、⑥口縁部に渦巻状把手をもち、胴部に斜行縄文を地紋として渦巻状や剣先状の沈線区画を施す類(547・580等)がある。典型的な⑤に比べて⑥は在地的に変容している。これらの類例は信濃川中・上流域に広く認められる。長岡周辺では馬高遺跡・岩野原遺跡、見附市羽黒遺跡(寺崎他1982)・耳取遺跡(関1971)などがあり、特に栃尾市栃倉遺跡の第2号住居跡出土資料(寺村他1961)に近い様相を示している。

Ⅱb期：第16号住居跡出土の土器群を基準とする。そのほか第49・52号住居跡、FP64などから出土し、包含層ではⅢ～Ⅳ・E～F区、特にⅣ～Ⅵ・F区に復元個体が多い。

土器群は在地系の深鉢を主とする。その器形には、①口縁部が外反または端部がやや内湾する平口縁の深鉢(22・572～574等)と、②頸部が「く」の字に屈曲し胴部が張る平口縁の深鉢(21・23・577等)がみられる。いずれも渦巻文を組み入れた竹管沈線の区画に矢羽状沈線や縦位の細沈線を加える文様構成で、斜行縄文は用いられていない。胴部の区画文様に横位に展開する部分を組み込んだもの(573)や、頸部に橋状把手をもつもの(23)もある。これらはIIa期の在地系③の特徴を受け継いでいるが、器形や文様構成がやや異なり、縄文が消失して竹管沈線や矢羽状沈線が主体的になる。共伴する異系統その他の土器は不明瞭であるが、本報告では特に第16号住居の一括性を重視して新段階として区別した。類例としては、馬高遺跡、岩野原遺跡、羽黒遺跡、耳取遺跡、栃倉遺跡など長岡周辺の諸遺跡のほか、十日町市笹山遺跡(十日町市1996)など信濃川上流の諸遺跡でも認められる。渦巻文の区画と矢羽状沈線の充填を特徴とするこれらの土器群は、従来「栃倉式」とも呼ばれていた。中部高地の唐草文系土器との関わりを窺わせ(高橋1992)、前段階とあわせて火炎土器様式(小林1988)終末及びそれに後続する在地の種類として位置づけられる可能性がある。

中道III期 中期後葉の大木9～10式段階で、9式段階(IIIa期)と10式段階(IIIb期)に区分される。

IIIa期：第20号住居跡出土の土器群を基準とする。そのほか第34・42・47・48号住居跡などから出土している。なお、本段階以降、フラスコ状ピットからの出土は認められない。

土器群は在地系と東北系を主として北陸系を伴う。器種には深鉢のほか若干の浅鉢がみられる。器形や文様としては次の3類がある。①口縁部を幅広の沈線で区画し、その間に連続した刻目を加える深鉢の類(67等)。在地系で、いわゆる沖ノ原式の範疇に含まれる。②長楕円形や渦巻状の磨消縄文区画をもつ深鉢の類(62・224等)で、東北系の大木9式及びその変容種。有孔罅付土器を含む浅鉢(581)も組成する。③口縁部を横方向の沈線で区画し、その間を貝殻腹縁による櫛歯状連続刺突文を加える深鉢の類(68・150等)。北陸系の串田新式古段階である。第20号住居跡の出土状況から、これら系統を異にする3類が共伴関係にあることが明確になった。①と②の共伴は沖ノ原式の標識である中魚沼郡津南町沖ノ原遺跡の第1号住居跡(江坂・渡辺他1977)で既に知られていたが、信濃川中流域でも①と②が安定し、さらに③が組成すると考えられる。同様の傾向は岩野原遺跡や羽黒遺跡などでも窺うことができる。

IIIb期：第45号住居跡出土の土器群を基準とする。そのほか第34・47・48号住居跡やIIIC・P18などからも出土している。

土器群は在地系と東北系を主とし、深鉢のほか浅鉢を伴う。器形や文様としては、①小波状口縁で口縁部に太沈線と連続刺突を巡らし、波状部に円形貼付文を加える深鉢の類(200)、②斜行縄文を地紋としてJ字状の入り組んだ沈線区画をもつ深鉢の類(205)、③沈線間に連続した刻目を加える深鉢の類(202～203)、④斜行縄文を地紋として縦位の隆帯や長楕円形状の沈線(磨消手法)で文様を区画する深鉢(153・218・445・549)と浅鉢の類(582・583)が認められる。①は在地系で、IVa期最古段階とした隆帯文の土器に関連するとみられる。②の文様は関東系の称名寺式の影響を受けた手法であろう。③は在地系の沖ノ原式、④は東北系の大木10式と考えられるが、いずれもかなり変容している。磨消手法の583には貼瘤文が付けられており、IVa期最古段階に続く要素である。これらの類例は、三十稲場遺跡、岩野原遺跡、羽黒遺跡、三島郡越路町上並松遺跡(中村他1970)、同町多賀屋敷遺跡(駒形他1983、石坂1993)などで出土している。

中道IV期 後期初頭の三十稲場式段階で、古段階(IVa期)と新段階(IVb期)に区分される。

IVa期：第31・37号住居跡、ピットではIIIB・P11、IIIC・P108、IVC・P60、IVD・P7、IVF・P12、VIF・P99、VIIF・P4・P10・P34・P53・P103、VIIE・P2などから出土している。包含層ではIV～VIII・E～Fに復

元個体が多い。

土器群は在地系の三十稲場式古段階及びその直前段階を主とし、深鉢と蓋のほか浅鉢を組成する。その器形や文様としては、①口縁部や胴部に貼瘤文(列)をもつ深鉢の類(588~591)、②口縁部に円形や刺突を加えた隆帯が巡る深鉢の類(592~594)、③4単位の橋状把手をもち、胴部全面を刺突文や縄文で覆う深鉢の類(514・541・544等)、④円形の摘みや橋状把手をもち、刺突文・沈線文・縄文を施す蓋の類(451・540・605等)、⑤縄文や撚糸文を施す波状口縁の浅鉢の類(450)などがみられる。③~⑤が三十稲場式古段階に相当し、①・②は三十稲場式が成立する直前段階に位置づけられる。538・539なども直前段階の所産であろう。類例は三十稲場遺跡、岩野原遺跡、羽黒遺跡、耳取遺跡、上並松遺跡、多賀屋敷遺跡、三島郡三島町根立遺跡(中村1975他)、小千谷市城之腰遺跡(藤巻他1991)などで出土している。

IVb期：土器を伴出する明確な住居跡はない。ピットではVIF・P84、VIII E・P23など、包含層ではIVE・VF区などから出土しているが、IVa期に比べて量的に少ない。

在地系の三十稲場式新段階で、深鉢と蓋が認められる。深鉢は前段階と同様、橋状把手をもち、胴部全面を刺突文や縄文で覆うが、橋状把手は退化して8の字状の捻れた形態となり、胴部には沈線文を加える(595)。また蓋は端部がまくれ上がる形態(508・544・600等)が特徴的で、刺突文・沈線文等は同心円上に施される傾向を示す。類例は三十稲場遺跡、岩野原遺跡、耳取遺跡、根立遺跡などで認められる。

中道V期 後期前葉の南三十稲場式段階である。第25号住居のほか、ピットではVE・P90、VF・P31などから出土している。IV期に比較して出土量はやや少ない。

関東地方の堀之内式の影響を受けた南三十稲場式を主とするが、北陸系も伴う。器種には深鉢のほか、浅鉢や注口土器を組成する。深鉢には口縁部に縁帯文、胴部に集合沈線を施す類(505・617)と、胴部の文様に磨消手法の三角文などを施す類(479~481)があり、後者は新しい様相と考えられる。浅鉢は胴部に入り組んだ集合沈線を描く類(513)で、北陸系の気屋式に比定される。無文の注口土器(458)も同時期の所産であろう。類例は三十稲場遺跡や岩野原遺跡などにみられ、気屋式の浅鉢は近隣の西片貝町西片貝遺跡(長岡市1992)でも出土している。

中道VI期 後期中葉の三仏生式段階に相当する。土器を伴出する明確な住居はない。ピットではVF・P31、VIF・P28など、包含層ではIV~VIII・D~Fに復元個体が多く、特にIVD・VIIF区にまとまっている。

関東地方の加曾利B式の影響を受けた三仏生式で、深鉢のほか浅鉢、壺、注口土器、多孔底土器を組成する。深鉢には口縁部に数段の帯状文を巡らし、その間を短沈線で区切る手法がみられる(618・619)。入り組んだ磨消縄文を施す壺(488・623)などは、加曾利B3式に並行する新しい様相をもつ。浮彫風の入組文様の注口土器(620・621)もこの時期の所産であろう。また無文の多孔底土器(627~630)も同時期の所産と考えられるが、本遺跡で複数の完形・復元個体が出土したことで、皿状、鉢状、注口土器状など多様な形態をもつことが明らかになった。類例は小千谷市三仏生遺跡(中村他1957)のほか、三十稲場遺跡や岩野原遺跡などから出土している。

中道VII期 晩期前葉~後葉の大洞BC~A式段階である。第22・61・63・66号住居跡を中心に、IVF・P154などのピットや住居跡周辺の包含層から出土している。最初頭のB式や最終末のA'式は認められない。

土器群はいずれも東北地方から波及した、いわゆる亀ヶ岡式の範疇に含まれる。器種には深鉢、鉢、浅鉢、壺などがみられる。大洞C1式の類としては、雲形文を施す浅鉢と、列点状の羊歯状文または平行沈線を口縁部に巡らす深鉢や鉢がある(第22号住居出土土器)。大洞C2式の類には、口縁部に眼鏡状浮線文、胴部に平行化した雲形文を施す浅鉢や、縄文・撚糸文を主とする深鉢・鉢が多い(第63号住居出土土器)。ま

た大洞A式の類は工字文を施す深鉢・浅鉢（639等）である。これらの器形や文様は、西津町藤橋遺跡（長岡市1992）や三島郡越路町朝日遺跡（中村他1965）などと共通している。

### 3 中世の集落と遺物

#### (1) 遺構・遺物の内容と年代観

中道遺跡では遺構として、地下式横穴（SX）12基、骨・六道銭をもつ墓穴（G）15基、六道銭をもつ土壙（GP）41基、貯蔵用の小屋？1基、井戸跡（SE）3基と列状の集石遺構、建物跡を構成すると推定される柱穴が多数確認された。また、遺物としては舶載・国産陶磁器類と土器、木製品、石製品、鉄製品、銭貨がある。

遺物は第5図で示したように発掘調査区の①南端と②南西端の二つの範囲に集中する。出土遺物の大半は破片で、復元できる個体はほとんどなかった。また、調査区内では出土層位の上下関係の点で、縄文時代の遺物と中世の遺物が同一レベルから出土することが多く、なかには逆転する箇所も多数見られた。調査前の発掘区は田地で、耕作による層位の移動は大きかったと推定される。ただし、二つの遺物集中域を明治年間の地籍図と対応させると、ほぼ一筆の耕作地（田地）にあたることから、想定される遺物の移動範囲は、ある程度限定できるものとも推定される。そこで、接合した遺物の位置関係をみると、①の範囲では青磁・かわらけ・珠洲焼（甕・播鉢）・瀬戸美濃焼、②の範囲では青磁・中国天目・珠洲焼（壺・播鉢）・瀬戸美濃焼に接合関係がみられ、青磁・珠洲焼（甕・壺）・瀬戸美濃焼には①と②間にも接合する資料がみられた。このことから、①・②の遺物集中域はある程度遺物が使用・廃棄された原位置を反映し、かつ、①・②はほぼ同時期に機能した生活域であったと推定される。

遺物の点では、製作年代から使用（伝世）期間・廃棄期間の幅が小さいと考えられる珠洲焼播鉢をみると、14世紀から15世紀後半となり、14世紀から15世紀前半代の遺物量が多い。また、遺構の点では珠洲焼甕・壺R種・播鉢、穀殻などが出土した第6号地下式横穴をみると、珠洲焼は13世紀末から14世紀代の所産であることから、中世の中道は14世紀から15世紀代が中心時期と推定できる。

#### (2) 集落の性格

中道では、特徴的な遺構として地下式横穴がある。県内では、柏崎市岩野遺跡の「地下式壙」2基（岡本1980）や和島村奈良崎遺跡の「地下式横穴」3基（（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団1993）などの類例があるが、中道で検出された地下式横穴は12基と他を凌駕している。

「地下式横穴」は「地下式壙」などとも呼称され、全国で千をはるかに超える例が確認されている。同種の遺構は一般的に、「地平面下に竪坑を掘り下げてこれを入り口部とし、さらに竪坑下部から横へ掘り下げて本体である地下室を築いた遺構」と規定されている（中田1977）。盛行時期は大略14～15世紀で、とりわけ関東地方での分布が密である。性格については、墳墓説、貯蔵庫説が代表的で、より積極的な説としては、禅宗系寺院との近接例が多いことから禅宗の強い影響を考える説や、鎌倉へと通じる街道との位置関係から中世武士団、とりわけ関東武士団の関与と結び付ける説などがある（江崎1985、川上1989、高尾1991、村山・長沼1991）。後述するように、中道が所在する栖吉は、諸山の格式をもち、越後守護上杉氏の祈願所の一つであった臨濟宗普濟寺と、関東出身の古志郡司長尾氏との関わりの深い地域であり、集落の性格を考える上で注目される。

中道では、第9号地下式横穴から鉄製鍬先が出土した。鍬については、禅宗の葬送儀式で行われる死霊を追い払う呪術として「鍬投げ」という行為がある（五来1985・94）。管見では同種の遺構からの検出例は無く、本例は中世墳墓の研究に前進を与えるものとして評価できる。いずれにしても「地下式横穴」が集

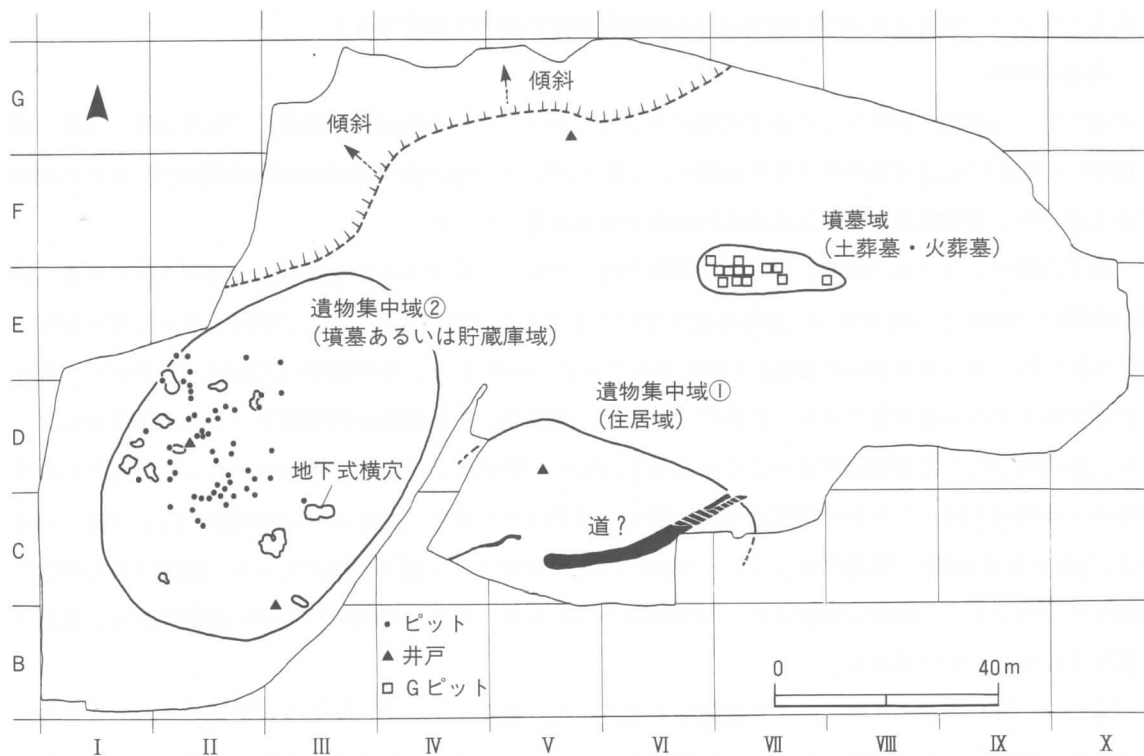
中する前述の遺物集中域②は、墳墓域あるいは貯蔵庫域かの峻別は別として、集落内での特殊な機能域と考えられる。

次に、前述の集中域①・②における出土遺物の内容をみると、特徴的な点を見いだすことができる。まず集中域①では、青磁の香炉・花瓶、褐釉壺、青白磁、瀬戸美濃焼では花瓶・瀬戸天目・水滴？・香炉を除く、すべての器種が確認できる。特に瀬戸美濃焼が集中し、珠洲焼甕・播鉢とかわらけも一定量あり、土風呂4点のうち3点、さらには中道で確認された珠洲焼播鉢破損片を転用した播粉木2点はいずれも集中域①で確認されている。また、第1号井戸、古銭（開元通宝1・天聖元宝1・皇宋通宝1・元祐通宝？1）の単独出土もある。したがって、集中域①は住居域であった可能性が高い。

集中域②では青磁の碗・四耳壺・皿・盤、褐釉壺、中国天目碗、瀬戸美濃焼の平碗・平底末広碗・小皿・花瓶・水滴？・広口壺・香炉・瓶子などの器種が見られる。かわらけは僅少で、生活用具である瀬戸美濃焼の卸皿がないなど、住居域という性格は弱い。また、集中域①にはない褐釉壺、瀬戸美濃焼の花瓶・香炉もみられる。中国天目碗は5点のうち4点と集中し、珠洲焼は甕・壺・播鉢のいずれも発掘調査域の中ではもっとも多量にあり、中でも壺が集中する。

通常、仏事具としての使用頻度が高い花瓶や香炉がみられることは、集中域②が墓域として機能したことを予想させる。青磁の香炉・花生はVIII区付近でも確認されているが、同区は骨・六道銭をもつ墓穴（G）の分布域であり、集中域②の場の機能を考える上で有効である。また、前述のとおり集中域②では中国天目碗の出土頻度が高いが、VIII区では瀬戸天目碗10点のうち7点が集中する。天目碗が茶器としてではなく、仏事具として使用されたとすれば、こうした分布状況は示唆的である。

一方で、集中域②には珠洲焼の甕・壺・播鉢も集中している。壺と播鉢については両者が骨蔵器として使用されたことも想定できるが、明瞭な遺構に伴う例がほとんどないため断定はできない。甕・壺につい



第6図 中世の集落概念図

では集中域②が貯蔵庫域として機能したことも予想させる。第6号地下式横穴から靱殻が出土したことも注意を要する。ただし、集中域②では井戸跡2基と、建物跡を構成すると推定される柱穴が多数確認されていること、越前焼の甕が集中していることから、「地下式横穴」の造営前後で、墳墓あるいは貯蔵庫とは異なる場の機能をもった可能性がある。この点、遺物包含層の層厚が薄く分層が著しく困難であったこと、遺構と遺物の供伴関係を把握できる例がほとんどなかったことから判然としないが、場の機能の転換があったことを想定しておきたい。

以上をふまえて想定した集落概念図が第6図である。調査区の北側はなだらかに傾斜し、遺構・遺物もほとんど確認できないことから集落域の北限は、ほぼ調査区の範囲内に収まっているものと考えられる。また、調査区の南から南西にかけては、現地形の観察で平坦面が続いていることから、集落域がさらに広がっていた可能性を残している。したがって、集落の性格を位置づけることには若干の限界はあるが、中道の中世集落としての性格は、ほぼ住居域と北方の墳墓域、西方の墳墓域あるいは貯蔵庫域から構成されていたものと想定される。そうした中で遺物の点で、青磁四耳壺や褐釉壺、多様かつ優品をもつ内容からみて、上層農民層以上の居住者の存在を想定することが可能である。ただし、かわらけの総体量がきわめて少ない状況は注目される。これは漆椀などの木製容器を使用する頻度が高かったためか、饗応の場としての機能が薄かったためかなど、種々の想定が可能であるが、ここでは将来的な課題としておきたい。

### (3) 中世の栖吉と中道遺跡

栖吉地区では1985年以後、三貫梨遺跡（15世紀初頭～16世紀末）・松葉遺跡（14～16世紀）・下道遺跡（14世紀半ば、備蓄銭埋納遺跡）の発掘調査が行われ、中世期の考古資料が飛躍的に蓄積された。中道を含めて4つの遺跡は、ほぼ同時期に栖吉川の沿岸に位置し、古志郡司長尾氏が栖吉に入部した時期と推定される15世紀末から16世紀初頭以前に当該地域で営まれた集落様相を考える上で重要な遺跡と評価できる。

三貫梨、松葉、中道とも住居域と墳墓域から構成され、三貫梨では約90m四方と見られる空堀に囲まれた、居館あるいは寺院とみられる区画をもつ。また、松葉では刀・脇差などの刀剣類が出土している。3つの遺跡を比較すると、遺物の点で松葉・中道は、三貫梨より相対的に古い様相が看取できる。

墳墓の点では、三貫梨では土葬骨（生骨）埋葬墓21基・火葬骨埋葬墓15基・不明47基、松葉では火葬骨埋葬墓6基・不明11基が確認されている。中道では墓穴（G）と土壙（GP）をあわせると56基となり、三貫梨に次いで墳墓数が多い。松葉では墳墓配置から家族墓の様相が強いのに対して、三貫梨・中道では複数の家族墓からなる共同墓地という様相が想定される（広井1997）。

現在、古志郡司長尾氏の拠点栖吉城の眼下に、曹洞宗普濟寺は所在する。普濟寺は「扶桑五山記」に「諸山 越後州 栖吉山普濟禪寺、開山大用和上、東福派」とみえ、「諸山」の格式を持つ越後では屈指の名刹であったことが知られる。また、米沢藩上杉氏に伝来された「上杉家文書」から延徳4年（1492）頃には越後守護上杉氏の祈願所であったことが判明している。

一方、「明治16年寺院・仏堂明細帳」（長岡市1989）によると、普濟寺の寺歴については「創立年月不詳、開基賢翁ニテ、初メ天台宗大行寺ト号シ、字三貫ニ在リ、天文二年金原大膳中興して、当宗ニ改メ、長翁ヲ中興開山トス、同五年当地に移ス」とある。また、当地域に関わる野史類も同様に、所在地不明で「天台宗大行寺」→字三貫（俗称「三貫（官）梨」、三貫梨の所在地、三貫梨遺跡は字清水田に所在する）→現在地という変遷をたどったことが伝えられている。前述のように、三貫梨は、普濟寺の故地と伝えられるにふさわしい内容が確認された。こうした状況から、普濟寺の所在地の変遷は、栖吉地区の中世史のなかでとりわけ注目されてきた。そこで、普濟寺・古志長尾氏・中道の存続時期をまとめると次表となる。

中世の栖吉をめぐるうごき

和 暦 (西 暦)	普 濟 寺	古 志 長 尾	中道・三貫梨・松葉
康永年中 (1342 ~45)	住職は別伝妙胤と伝えられる		
享徳 4 (1455)		上野国へ出陣	(若干の間隙)
寛正 2 (1461)	住職に令誉が任命		遺物出土量の安定 【盛行期】
寛正 5 (1464)	住職に梵什が任命 安定期		
文明 2 (1470) 頃		長尾孝景家督相続	生活品の廃棄 集落域の再編成? 【衰退・廃絶期】
文明 15 (1483 ~19 ~87)		長尾・飯沼氏等知行 検知帳が作成される 荒廃期	
文明 18 (1486)	住職不在		
長享 2 (1488)	住職に玄頤が任命 一時的復興		
延徳 1 (1489)		守護代長尾能景から 出陣要請	
延徳 4 (1492)		普濟寺と長尾孝景の対立	
明応 4 (1495)		長尾房景家督相続	
永正 1 (1504)		普濟寺と長尾房景の対立	
永正 4 ~ (1507~)		この頃、栖吉に入部 永正の乱始まる	
永正 10 (1519)		越中に出陣	

中道・三貫梨・松葉遺跡とも14~15世紀に中心時期があり、16世紀代に入るとほとんど遺物が確認できないという点が指摘できる。そして、3つの遺跡の盛行期は普濟寺の安定期と、また、衰退・廃絶期は古志郡司長尾氏の栖吉進出・入部期と対応する点が読み取れる。

前述のとおり、中道遺跡は三貫梨遺跡より古い様相をもっている。また、「地下式横穴」については墳墓説あるいは貯蔵庫説があるにしても、禅宗系の寺院跡と近接して検出される例が多々あるということから、中道は、「字三貫」以前の普濟寺（「大行寺」？）の所在地という想定も可能ではないだろうか。

なお、「大行寺」という俗称地名は中道の南東にあり（第2図-4）、珠洲焼の甕体部片が採集されている（小熊・広井1994）。また、その地点の字名は「山道」で、栖吉川の流域に「山道」・「中道」・「下道」という3つの字名が所在することは興味深い。「山道」→「中道」→「下道」と何らかの方向性を示しているのだろうか。これらの点から、俗称地名「大行寺」が残る前述の地点も、普濟寺の故地の候補地の一つと考えられるが、今のところ明確な検討材料は得られていない。

中道の中世集落の分析から、15世紀末から16世紀初頭に古志郡司長尾氏が栖吉に入部し、以後、栖吉城を中心として城下域を整備して行く過程で徐々に衰退し、集落機能は城下域に吸収されていったという様子が想定できるのではないだろうか。こうした状況は、発掘調査から詳細な内容が得られた三貫梨・松葉でも同様に想定でき、中道で得られた中世集落に関わる成果は、これら2つの遺跡を含めて今後、栖吉の中世をめぐる総体的な集落動向の変容を、さらに具体的に検討していくうえで重要である。

## 参考文献

- 石坂圭介 1993 『多賀屋敷遺跡調査報告書－第2次発掘調査報告書－』 越路町教育委員会
- 江坂輝弥・渡辺 誠他 1977 『新潟県中魚沼郡津南町沖ノ原遺跡発掘調査報告書』 津南町教育委員会
- 江崎 武 1985 「中世地下式壙の研究」『古代探訪叢II』 早稲田大学出版部
- 岡本郁栄 1980 「III遺構 4. 地下式横穴」『岩野遺跡』 柏崎市教育委員会
- 小熊 博史・広井 造 1994 『松葉遺跡－中山間地域農村活性化総合整備事業に伴う発掘調査－』 長岡市教育委員会
- 川上秀秋 1989 「中世の遺構・地下式坑」『岡遺跡』 (財)北九州市教育文化事業団
- 小林達雄 1988 「火炎土器様式」『縄文土器大観』第1巻草創期・早期・前期 小学館
- 駒形敏朗 1986 『三貫梨遺跡－第1次発掘調査－』 長岡市教育委員会
- 駒形敏朗 1987 『三貫梨遺跡－第2次発掘調査－』 長岡市教育委員会
- 駒形敏朗 1991 「三貫梨(さんがんなし)遺跡」『長岡市遺跡群発掘調査報告書－瓜割遺跡・三ノ輪遺跡・六右エ門清水遺跡・三貫梨遺跡－』 長岡市教育委員会
- 駒形敏朗 1992 「栖吉地区確認調査」『長岡市内遺跡発掘調査報告書－石動地区・南原遺跡・栖吉地区－』 長岡市教育委員会
- 駒形敏朗 1995 『中道遺跡－第1次発掘調査概報－』 長岡市教育委員会
- 駒形敏朗 1996 『中道遺跡－第2次発掘調査概報－』 長岡市教育委員会
- 駒形敏朗 1996 「下道遺跡」『長岡市内遺跡発掘調査報告書－舞台B遺跡・徳平遺跡・下道遺跡－』 長岡市教育委員会
- 駒形敏朗 1997 『中道遺跡－第3次発掘調査概報－』 長岡市教育委員会
- 駒形敏朗・寺崎裕助 1981 『埋蔵文化財調査報告書－岩野原遺跡－』 長岡市教育委員会
- 駒形敏朗・松井 潔 1983 『多賀屋敷遺跡調査報告書』 越路町教育委員会
- 五来 重 1985 「日本仏教と民間信仰」『日本の庶民仏教』 角川書店
- 五来 重 1994 「古代の葬送儀礼から見た現在の葬儀と葬具」『日本人の死生観』 角川書店
- 財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団 1993 「奈良崎遺跡(第二期)」『新潟県埋蔵文化財調査事業団年報』
- 鈴木俊成・寺崎裕助他 1996 『関越自動車道堀之内インターチェンジ関連発掘調査報告書 清水上遺跡II』 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 関 雅之 1971 『耳取遺跡 新潟県見附市耳取遺跡発掘調査報告書』 見附市教育委員会
- 高野栄市 1991 「中世の葬地一段切り状遺構」『五段田遺跡II』 五段田遺跡調査団
- 高橋 保 1992 「縄文中期後半の沈線を多用する土器群－新潟県の地域性の一例－」『新潟考古学談話会会報』第10号
- 高橋 保他 1992 『関越自動車道関係発掘調査報告書 五丁歩遺跡・十二木遺跡』 新潟県教育委員会
- 田中耕作 1989 「三十稲場式土器様式」『縄文土器大観』第4巻後期・晩期・続縄文 小学館
- 田中耕作 1990 「三十稲場式土器研究の現状と課題」『新潟考古学談話会会報』第5号
- 十日町市 1996 『十日町市史』資料編2 考古
- 寺崎裕助他 1982 『羽黒遺跡 新潟県見附市羽黒遺跡発掘調査報告』 見附市教育委員会



- 田海義正他 1990 『関越自動車道関係発掘調査報告書 清水上遺跡』 新潟県教育委員会
- 寺村光晴他 1961 『枥倉遺跡』(枥尾市教育委員会編) 吉川弘文館
- 長岡市 1989 『長岡のお寺とお堂—明治16年寺院・仏堂明細帳—』(長岡市史双書No.3)
- 長岡市 1992 『長岡市史』資料編1 考古
- 中田 英 1977 「地下式壙研究の現状について」『神奈川考古』第2号
- 中村孝三郎 1975 『根立遺跡』 長岡市立科学博物館
- 中村孝三郎 1988 『根立遺跡』 三島町教育委員会
- 中村孝三郎他 1957 『三仏生』 長岡市立科学博物館
- 中村孝三郎他 1965 『朝日遺跡』 越路町教育委員会
- 中村孝三郎他 1970 「上並松遺跡」『越路原総合調査報告書 朝日百塚・並松遺跡』 越路町教育委員会
- 丹羽 茂 1989 「中期大木土器様式」『縄文土器大観』第1巻草創期・早期・前期 小学館
- 広井 造 1997 「古志長尾氏入部前後の栖吉」『長岡市立科学博物館研究報告』第32号 長岡市立科学博物館
- 藤巻正信他 1991 『関越自動車道関係発掘調査報告書 城之腰遺跡』 新潟県教育委員会
- 村山 修・長沼智之 1991 「東京都周辺における中世地下式壙の分布」『五段田遺跡II』 五段田遺跡調査団

## 自然科学分析調査報告書

株式会社 古環境研究所

長岡市中道遺跡における放射性炭素年代測定

### 1. 試料と方法

No.	採集地点	試料	前処理・調整	測定法	備考
1	第20号住居跡	炭化物	酸-アルカリ-酸洗浄 ベンゼン合成	$\beta$ -線計数法	中道III期
2	VIF-P89	炭化種子	酸-アルカリ-酸洗浄 ベンゼン合成	$\beta$ -線計数法	中道II期
3	第66号住居跡	炭化物	酸-アルカリ-酸洗浄 ベンゼン合成	$\beta$ -線計数法	中道VIII期

### 2. 測定結果

No.	14C年代(年BP)	$\delta^{13}C$ (‰)	補正14C年代(年BP)	暦年代	測定No.beta-
1	4180 ± 60	-26.9	4150 ± 60	交点: BC 2860, 2815, 2680 2 $\delta$ : BC 2895 to 2560, BC 2525 to 2500 1 $\delta$ : BC 2875 to 2595	110005
2	4230 ± 60	-23.4	4250 ± 60	交点: BC 2885 2 $\delta$ : BC 2925 to 2850, BC 2820 to 2630 1 $\delta$ : BC 2905 to 2870, BC 2795 to 2770	110007
3	2760 ± 60	-26.8	2730 ± 60	交点: BC 845 2 $\delta$ : BC 980 to 805 1 $\delta$ : BC 910 to 820	110008

#### 1) 14C年代測定値

試料の14C/13C比から、単純に現在(1950年AD)から何年前(BP)かを計算した値。

14Cの半減期は5,568年を用いた。

#### 2) $\delta^{13}C$ 測定値

試料の測定14C/13C比を補正するための炭素安定同位体比(13C/12C)。この値は標準物質(PDB)の同位体比からの千分偏差(‰)で表す。

#### 3) 補正14C年代値

$\delta^{13}C$ 測定値から試料の炭素の同位体分別を知り、14C/12Cの測定値に補正値を加えた上で算出した年代。

#### 4) 暦年代

過去の宇宙線強度の変動による大気中14C濃度の変動を補正することにより、暦年代(西暦)を算出した。補正には年代既知の樹木年輪の14Cの詳細な測定値を使用した。この補正は10,000年BPより古い試料には適用できない。

#### 5) 測定No.

betaは、アメリカの $\beta$ (ベータ)社の測定番号を示す。

※上記は、編集の立場から研究所の報告書に加筆したものである。